
羅刹の宴

菩提樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羅刹の宴

【Nコード】

N0897I

【作者名】

菩提樹

【あらすじ】

人には見えないものが見え、使えない力が使える青年は、ある鬼とかかわったことをきっかけに妖魔として目覚めていく。徐々に変質していく彼は、やがて妖魔の中でも特異な存在となり、退魔士である親友とも敵対するようになるが…。

(1)

あ、まただ。

羅刹は視界に映った異常な光景に、軽く眉を顰めた。

異常、とは言っても彼にとつてはそれを目にするのは初めてではなく、むしろ日常茶飯事でさえあった。

すなわち、「化け物」を目にすることは。

「しかもラスボス級かよ……」

うんざりと呟く。

彼の視線のおよそ三十メートルほど先、交差点を挟んだ前方斜め左の位置には一目見て「化け物」とわかる人外の生物が佇んでいた。身長は約二メートル。体つきは人に近いが、それでもがっしりとしている上に、両腕には毒々しい赤い刺青のような模様が蛇のように絡みついている。遠目からでも、その腕から伸びる長い爪と、口から覗く鋭い牙は見て取れた。そして長く伸びた髪は燃え盛る炎のような赤だ。

顔つきだけは、精悍な青年のものだった。

ただ、その瞳の虹彩が爬虫類のように細く長いことを除けば。

一目見ただけで、その化け物より正確に言えば鬼、と呼ぶのだが、が強い力を持っているのはわかった。

これほど離れていても、その身の内でふつふつと煮えたぎる妖力で、皮膚を焼かれているような気がするのだ。

実際に近寄ったらどうなるのか、考えただけでも恐ろしい。

とはいえ、幸か不幸か、羅刹はこんな化け物を見るのは初めてではなかったし、見ないふりをしてやりすごすことができるくらいには慣れていた。すれ違っても顔色一つ変えない自信もある。

幸いにも、鬼と羅刹の距離はすれ違う必要がないくらい離れていた。

視線を引き剥がそうとして、しかしそのはずみに目に入った人物

に彼は今度こそはつきり顔色を変えた。

「晴菜ちゃん…？」

鬼の横に佇む華奢な少女は、羅刹のよく知る人物だった。

ぱつちりと大きな目に、抜けるように白い肌、今時珍しいくらいに黒い髪。

日本人形のように整った容姿は、遠目からでも見間違いようがない。鬼に気を取られていなければ、すぐに彼女と気づいただろう。

しかしよりによって鬼の隣に彼女が居るとは。

晴菜は、羅刹のように鬼の姿が見えるわけではないが、どうも魔に魅入られやすい体質らしく、身近に化け物が寄りついてることが多々あるのだ。ただ寄りつくだけならばまだしも、場合によっては晴菜を食おうとしていることも珍しくない。おそらく、その体質には彼女の家柄が関係しているのだろうが。

鬼が、晴菜に視線を向けた。

晴菜は気づいていないが、それは捕食者が獲物を見る目つきそのものだった。

身体が強張る。

落ち着け。いくら鬼とはいえ、こんな人ごみの中で襲うわけがない。まだ大丈夫だ。

信号が青に変わり、途切れていた人の波が一斉に動き出す。

鬼は、晴菜の数歩後ろを悠然と歩いて歩いていた。襲う機会を窺っているのだろう。羅刹はシャツの胸元に引っかけていたサンングラスをかけると、足早に近づき、「晴菜ちゃん」と声を掛けた。

「こんな所で何してるの？」

「日村さん」

無機質にさえ見えた晴菜の表情が、氷が溶けるように柔らかく綻ぶ。

「舞のお稽古の帰りなんです。日村さんは？」

「俺？俺はまあ、ぶらぶらと」

「もしかしてナンパですか？」

「……どうしてそうなるかな」

「兄さんが言ってました。羅刹の趣味はナンパだって。ええと、女の子をぶいぶい言わせてるんですって。そうなんですか？」

「いつの時代の人間だ、あいつは」

並んで歩きながら、ここにはいない、晴菜の兄を思っ
て溜息を吐く。確かに彼の家のことを思えば、兄妹揃ってずれていることも理解の範疇ではあるのだが。

「それで、君はそれを信じたの？」

「ありえないことではないですよ。だって日村さん、すごく綺麗な顔してますから……どうしていつもサングラスしてるんですか？」

「ああほら、俺って歩くだけで女の人が卒倒しちゃうから、公共の為にね」

「そうなんですか？でも勿体ないです。とっても綺麗なのに」

冗談のつもりだったのだが、晴菜は真面目に返事を返してくる。

確かに、客観的に見ても羅刹は美しい顔立ちをしていた。もともとときつい顔立ちの上に、口元がやや吊り上がって皮肉な雰囲気も漂う自分の顔を、しかし彼はあまり好きではなかった。

自分で言うのもなんだが、美しすぎるのだ。

世間で騒がれる芸能人やモデルなど比べ物にならないほど、羅刹の顔は整い過ぎていた。

あまりにも完成されすぎていて、およそ人とは思えない美貌、いわば魔性の美であったのだ。

父にも母にも、彼は似ていなかった。

母は極めて美人だったが、その母と比べても羅刹の美貌は際立っていた。鏡で見ると、その容貌が自分の異質さを示しているように、つい目を逸らすことも多かった。

「綺麗って、男に言う言葉じゃないでしょ」

背後の鬼から意識を逸らしてしまいそうになり、気を取り直して軽口を叩く。

「綺麗なのは晴菜ちゃんじゃないの？彼氏とか、いてもおかしくな

と思うけど」

「か、彼氏なんて、私にはまだ早いです」

晴菜の白い頬が赤く染まる。

「ほ、本当言うと、告白してくださった方は何人かいたんですけど、私は、その、好きとかよくわからなくて……こんな気持のまま付き合っても失礼だと思って断わってしまったんです」

「晴菜ちゃんらしいねえ。でも、試しに付き合ってみればよかったんじゃない？そのうち好きになるかもよ。最初はさあ、そういう軽い気持ちでもいいと思うけど」

「……日村さんもそういう気持ちでお付き合いしている方がいらっしやるんですか」

「まさか。俺もてないもん」

「嘘。信じられません」

「いや、本当。なんかさ、パツと見、俺って同じ人間に見えないらしくて」

「？」

不思議そうな顔で見上げてくる晴菜に軽く笑いかけ、「それより」と話を変える。

「本当に彼氏ができたら晴久になんて言うか考えなきゃね。あいつ、晴菜ちゃんに彼氏がいるなんて聞いたら、呪い殺しかねないし」

「いくら兄さんでもそこまでしませんよ」

「どうか」

少なくとも羅刹の知る御門晴久なら、やる。必ずやる。

その現場を想像して笑いそうになるのを喉の奥で噛み殺す。丁度、晴菜の家の前についたところだった。

「いつ見ても豪勢なお屋敷なこと」

都会の真ん中に建てられるには些か古めかしく、巨大な日本家屋。周囲にはぐると堀が聳え立ち、大時代的な門の前には門番らしき人間までいる。

目に見える特徴だけでも特異ながら、それ以外の特徴、つまり羅

刹のような人間にしかわからない特徴においても、この屋敷は普通ではなかった。

屋敷の中心を起点として、屋敷全体を守るように結界が施されている。かなり強力な、おそらくは晴久かその叔父の手によるものだろう、綻び一つ見当たらない。妖魔が近づこうとすれば、一瞬で蒸発してしまうことは必至だ。

「相変わらず物騒な屋敷だ」

その言葉の意味は晴菜に伝わらなかっただろう。小首を傾げている。

それに「なんでもない」と首を振って、踵を返した。

「じゃあ、俺はこれで」

「上がっていかれないんですか？兄さんも今日は家にいるはずですけど」

「ちよつと野暮用でね」

羅刹は妖魔の気配には鋭い。先程の鬼が今も背後に、しかもそう離れていないところにいることは察知していた。

晴久がいるならば晴菜はもう安全だし、放っておいてもこの鬼も片づけるだろうが、できればそうはしたくない。

ひらひらと片手を振って、晴菜に声をかける暇を与えず、羅刹は足早に元来た道を引き返した。

予想通り、そう離れていないところにその鬼はいた。

といつても、サングラスを通して見ると、禍々しい刺青や鋭い爪など持たない、ごく普通の青年のように見える。別に羅刹のサングラスが特別製なわけではなく、サングラスを掛けると、なぜか化物の本当の姿を視認できなくなるのだ。視認できなくともどうせ人ならざる者は気配でその存在を主張しているのだから、化け物の存在そのものを無視することなどできないが、見た目だけでも普通の人間に見えるのならばその方が精神的に楽だ。

それに、サングラスは羅刹の容貌を一部とはいえ隠してくれる。

鬼は、本来の凶悪な姿など想像もできないほどに普通だった。

長髪を肩で遊ばせ、黒いジャケットとジーンズを身につけたなかなか精悍な青年。ただその目だけが、人間ではない何か野生の獣を思わせる。

何気なく建物に寄りかかるその男に、羅刹は「そのあんた」と軽く声を掛ける。

「あ？」

まさか自分に声をかけてくる者がいるとは思わなかったのだろう。やや意外そうに、男は胡乱な目を向けてくる。

「俺に何か用か？」

「あの娘はやめておけ」

前置きも何もなく、羅刹は一方的に用件を告げる。

「あの娘は御門家の一人娘だ。何かあれば一族総出でお前を狩るぞ」
「何言ってやがる」

「お前ほどの鬼ならわかるだろう。あの娘を食うのは易しいことだが、それで力をつけた分を割り引いても御門一族の方が上だ。それにもしてお前が勝てば、俺がお前を殺さなきゃならない」

「自分が何を言ってるかわかってるのかあ？人間」

男が殺気を隠そうともせず、威嚇するように牙を剥き出す。サングラスを掛けている今、鬼の本性が見えるはずはないが、羅刹の挑発に乗って外見を誤魔化す術が不完全になったのかもしれない。

それに思い当たると、羅刹は無理矢理に男を路地裏に引っ張りこんだ。

無造作に男を壁に押し付け、「馬鹿か」と叱りつける。

「こんな所で姿を現したら、人目につくだろうが。コスプレで誤魔化すには無理があるぞ！」

男がきよとした顔で見下ろして来る。その機に乗じて、口を塞ぐように羅刹は言葉を継ぐ。

「それと簡単に妖気を放つな！俺だから良かったものの、晴久だったら殺されてるぞ」

「何なんだよ、お前は」

どこか呆氣に取られたように、男が呟く。

確かに普通の人間が自分の本性を見破り、しかも敵意を向けてこないとなったら戸惑うだろう。鬼の姿を見れる人間は、多くはないとはいえ羅刹以外にもいるが 現に親友の晴久がそうだ 鬼を鬼と認識した人間は彼らを排除しようとするものだ。

鬼の方も、人間を捕食対象としか見ていない。それは長年、少なからず妖魔と出会い、時には言葉も交わしてきた羅刹にはわかっていた。

だが羅刹の方は、普通の人間とは違う認識を、妖魔に対して持っているのだ。

「喰いたいなら、別の人間を喰え。わざわざ食事に命賭けることもないだろ？」

今度こそ、男はぽかんと口を開けた。

人間を喰うな、ではなく、他の人間を喰え、と他ならぬ人間の口から言われるとは予想だにしないことであつた。

「……お前、人間、だよな？」

疑わしげに眺めてくる男の額に、羅刹はでこぴんを叩きこむ。

「いてえ！！」

「返事は？」

「っ！さつきから何なんだよてめえは！こっちが黙ってりゃあいい気になりやがって！！」

血の気の多さを隠そうともせず、男が喚く。

黙っていると、野生の獣のような雰囲気だったが、今の男は凶体のでかい餓鬼にしか見えない。

男は勢いよく羅刹の腕を振り払う。

「俺が誰を喰おうがてめえの知ったこっちゃねえ。てめえこそ命が惜しければさつさと消えろ」

「ったく、餓鬼が」

「ああ！？」

「ああ、餓鬼っていうよりもお子様かな？吼えるなら自分の実力ぐ

らい把握しておけよ」

「死にたいらしいなあ、人間」

男の目つきが殺気を帯びる。爬虫類のような虹彩がまっすぐに羅刹を見据える。

容姿は未だ人間のままだったが、腕から伸びる爪は太く鋭い、鬼のものだった。

半身に構えた男、いや鬼を羅刹は見返し、言った。

「残念ながらお前の相手をしてやる暇はないな」

言うなり、鬼に向かってもう一度でこぴんする。

今度は本当にやったわけではなく、指で弾く真似をしただけだ。

だがその瞬間、鬼は物凄い勢いで後ろに吹き飛んだ。まるで暴風に飛ばされたように、その姿は一瞬で羅刹の視界から消え、数秒してなにかにぶつかっただような派手な音が、遠くから聞こえた。

「…ちよつと強すぎたかな」

「何がだ？」

背後から、鬼のものとは違う見知った声が問う。

肩を竦め、羅刹は悪戯が見つかった子供のような顔で振り向いた。彼の親友が、そこに立っていた。

(2)

「お早い到着で」

へらへらと相好を崩す羅刹に、友人 御門晴久は冷めた視線を
寄越す。

「質問に答えてない」

「質問って？」

「とぼけるなよ。『強くし過ぎた』って何のことだ？強い妖気を感じたから来てみれば、妖魔じゃなくお前がいるのはどうしてだ？」

「それこそどうして訊くんだよ？優秀な晴久君なら、とつくにわか
ってるんだろ？」

「俺が何をわかってると思うんだ？」

「何だろうなあ」

「…」

「…」

はあ、と腹の底からの溜息を晴久が吐く。

「こういう時、お前には腹が立つよ」

腹が立つ、と言いながらも表情に怒気は見えない。どちらかとい
えば呆れの色が濃い。

冷徹に見えるが、晴久は滅多なことでは腹を立てない。おまけに、
これは親しい者しか知らないだろうが、かなりのお人好しでもある
のだ。

もつとも、本人にその自覚はないと羅刹は踏んでいる。

「俺はこういう時、お前が優しいと思うけどな」

「…頭は大丈夫か？」

「照れるな照れるな」

「いや、俺は困惑してるんだが…って話を逸らすな」
「ちっ」

「舌打ちするな。お前のことを本家に報告するつもりはない。肝心

の妖魔は既に逃げたようだしな。一応、一般人のお前のことを巻き込んだなんて叔父に知られたら、面倒なことになりそうだ。これが初めてじゃないから口外する心配はない、なんて言えないしな」

だが、と考え深げに続ける。

「御門本家の結界内に入り込んで、俺にも気づかれなかったなんて相当な位の妖魔だ。妖気を感じ取れたのだって、一瞬だったしな。人に危害を加えるようならば御門家の一員として、排除しなければならぬ」

「まさか俺に協力しろなんて言わないよな？」

「できればそうして欲しいんだが……その気はないんだろう？」

「当然でしょーが。そんな面倒なこと、御免だね。お前は別として、俺は力のことを他人に知られたくないんだよ」

これは本当だ。

晴久にだって、たまたま知り合ったその時に不可抗力で力のことを知られてしまったから隠していないだけであって、自分から打ち明けたのではない。

「だがお前が手伝ってくれば、罪の無い人々が妖魔の犠牲になることを防ぐことができる。鬼見の力を持つ者は、そう多くはない。それでは宝の持ち腐れだ」

一口に妖魔といっても、様々な妖魔がいる。

位が上のものほど力が強く、人間の目を誤魔化す術にも長けている。だから、位が上の妖魔の正体を見破るためにはより強い力が必要とされる。

「鬼見」とは最上級の力の持ち主を示す言葉であり、その名の通り鬼を見ることができる人間のことだ。あらゆる妖魔の中で最も位が高いのが鬼であることから、そう綽名されたいらしい。

羅刹も晴久も、その「鬼見」だった。

だが、同じ年でありながら二人のスタンスはまるで違っていた。

羅刹が普通の家庭に、突然変異的に生まれたのに対し、晴久の生家は妖魔退治を生業にする、しかも同業者の中でも頂点に立つ力と

権威を持つ御門家だ。

そんな家で幼い頃から育てられた晴久は「鬼見」という能力を持つ者は妖魔を倒すのが義務と考えており、その立場に誇りを持っているのだろう。

生真面目に正論を唱える友人を見返し、羅刹は皮肉っぽく笑った。
「俺は『宝』だなんて思っちゃいないから。御門家の優秀な方々に混じって正義の味方なんて、畏れ多い」

「茶化すな」

「ああ、悪い。ぶっちゃけて言うとき、お前の家ってどうも苦手なんだよね。堅苦しいっていうか、まあ伝統あるお家はみんなそうなんだろうけど。お前に迷惑かけるのがおちだと思っし」

「いい。わかった。考えてみれば、俺の家業に無理やりつき合わせて怪我でもさせたら取り返しがつかないからな。忘れてくれ」

その代わり、と目つきに更に真剣味が増す。

「お前が見た妖魔の特徴を教えてくれ。高位の輩なら、蔵を探せば特定できるだろう」

「俺、妖魔見たなんて一言も言っていないんだけど」

「お前は見てないなら見てないと言っだろう」

「言っの忘れてたんだよ」

「もう遅い。言っておくが、見ていないという返事は受け付けないぞ」

晴久は逃げ場を塞ぐように、通路に立ち塞がり、生真面目な笑みを浮かべた。

「俺と一緒に現場に出たくなければ、大人しく吐け」

結局、目撃した妖魔が鬼だということをはじめ、その特徴まで事細かに吐かされた羅刹は精神的な疲労を感じ、まっすぐ自宅へ帰った。ただでさえあの鬼と話して、余計な緊張を感じていた直後に晴

久の尋問は辛すぎる。

晴久はけして見た目通りの真面目人間ではないが、見た目通りの部分もある。

まあ、御門家の当主に近い血筋の者として幼い頃から期待され、躰けられればそういうふうには振舞うのが当然なのかもしれない。だからこそ羅刹は、妖魔に対する自分の本当の見方について素直に話せないのだ。今もそうだ。あのどこかガキっぽい鬼の容姿や印象については話したが、羅刹が「他の人間を喰え」と唆したことや、妖魔を殺したくないと思っていることは口にできなかった。

言えるわけがないのだ。

まだ「妖魔が同じ生き物だから殺すのは哀れだ」という理由ならいいが、羅刹が妖魔殺しを忌避するのはそういう優しい理由からではないのだから。

晴久は、きつと理解できないだろう。

彼はそれこそ、妖魔は殺すべき悪として遺伝子レベルで刷り込まれている。羅刹が本当は妖魔をわざと逃がしていると知ったら、軽蔑と嫌悪しか感じないだろう。

そういう男なのだ、あいつは。

生真面目で、冷たく見えるのに羅刹が巻き込まれないように心を砕くようなお人好しで、そのくせ時代遅れなくらい正義感が強い。

そういう男だから、言えない。

絶対に言えない。

何となく落ち込んで、溜息を吐く。

このことは考えても仕方がない。今まで通りやっていくしかないのだ。晴久の信用を利用してダブルスタンダードという今の立場が気に入っているわけではないが、他にやりようもない。

とりあえずは早く自分の部屋に帰って、ベッドに入りたい。

思いつきり眠ってしまえばすっきりするだろう。

そう決めて、羅刹は足早に自分のマンションがある方へと向かった。

一方、羅刹に吹き飛ばされた鬼　刹那は怒り心頭だった。
たかが人間ごときにいいようにやられた屈辱を笑って忘れられる
ほど、彼は温厚な性格ではないのだ。

刹那は弱くない。むしろ鬼の中でも五本の指に入る強さであると
自負している。

自分よりも強いと素直に認められるのは、父親ぐらいだとすら思
っている。もつとも、これには異論が出る余地はあつて、たとえば
すぐ熱くなるところは欠点だとか幼馴染によく指摘される。実際、
単純な力比べならまず負けないその幼馴染に、よくそこを利用され
て負かされている。

だからあの人間の挑発に引つかかつて隙を突かれたことは、より
いつその屈辱だった。

幼馴染は、刹那より弱いと言っても鬼である。

それにやられるのはまだしも、自分より遥かに劣る人間に盛大に
弾き飛ばされるなど、断じて許してはおけない。

人間など虫けらだ。

弱いくせに繁殖力には優れているようで、数だけは圧倒的だが何
の役に立つというのか。

せっかく餌として役立ててやっているのに、喰い過ぎれば退魔士
とかいう連中がしゃしゃりでてきてこちらを攻撃してくる。鬱陶し
いことこの上ない。

力で劣る連中に配慮してやる必要が、どこにある？

刹那は今まで好きに人間を喰ってきたし、それを邪魔する連中は
人間だろうと妖魔だろうと皆殺しにしてきた。

人間の中には、刹那の姿を見たり、攻撃する術を持っている者も
いたが、所詮刹那の敵ではなかった。

だからあの人間にも思い知らせてやらなければならない。

かなりの距離を吹き飛ばされた時は驚いたが、鬼の肉体はちょっとやそつとでどうにかなる代物ではない。おまけに、吹き飛ばされたおかげで退魔士の索敵範囲から逃れられたらしく、あの人間を心おきなく見張ることができた。

どうやら刹那の気配を察知して現れた退魔士は、あの憎き御門家の一員らしい。

人間は退魔士に勧誘されていたが、断っていた。そこだけは褒めてやってもいい。

だが刹那の特徴を洗いざらい喋っていたのは許しがたい。今後の狩りが厄介になりかねないからだ。

その場に乱入して自分に言ってきたことをぶちまけてやろうかと思ったが、思いとどまった。それでは後々あの退魔士に邪魔されるかもしれないし、あの人間に近づきずらくなる。

人間はへらへらしていたくせに、あの退魔士と別れるとやけに深刻な顔で何か考え込んでいた。

まあ、そのおかげで刹那が後をつけているのもわからなかったよ。うなので、よしとしよう。人間が何を考えていようが、興味はない。隙だらけの人間を襲うつもりはなかった。

背後から襲わなければ人間一匹も仕留められないと知られたら、いい笑いものだ。

人間の住処は突き止められたので、おりを見て訪ねればいい。もっとも、あれほどの強い気配を放っていれば、どこにいてもすぐわかりそうなものだ。

他の奴らにやられないうちにきっちりかたをつけなければならないだろう。

自分が訪ねて行ったら、どんな顔をするだろう。

怖れるだろうか。泣くだろうか。命乞いをするだろうか。逃げだすだろうか。

なぜかどれもありそうになかった。

ならばなぜ自分はこれほど高揚しているのだろつとふと疑問に思

つたが、考えても仕方がないのですぐに考えるのを止めた。
久しぶりに楽しみなことができたのだ。それで十分ではないか。

(3)

「変なものが見える」

羅刹は母にそう言った。

「あれは何？」

母は羅刹の指した方向を見て、それから羅刹を見下ろし、嫌悪に満ちた表情を浮かべた。

それは「変なもの」に対する嫌悪ではなく、羅刹自身に対する嫌悪だった。

「何もいないわよ」

羅刹は困惑した。

まだ幼い彼には、自分に見えているものが母に見えていないと理解することができなかったのだ。

「狐さん、いるよ」

「いないでしょ」

「でも」

「うるさい!!」

手を振り払われ、勢いよく突き飛ばされた。

声もなく床に転がった羅刹は、なぜそうされたかもわからずに母を見上げた。

「お母さん……」

「うるさい!うるさいのよ、あんたは!どうしておかしなことばかり言うの!?!どうして普通の子みたいにはできないの!?!」

母は、子供の鼻肩目を抜かしても美人だった。

その母が髪を振り乱し、金切り声で叫ぶさまはいつそう恐ろしく、そして悲しかった。

自分のせいで母を悲しませている。そんなつもりではないのに。自分が口を開くと、母はいつもこうなる。

ごめんなさい、と言おうとした羅刹の言葉に被せるように、母は

絶叫した。

「あんだなんて生まなければよかった!!」

胸に圧迫感を覚えて、羅刹は目を覚ました。

視界に自宅の、何の変哲もない天井が映って、それでようやく夢を見ていたことに気づく。

僅かな安堵と、寂寞の残滓が胸に広がる。

ゆっくりと目を閉じると、涙が一筋、頬を伝った。

そしてなぜか、指先がそっとそれを拭う感触がした。

反射的に目を開け、頬を撫でる手を捕まえる。細い、子供の手だ。掴んだ瞬間、びくりと震える振動と氷のような冷たさを感じる。

「は、はなせっ」

どこか慌てたような、少女の声が耳を打つ。鈴を振るような愛らしさと、支配者の高慢さを同時に備えた、アンバランスな声だった。羅刹はその声を無視して、「何してるんだよ」と呟く。

圧迫感の正体であり、声の主は羅刹の腹に跨り、胸の上に腹ばいになった状態で可愛らしく笑んだ。

「見てのとおり、遊びに来たぞ夫殿」

「その呼び方はやめろっの」

「未来の夫を夫と呼んで何が悪い」

「未来永劫、俺はお前の夫になるつもりないから」

少女は、何を言っている、といわんばかりに眦を吊り上げる。

「わらわが夫と決めたのだからそなたは夫だ。身体はまだ未熟だが、いずれ成長するぞ？そなたの好みに育てるがよい。人間にはそういう物語があつたであろう」

「はいはい。わかったからどけよ、白夜」

「子供扱いするでない!」

白夜は憤慨しつつも、身軽にベッドから飛び降りる。

体重を感じさせない、猫のような動きだ。名前のとおり、青ざめたような色の肌と、雪のように真っ白な髪を腰まで伸ばしている。その爬虫類のような虹彩の、金色の瞳とがった耳の意味するところを知らなければ、白猫を連想するだろう。

白夜は、腰に手を当てて、口を突き出す。

「そもそもおぬしが悪いのだ。わらわが訪ねてきたというのに、昼間から寝ておるから！」

「昼？」

ベッド脇の時計を見ると、短針は十一を指していた。

ブラインドからは光が射し込んでおり、部屋は明るい。

確か昨日は、晴久と話してからまっすぐ部屋に帰って来たはずだ。夕食前に少し寝るつもりでベッドに入ったのが六時ごろ。それからまる十七時間も寝ていた計算になる。

「まじかよ……」

「まあ、寝るのはまだよい。わらわも昼寝は好きだ。夫に添い寝というのも乙なものかもしれぬ。だが苦しげにうなされておればその苦しみから救ってやるのが人情というものである」

人間でもないのに、人情などと胸を張って言うのがおかしい。

だが白夜がいなければ、朝から憂鬱になるところだったかもしれない。思わず苦笑いする羅刹をどう思ったのか、白夜が「なんだ」と咎めるような視線を向けてくる。

「おぬし、何か文句があるのか？」

「いや」

ぼん、と白夜の白い頭に手を乗せる。

「ありがとな」

「う、うむ」

白夜の頬が赤く染まる。こういうところは子供っぽい。

にやにやする羅刹に「笑うな！」と怒るが、やはり恥ずかしいらしく、俯くように視線を逸らす。

「親切で起こしてやったというのに、恩知らずな奴め。せっかく、

今日はわらわが昼餉を作ってやろうと思っていたのに」

「どうせ俺に教えるって言うんだろ」

白夜はやたらと羅刹に食事を作りたがるが、その実、料理などしたことがないらしく、いつも羅刹が教えなければならぬ。そして結局、八割方羅刹が作ってしまうのが常だった。

「う、うるさい！わらわにできぬことなどない！超絶美味な昼餉を用意してやるゆえな！そこで待っておれ！」

言うなり、身を翻して駆けてゆく。行く先は台所だろう。

白夜なりに気を遣っているのかもしれない。

うなされていたのも、わずかとはいえ涙を流していたのも見られてしまったが、不思議と羞恥心を感じることも気まずい思いをすることも免れている。

そういえば、なぜうなされていたのかも訊かれなかった。

普段は子供っぽく我侘な彼女を拒絶しないのも、こういう面に救われているからかもしれない。

どうせ羅刹が「来るな」と言っても、人ならざる身である彼女を拒むすべなどないのだが。

思い出す。

初めて白夜に会ったのは、雨の強い夜のことだった。

大学から帰って来る途中に雨に降られ、慌ててマンションに駆け込もうとした羅刹を阻むように、彼女が座り込んでいたのだ。

一目で人でないことはわかったものの、驚いた。

全身びしょぬれで、おまけに裸足だ。思わず声を掛けてしまったのを後悔する前に、その途方に暮れたような眸に息を呑んだ。

参ったな、と思ったのを覚えている。

そんな捨てられた猫のような目をされたら、無視できないではないか。

人間か、そうじゃないかといったことは、思考の端にもかからなかった。

部屋にあげて、シャワーを浴びさせて、強引に髪を拭いて、ベッ

ドに押し込むことは義務にすら思えた。

白夜は、もつともその時は名前すら知らなかったのだが、大人しくそれに従った。

翌日、目覚めてみると彼女は消えていた。別に引きとめる気もなかったたので羅刹はいつもどおりの日を過ごしたが、二、三日経つとまたマンシヨンの前で座り込んでいたのだ。

「何してんの」

やや意外に思いながらもそう訊ねると、白夜は無表情でこう言ったのだ。

「部屋に入れろ」

「部屋に入れて下さい、だろ」

意地悪く言ったことに意味はなかった。だが途端に怒りを浮かべた白夜を見て、無表情を壊したかったのだと自覚した。

「よくもわらわにそんな口を！わらわが誰かわかっておるのか！」

「鬼か狐？毛の色は狐っぽいけど、目の形は鬼っぽいよな。どっちなんだ？」

伊達に「鬼見」と呼ばれてはいない。晴久のように自ら妖魔を求めて奔走しているわけではないが、二十一年の人生中で何かと妖魔には詳しくなった。だからといって、目の前の少女がどういった種族の者なのかに興味があったわけではない。適当に訊ねて、そういうば名前を聞いていなかったことを思い出す。

「まあ、それはどっちでもいいけど、お前名前は？」

「……白夜」

渋々といった感じで、少女が答える。

「俺は羅刹。で、入るのか入らないのか、どっちなんだよ」

「だから、入れると言っておろう！！」

「だから、入れて下さい、だろ」

「くっ！」

何やら葛藤している姿を可愛いと思ったのは、今にしてみれば最大の不覚だった。

そのまま鬼だか狐だかわからない少女は、羅刹の部屋に居着いてしまった。毎日ではないが、勝手に部屋に入ってきては寛いでいる。寛ぐだけならまだしも、羅刹にまわりついて相手をさせようとするとところが始末に負えない。

それを本気で追い出そうとしない羅刹も羅刹だが、当初こそ遠慮が見られたものの今や羅刹を勝手に夫扱いし、料理教室の先生役までやらせている白夜は何なのだろうか。

…そういうえば昼食を作るとか言っていたような気がする。

やれやれ、と腰を上げ、夢のことを意識から追いやり、白夜の後を追った。

(4)

「……おい」

「なんだ」

「なんだじゃない。これ何だよ。何作ったらこんな惨状になるんだ」
台所は酷い有様だった。あちこちの戸棚が勝手に開け放され、あらゆる調味料の瓶や袋が所狭しと散乱している。さらに換気扇を回していないのか、それとわかるほどに煙の臭いが充満している。

その惨状を引き起こした白夜本人は、フライパンから野菜らしきものを皿の上のスパゲティに移しているところだった。

羅刹の顰め面もなんのその、涼しい顔で皿を二つ持って、とことことテーブルの方にそれを持ってくる。

「そんな顔をしてどうした夫殿？ 腹が減ったのか？」

「違うっつーの」

「心配するな！ わらわが丹精こめて作ったすばげていだ。存分に舌鼓を打つがよい」

「……」

なぜ微妙に上から目線なのか。

しかし得意満面の白夜の顔を見ると腹も立たない。それに、相手は人外だ。人間の台所の使い方など知らなくても当然だろう。自分のために作ってくれたのだと思えば、やはり嬉しい。

文句を飲み込んで、羅刹は大人しく席に着いた。

見た目は普通のスパゲティだ。初めて作ったにしては上手い。

一口、食べてみる。

「どうだ？」

どこかおずおずと訊ねてくる白夜に、羅刹は目を向ける。

「美味しい」

実際、麺の硬さも味付けも標準以上のバランスで出来上がっていて、意外なほどである。

よく自炊する羅刹は割と料理も上手い方と自負しているが、それと比べても見劣りしないのではないか。

褒め言葉に白夜はぱっと破顔する。

普段、年の割に　もつとも妖魔に外見年齢が意味をなすかは疑問だが　尊大で大人びて見える少女の無邪気な笑顔に、羅刹の方がどきつとする。

何気ない褒め言葉にここまで無防備に喜ぶとは思わなかったのだ。「そうかそうか、やはりわらわに出来ぬことなどないのだなっ。男は胃袋で掴めとも言っしな。これでいつでも嫁入りできるぞ夫殿」

「だから夫にはならないって」

もぐもぐとスパゲティを食べながら、そこにはしっかりと反論する。白夜はむっとしたような顔で羅刹を睨む。

「なぜだ！」

「なぜって無理だろ」

「わらわの何が不満なのだ！言ってみろ！」

ばん！とテーブルに両手を叩きつける。少女の細腕とは思えないほどぐらぐらとテーブルが揺れ、こんなところで白夜が人間でないことを実感する。

まあ、今更この程度で怯える羅刹ではないが。

「聞いておるのか？どうしてわらわと結婚できぬのだ、夫殿」

「むしろ、どうして俺と結婚できると思うのか聞きたいよ」

「何か問題があるのか？」

「あのね、俺は人間：まあ、一応人間だし、お前は妖魔だろ？人と妖魔は結婚できないの」

「わらわは気にせぬ」

「俺が気にする」

「：おぬしはわらわが嫌いなのか？」

「いや：嫌いでは、ない、けど」

「そうか！ならば何の問題もない！人間はどうか知らぬが、妖魔は強い人間とならば結婚しても問題はないのだぞ」

そうなのか。

だが別に知りたくなかった情報である。

「待て待て。お前はまだ子供だろ？俺はロリコンじゃないし、第一お前の親が許さないだろうが」

「……わらわに親はいない」

一瞬、寂しげな色が少女の双眸をよぎる。

だがそれは本当に一瞬で掻き消え、いつもの強気な眼差しに戻っていた。

「それにわらわのこの姿は、わざとそうしているのだ！少々、一族内で揉めておつてな。わらわが順当に育つとぼんくらと結婚させられるので、無理に術をかけて成長を止めておるだけだ。戻そうと思えば、いつでも戻せる」

「お前、婚約者いるの」

「ああ」

白夜の口調は実に忌々しそうである。

「わらわも、そやつもお互いを嫌い抜いておるがな。だがわらわがおらねば、そやつは一族の長になれぬと掟で決まっておる。だからあやつは何としてでもわらわと祝言を挙げる気であるうが……わらわが人妻の身であると知れば、さぞ悔しがるであろうよ」

「いやだから俺は結婚しないって」

「なぜそこまで拒むのだ！！他に好きな女子がいるのか？」

「いないけど……」

「そうであるう。人間の女におぬしは勿体ない」

「いや、むしろ逆じゃね？」

「どついう意味だ？」

「いや、何でも……」

白夜は怪訝な顔をするが、それよりも大事なことを思い出し、再び羅刹に迫る。

「では何が不足だ？わらわが人間でないことを気にするおぬしではあるまい。そうであるなら、最初からわらわを捨てたりするまい。

こうして共にいることを許すこともあるまい。わらわはおぬしが好きだ。おぬしとずっと一緒にいたいのだ。何も、おぬしを人間の世界から引き離そうというのではない。わらわを妻として認めてくれればいいのだ。どうしても結婚できぬと言ふのなら、その理由を教えろ。でなければ引き下がらぬ」

白夜の目はいつになく真剣だ。

茶化せる雰囲気ではない。

見た目、十二、三歳の少女に内心を吐露することに少々抵抗を感じる羅刹と、理由を聞くまで引き下がる気のない白夜の間に沈黙が落ちる。

俺は話す気なのだろうか。

琥珀のような深い金色の瞳を見つめ、羅刹は自問する。

誰にも、晴久にも言ったことの無い本音をこの得体の知れない少女に、話すつもりなのだろうか。

なぜ？

話してどうする？

確かに白夜といることは、驚くほどに自然だ。邪魔だと思ったこともないし、可愛いとも感じる。

だが自分の惨めな部分、晒したくない部分を晒してまで手放したくないかと言え、それは違ふとも思ふのだ。

羅刹は誰も必要としていない。

そして本当の意味で誰かに必要とされることも、おそらくない。

白夜が羅刹を好きと言っているのは多分本当だろう。多少、勢いで言っている部分もあるだろうが、ここで羅刹がうんと言え、すぐにでも拳式しそうな気配だ。

だが彼にその気はない。

種族や年齢の壁を別にしても、そして白夜を好きか嫌いかといった感情すら関係なく、羅刹に結婚する気はない。

それを説明するには心の奥にしまった痛みを思い出さなければならぬのだが…。

別にそんなことをする必要はないんじゃないか？

ちよつと茶化すか、お子様に興味はないとでも言つてやればいい。白夜は怒るだろう。

真剣にプロポーズしているのに、誠意がない対応だ。怒るか罵るか、どちらにしても羅刹に失望して二度とそんなことを言い出さないだろうという確信があつた。

しつこく迫るなどこの少女のプライドが許さないに違いないからだ。

それでいいじゃないか。

本音など曝け出しても、互いに傷つくだけだ。

羅刹は我が身が可愛いのだ。

どうしようもないくらい、自己愛の塊なのだ。

自嘲気味にふ、と笑みが漏れる。そこから何を感じたのか、白夜の眸が小さく揺れる。

視線が交わり、止まった時間を動かそうと羅刹が口を開く。

「俺は」

ピンポン。

言葉を遮つたのは玄関のチャイムだった。

確か、来客の予定はなかったし、友人が訪ねてくるにはおかしい時間だ。本来ならば羅刹は大学に行っていたはずなのだから、それを知らない相手ということだろう。

眉を顰めると、「出ないのか」と白夜が訊ねてくる。

「ああ、出る。お前、一応隠れてろ」

隠れる、とは文字通り隠れることではなく、普通の人間に見えないようにしろ、という意味だ。

人形に近い妖魔は普通の人間の目には人間として見えているが、存在そのものが見えていないわけではない。妖魔にとっても、姿そのものを隠すのは疲れることらしく、見た目だけを誤魔化している場合がほとんどなのだ。

今の白夜も羅刹以外の人間には普通の少女のように見えているが、

念のため「存在そのもの」を隠せ、つまり「姿を見えないようにしろ」と言ったのだ。

白夜を背にして、インターホンの受話器を取る。

「はい？」

『私よ。開けて』

返ってきた声が一瞬、誰のものかわからなかった。

数秒おいて、声の主に思い当たる。もう長いこと、聞いていなかったから忘れていた声。

返事もせずに受話器を置き、ふらふらと玄関に向かう。

鍵を開ける前に、無意識に躊躇し止まった手を、意識的に動かし、機械的に鍵を開ける。

かちやり、と軽い音と、続いて金属の軋む音。そして開いた扉の向こうに、その女　羅刹の母は立っていた。

反射的に、変わっていないな、と思う。

最後に会ったのは六年前だっただろうか。羅刹が家を出たのは高校入学と同時だった。羅刹と母の不仲を　正確に言えば、母の羅刹に対する嫌悪を　憂えた父が、実家から離れた高校に通うことを提案してきたのだ。

母は止めなかった。羅刹も止められるとは思わなかった。

ただただ、この家から離れなければ、という強迫観念だけがあつた。母の自分を見る目、まるで下等生物を見るあの目から逃れたかった。

そして今、再会して思ったのだ。

ああ、変わっていない。自分を見る目は、全く変わっていないな、と。

「突っ立ってないで、入れてちょうだい」

母は、きつい眼差しを向けてくる。美しいが、攻撃的とさえ形容できるほどにきつい顔立ちだ。羅刹自身も人にきつい印象を与えることがあるが、顔のパーツ自体は母と似ても似つかなかった。あらためて見ても、血が繋がっているとは思えないほどに似ていない。

「じろじろ見ないで」

「あ、ごめん」

「あんたに見られるとぞっとするわ」

「……」

母は、羅刹をまともに見ることなく、ヒールを脱いで上がり込む。

「……久しぶり」

何と言っているかわからずに後ろからかけた声は、黙殺された。

いい加減、慣れてもいい筈だが、この反応にはやはり傷つく。

六年という歳月が母の自分に対する認識を変えていると、無意識のうちに思っていたのだろうか。だとしたら自分も随分、甘ちゃんだ。

頭を振って、母の後を追う。

部屋に足を踏み入れると、母の目線が一瞬、白夜の上に留まったようだった。が、気のせいだったようだ。すぐにその視線は逸らされる。母は超の付くほどの現実主義者で、人ならざる者を見る才などこれっぽっちもないのだ。そのことだけが、羅刹が母について知っている唯一のことだった。

「単刀直入に言うけど」

一通り部屋を観察し終えると、母は敵でも見るような目で羅刹を見た。

その目を見たくなくて視線を微妙に避けることを覚えたのは、物心ついてすぐだったか。

「何？」

「もう家に戻ってこないでちょうだい」

「……そのつもりだけど」
本当だった。

高校の時は金銭面のほとんどを父に頼っていたが、今は学費のみの援助に留まっている。バイトに精を出したことで、奨学金、そして非公式とはいえ御門家の仕事を手伝って得た報酬のおかげで、かなりの貯金もある。

大学を卒業したら、もう父に頼る必要もないだろう。そして、家に戻る必要も。

戻ったとしても父は暖かく迎えてくれるだろうが、母の敵意が薄らぐ日はこないのだろうし、そのことで父に気を遣わせたくはない。だがそういうつもりでも、あらためて母に言われるのには苛立ちを覚える。

わざわざ自分を拒んでいることを知らせてくれなくても、もう十分知っているのだから。

「…そんなことをわざわざ言いにきたわけ？」

「私だってあなたの顔なんて見なくなかったわ。気持ち悪い」

気持ち悪い、ときた。流石に顔が引き攣るが、母は気にした様子もない。

「来年、あの人は海外に行くのよ」

「…海外？」

「そう。長くかかるって。私もついていくつもり。だからこれを機会に、あんたもあの人を解放してあげて」

「解放って」

「あの人はあなたの本性がわかってないのよ。だからあなたのことを気にしてる。あんたのために、定期的にこっちに帰ってこようかなんて言ってるの。そういうふうに連絡してきたら、断りなさい。

いいわね」

「わかった」

母と違って、父は羅刹を気にかけていた。家を離れてからも、しばしば連絡をくれたものだ。その父に負担をかけるのは羅刹としても本意ではない。素直に頷く羅刹に、母は意外そうな顔をする。

「物分かりがいいのね…でもあんたは昔からそうだったわね。私の機嫌を損ねないように健気だった」

「……」

「そうやって媚びてくるのが、嫌で嫌でたまらなかったわ」

じゃあどうすればよかった？

喉元までせり上がった怒りを押しとどめたのは、母の嫌悪に満ちた視線だった。昔と些かも変わらない、まるで化け物を見る視線。それを目にするたびに、羅刹は何も言えなくなる。怒りも憎しみも悲しみも、喉元を締めつけられて呼吸ができなくなったかのように、全て飲み込まざるを得なくなる。

「とにかくあんたと私はもう親子でも何でもないから、つきまとわないで」

そう言い捨てて母は去っていった。半ば呆然と立ったままであった羅刹は、扉の閉まる音で我に返る。

ほぼ同時に、腕を引かれる感触に足元を見やると、険しい顔をした白夜が目に入った。

「……どうした。ぶさいくな顔して」

「誰がぶさいくだ!!」

白夜の怒声が響く。

「なんだあの女は！本当にお主の母親か！？わらわを見ることもできない下等生物の分際で、偉そうに!!」

「何でお前が怒るんだよ」

「お主はなぜ怒らぬ！？あのように言いたい放題の女に限って、少し脅せばすぐに命乞いをするものを！お主が何もせぬのならばわらが天誅を下してやる」

「やめろって」

「なぜだ!!」

「あのな、あの人がいなきや、俺は生まれなかったんだよ」

「む、しかし」

「確かに俺もあの人を親だとは思えないけど、それでも殺したくない　殺せない」

まだ不満そうな白夜の頭を、ぐりぐりと撫でる。

あの母を母と認識しているのが本能や情ではなく、冷めた理性であることを残念に思いながら。

(5)

なんだかんだと騒ぎ立てる白夜をどうにか追い出し、その夜の安眠を得たのも束の間、翌日に大学へ登校した羅刹はまたもや面倒事に直面した。

それは昼休みのことだった。

食堂で普通に昼食をとっていた羅刹の目の前に、誰かが座った。ふと目をやると、和やかに微笑みを浮かべた晴久だった。

嫌な予感がした。黙っていると、晴久は微笑んだまま「お前の見たという妖魔のことだが」とあたりを憚ることなく普通の声量でのたまった。

思わず周囲を見回す羅刹だが、幸いにもこちらに注目している人間はいない。

晴久は午後の予定を訊ねるかのごとくさりげなく、しかし声量は落とさずに言葉を続ける。

「大当たりを引いたようだな。炎鬼一族の次期当主だ」

「あんな。もつと小さい声で喋れ」

「気にすることはない。堂々としていれば案外、他人の注意などこちらには向かない」

それは御門家という特殊な家に生まれたゆえの経験則なのだろうが、羅刹としては同意しかねる話だった。

なぜなら羅刹の顔はそこのアイドルなんて裸足で逃げだすほどの端正さを誇っている。

自分で言うのも寒々しいが、事実なのだから仕方ない。外を歩けば鬱陶しいほどに他人の視線を感じるというのに、堂々と「妖魔」だの「鬼」だの口にして周りが総スルしてくれると思えとは些か無茶な要求ではないか。

羅刹は溜息を一つ、吐く。

「俺はどうでもいいけど。お前はいいのかよ。仕事とか、やりづらくなったりしないのか」

「心配してくれるのか」

なぜか晴久は満面の笑みである。

「だが安心しろ。そういう時のための人員も常時配置されている。どんな場合でも対処可能だ」

「あ、そう。で？」

御門家の内情になど興味はないので、深くは追求しない。ただ「そういう時のための人員」が気の毒ではあるが。

促さなくても勝手に喋り続けそうな晴久の話を少々促すと、我が意を得たりとばかりに顔が輝く。

「そうだ。それでだな、俺と一緒に鬼退治をしてくれないか？」

「待て。話が飛躍しすぎだったの。何がどうなったら、俺が鬼退治をする流れになる？」

「む、それもそうだな。俺としたことが先走りすぎたようだ……だが説明すべきことはほとんどないぞ？」

「いいから。大体、炎鬼一族って何だよ。そこから俺は知らないから」

「知らないのか？」

「何で意外そうなんだよ。早く言え」

「簡単に言えば、鬼の中で最強の一族のことだ」

「そんなのと闘えって言うのか？俺に？」

「心配ない。御門家でも有数の精鋭を揃える。俺も参加するから、お前くらい力があれば危険はないはずだ」

目が本気だ。嫌な予感が当たってしまった。

どう言って断わろうかと沈黙する羅刹をよそに、晴久は饒舌に喋り続ける。

「髪の色が赤いのは鬼の中でも炎鬼一族宗家だけだ。分家にも髪の色が赤いものはいるが、御門家で把握している中ではほとんどが女だからな。お前の言った外見的特徴と一致する赤髪の鬼は、炎鬼一

族当主の長男だけだ」

「ああ、そう。でも俺には関係ないだろ、それ」

「話を聞いていなかったのか？お前も参加してくれないかと、要請しているんだが」

「お前こそ人の話を聞けつての。前から言ってるだろ、できるだけお前の家の仕事には関わりたくないって」

「だが手を貸してくれたこともあるだろう？」

「あれは相手が本当に狂ってたからだ。放っておいたら、見境なく大量殺人すると思ったから、仕方なくだ」

「今回の相手もそういう危険がある。うちの術者も何人も返り討ちにされている危険な妖魔だ」

「返り討ちつてことは、先にそっちが手を出したんだろうが」

「なぜそんな言い方をする！」

声を荒げた晴久に、周囲が一瞬こちらを見るが羅刹が睨むと慌てて視線を逸らす。こういう時はこの顔も便利だ。

晴久の方は周囲のことなど気にも留めず言葉を続ける。

「確かにお前には妖魔を積極的に狩る義務はない。だが、放っておけばたくさんの人々を傷つける可能性がある妖魔に、なぜそこまで無関心になれる？」

「無関心どころか」

むしろ誰よりも関心がある。そう言おうとして、羅刹は口を噤んだ。関心があると言っても、それは晴久の言う意味でのそれではなかった。

「…それより、何で今回に限ってそんなに熱心なんだよお前。ついこの間は、怪我させたら悪いとか殊勝なこと言ってたくせに」

「正直、戦力に不安がある」

晴久は気まずげに眉根を寄せる。

「相手は鬼で、しかもその中で最上位の能力の持ち主だ。うちの精鋭を集めれば倒せるだろうが、こちらの被害も大きいだろう。お前に迷惑をかけるのはわかっているが力を貸して欲しい」

「俺一人が加わったくらいで何か変わるとは思えないけど」

「言ったことはなかったか？お前には才能がある」

力強く晴久が断言する。嬉しくない。

「お前が加わってくればまさに百人の味方を得たようなものだ。頼む。人の命がかかっているんだ」

だからどうした。

ごく自然にそう思った自分を、羅刹は内心で嗤う。

晴久のことは好きだ。無関係な人間のために、傷つくことも厭わずに妖魔と戦うその愚直さや正義感には憧れていると言ってもいい。だが同時に、その美点が疎ましかった。

なぜ、そうも迷いがない。なぜ、一面識もない赤の他人の命をそこまで尊べる。なぜ、その力で妖魔を殺すことに躊躇いがない。

羅刹は、自分が人間であるという確信すら持てないでいるのに。

「聞いているのか、羅刹？」

「ああ、聞いている　なあ晴久。俺さ、お前のことは嫌いではないよ。出来ることなら助けてやりたい。でも、俺は親を悲しませたくないんだ」

「……」

「お前の家と違って、俺の親は妖魔なんて全然見えない一般人だし、万一のことがあってぐっちゃぐちゃの遺体なんて見せたらどう思うかわかるだろ？それも覚悟の上、とは俺は言えない。お前みたいな覚悟は、持てない」

「……………そうだな」

晴久は肩を落とす。

「すまない。俺の思慮が浅かった。お前の事情も考えずに悪い」

何て素直な奴だ。狙って言ったとはいえ、ここまで目に見えて申し訳なさそうな顔をされるとは、晴久をよく知っていてさえ予想だにしないことであった。

羅刹が戸惑っているのをどう解釈したのか、晴久は早口でもう一度謝罪を述べる。

「本当に悪かった。俺はお前の親のことなんて何も考えていなかった。それにお前のことも。俺は、夢中になると周りが見えなくなる」と叔父にもよく注意されるんだ。気をつけているつもりだったんだが」

「いや、そこまで気にするなよ。むしろ、悪いと思ってるよ。期待に応えられなくて」

「それは、もういいんだ。お前の言い分ももつともだ。忘れてくれ」
言いながら立ち上がると、晴久は足早に立ち去った。

それを見送りながら、羅刹は安堵と罪悪感の入り混じった、奇妙な気持ちを味わっていた。

「やっと見つけた」

ビルの屋上から羅刹をひたすら「見て」いた刹那は、不意にかけられた声に視線を外して、背後をちらりと見た。

彼以外に誰もいない筈の屋上に、幼馴染の姿があった。刹那は舌打ちする。気配を絶っていたつもりなのに、こつも易々と見つかるとは思わなかった。

「何でわかった」

「勘よ、勘」

「そうかよ」

「そうかよ、じゃないわよ。断りもなしに人間の街なんてほつつき歩いて、何考えてるわけ？ていうか、何か考えてるならまだいいけど、どうせ何にも考えてないんでしょ？」

「うつせえな。がみがみ言うな」

「何よ、その言い方」

幼馴染　紅月は、刹那に負けず劣らず赤い髪を、乱暴に掻き上げた。それは、彼女が苛立った時の癖だった。

「あたしだってこんな小姑みたいなこと言いたくて言ってるんじゃない」

ないわ。特にあんた相手にはね。言っても無駄ってわかってるし。でも今がどういつ時かわかってるでしょ？あんたに万一があつたら、宗主の座はどうなるの？」

「那智がいるだろうが」

「駄目よ。まだ子供すぎる。そりゃあ、時間があるなら成長を待つことも出来るけど」

「時間はねえってか。お前もやっぱり、親父が死ぬと思ってるのかよ」

「ええ」

迷いのない肯定に、刹那は振り返る。その顔にははつきりと怒気が浮かんでいた。

「紅月、てめえ」

「あたしは医師よ。患者の病状を見誤ったりしない。今日明日って話じゃないけど、それでももう床から起き上がることも出来ない。宗主として他の鬼をまとめることも出来ない。そんな状態の宗主を宗主としていつまでも仰いではられないわ」

「お前は冷静だよな。弱った宗主を治すのがお前の仕事だろうが。それとも弱い宗主は必要ないってか」

「次の宗主の安全を確保するのもあたしの仕事よ」

「わかってんだよ、そんなこと！！」

紅月が口を噤む。

刹那は、転落防止の為に張り巡らされているフェンス越しに街を睨みつけた。

「どいつもこいつも、宗主宗主って馬鹿の一つ覚えか。お前にまで言われるとうんざりする」

「刹那」

「俺が宗主になって、そしたらお前は どうするんだよ。宗主は白炎と結婚するのが掟だぞ。お前は俺の主治医になって、護衛もして、それで満足か。俺が跡継ぎを残せば喜ぶのか。それで俺が死にそうになったら、俺の餓鬼に取り入るんだろ。『次の宗主様、何でもお

申しつけ下さい』ってか」

「刹那！」

「消えろよ」

立ち竦む紅月に視線もくれず、刹那は無表情で言い放つ。

「聞こえなかったのか？ 宗主の命令だぞ」

もう一度、消えろ、と呟く。

紅月は暫く動かなかったが、結局、物も言わずに立ち去った。自分で命令したくせに、それに僅かな痛みを覚える。

幼い頃から共に育った紅月でさえこれだ。

他の者たちがこれからどんな態度をとってくるか、想像に難くはない。誰でもいいのだ。宗主に相応しい強さを持っていれば、誰でも。刹那だろうと、父だろうと一族にとっては大差ない。

衰えれば、切り捨てられるのだ。父のように。

だから刹那には強さが全てだった。必要とされているのは刹那ではない。刹那の持つ力だ。

だから強さを求めた。力さえあれば何をしても許される。力がなければ存在すら許されない。

俺は、何だ。

そんなことを考えるのは間違っているのだろう。そう、考える必要などない。自分は最も強い者であり続ける。あり続けなければならぬ。誰にも、刹那を排除などさせない。させてなるものか。

だからあの人間は殺しておかなければならない。

常人ならば見えるはずのない、遠く離れた場所にいる羅刹を見つめたまま、刹那はそう心に誓う。

油断していたとはいえ、してやられたのは事実だ。あの人間が刹那を殺す気だったら、どうなっていたかわからない。人間ごときにどうにかされるつもりは微塵もないが、それでもあの一撃は刹那にとって汚点だった。

あの人間を殺して、その臓腑を貪ったらどんな味がするのだろう。甘美な想像に、刹那は自らの本能が昂るのを感じた。その衝動に

突き動かされるままに、羅刹を目指して地を蹴る。
瞬きする間に、刹那の姿は屋上から掻き消えた。

(6)

その攻撃に気づいたのは偶然だった。

背筋にぞわりと悪寒が走ると同時に、身を捻っていた。頬を熱いものが掠めた。避けられたのは運が良かったと言えるだろう。無理に身体を動かしたせいでバランスを崩して、たたらを踏む。何かが掠ったところから血が一筋、流れた。

「鈍いなあ、人間」

現れたのは、あの鬼だった。真っ赤な髪に、同じく燃えるような赤い瞳。一目で人でないとわかる爪と牙。

羅刹は咄嗟に、辺りに目を走らせた。他の人間がいたら、いろいろと面倒なことになる。

鬼は、そんな羅刹を鼻で笑った。

「助けを求めようだったって無駄だぜ。お前が一人になるのを待ってたんだからな。ま、他に邪魔が入ったらぶっ殺すけど」

鬼の言う通り、周囲には猫の子一匹見当たらない。閑静な住宅地は、ところどころに空地が目立ち普段から人通りは少ない方だが、羅刹と鬼以外に人がいないのは幸運としか言いようがないだろう。

他人に助けを求めるつもりなど、さらさらなかった。目の前の鬼は、半端な強さではない。それは晴久の講義を聞くまでもなくわかっていて。こうして向き合っても、その身に潜む強大な妖力に押し潰されそうだというのに、通りすがりの一般人が対抗できるとは思えない。

逃げられるか？

羅刹の背後には十分に逃げる余地がある。袋小路に追い詰められたわけではない。だが、背を向けた瞬間に殺されるような気がした。それでもじりじりと後ずさる羅刹を嘲笑うかのように、鬼はゆっくりと歩み寄ってくる。

「逃げようなんて考えるなよ。せっかくこの俺から出向いてきてや

つたんだから、がっかりさせるな。どっちにしろ、死ぬことに変わりはしないけどな」

「何が目的だ」

鬼は、怪訝そうに眉を歪めた。

「目的い？んなもん知ってどうするんだよ？まさか平和的に話し合いで解決しましょう、なあんて言わねえよなあ？俺はべらべら喋る野郎は好かねえんだよ」

「お前に狙われる覚えはないし、だったら俺がお前と戦う理由もないだろ　まさか、俺を喰いたいのか？」

それぐらいしか思いつかない。

だが、鬼は何が気に障ったのか、忌々しげに舌打ちする。

「理由がないって？お前になくてもこっちには大ありなんだよ。俺は炎鬼だ。ただの人間に吹っ飛ばされて黙ってられるか。てめえの命でも貰わなきゃ、俺の気が済まねえんだよ」

「どんな理由だ」

確かに先日、この鬼を派手に吹き飛ばしたのは事実だが、見たところ怪我もしていないし、それで命を取ろうという発想は理解不能だった。それとも、鬼としては普通の感覚なのだろうか。

思わず呆れ顔になったのが気に入らなかったのか、鬼は威嚇するように牙を剥き出した。

「馬鹿にしてんのか？」

「馬鹿にはしてないけど、意味がわからない」

「ちっ、低脳が。これだから餌と口なんて利きたくねえんだよ」

「その餌にやられたくらいで本気で腹を立ててるお前は何なんだ」

「ああ!？」

しまった。

別に喧嘩を売るつもりはなかったが、売り言葉に買い言葉とはこのことか。単なる減らず口とも言うが。

鬼は、傍目にもはつきりとわかるほどに怒りを露わにしていた。風もないのに赤い髪が靡き、圧倒的な妖力が辺りに充満するのを嫌

でも感じる。そして、その爬虫類のような目を何の感情も浮かべないままに細めた。獲物に狙いを定める目だ。

本能的に嫌な予感を覚えるのとほぼ同時に、胸に衝撃を感じ、羅刹の身体は宙を舞っていた。

なぜか鬼の背丈よりも高く舞い上がり、綺麗な放物線を描いて十メートルほど後ろに落下する。地面に背中をぶつけるよりも早く、壁のようなものにぶつかって前のめりに倒れる。

思い切り胸を打って咳きこんだ。すぐに態勢を整えられるほど、運動神経はよくない。

「弱いな」

いつの間にか目の前に来ていた鬼が、どこか失望したように言う。「防御も出来ねえのかよ。札とか聖水とか持ってたねえのか？別に使ってもいいぞ、ハンデだ」

「俺は退魔士じゃない」

退魔士は、肉体の不利を補うために呪力を込めた札や聖水を持ち歩いている。最高に近い能力を持つ晴久でも使っている所を見たことがあらくらいだ。ただし、その札や聖水を作るにはそれなりの鍛錬が必要らしく、羅刹には出来ない。

たまに絡んでくる妖魔をあしらう程度には必要ないものだったのだ、今まで特に気にしたこともなかったが、その怠慢のつけをこんなところで払わされるとは思ってもみなかった。羅刹は、慢心していた。晴久に比べれば経験値は少ないとはいえ、妖魔と闘った経験はある。その時の感触から、何となく自分の力が強いことはわかっていたのだ。それこそ、本気になれば小指の先で鬼も片づけられるほど、羅刹の攻撃力は高い。

だがそれはあくまでも攻撃力の話だ。

防御やその他の面では、羅刹は下級の退魔士にも劣る。先手を取って一撃与えられるならともかく、そうでない相手に攻撃されたら非常に脆い。今がいい例である。わかっていて対策を講じていなかったのだから、まさに慢心としか言いようがない。

鬼は、顎を反らせてふん、と笑った。

「退魔士でもないのにこの俺に指図するなんて、やっぱり低脳だな。ま、その度胸だけは褒めてやるよ」

「それは光栄だな」

「余裕ぶりやがって。やっぱりてめえは癪に障る奴だな」

喉を掴まれて、無理やり顔を上げさせられる。上半身が反って苦しい。

当然、鬼はそんなことに頓着しない。むしろ楽しそうな顔で手を力を込めてくる。呼吸が苦しい。頭に血が昇る。

鬼の声が、どこか遠くから聞こえてくるような気がする。

「楽しませてもらえと思ったのに、がっかりだ。お前もただの間か。弱いくせにきゃんきゃん吠えるだけの犬が」

更に力が加わる。視界が霞む。

「どうせ死ぬだろうから教えてやるけどなあ、俺は結構期待してたんだぜ。親父以外からまともに一撃くらったのは久しぶりだ。てめえとやり合えば俺はもっと強くなれるんじゃないかって思ってたんだよ。その上で俺が勝ってお前を喰う。わかるか？この完璧な流れが。実際はこのざまだけだな。ほんと、期待はずれもいいとこだ

ま、もうどうでもいいけど」

ぎりぎりと手加減なしで締めつけられる。本気で殺すつもりだ。

頭ではなく、本能で察した。意識が朦朧とする。苦しさを乗り越したのか、夢見心地の時のようにふわふわとして、気持ち良くすらある。目の前が真っ白になる。

俺は死ぬのか？

握り潰されそんな意識の片隅で浮かんだその思考に、否、と答える声があった。

自分の声なのに、自分のものではないような声だ。耳を澄ませると、声は、もう一度はつきり、否、と答えた。

俺は死なない。

次の瞬間、羅刹の身体に爆発的な力が湧き上がった。鬼が、物凄

い勢いで吹き飛ばされる。羅刹は咳きこみもせず、ゆっくりと立ち上がった。自分の体も、自分の精神も、今までの自分ではないようだった。戸惑うほどに力が溢れてくる。

鬼が身を起こすのが目に入り、何かを考える前に右手を突き出していた。それで何が起こるかわかっていたわけではない。ただの反射だった。

だが羅刹の動きと連動するように、鬼の体が炎に包まれた。焼き尽くす、などという生易しいものではない。鬼の右半身は、文字通り、炎に食い破られていた。右半身を消失した鬼は、残った左の膝を地面について体を支える。どういう生命力をしているのか、まだ生きているようだが、さすがにすぐに反撃できるような状態ではないようだ。

羅刹は思わず自分の手をまじまじと眺める。何の変哲もない、いつもの自分の手だ。釈然としないものを感じるも、鬼が身動きし始めたので身を翻してその場から逃げ出す。一步、踏み出すと同時に壁のようなものにぶつかったが、抵抗は一瞬で、透明な膜を突き破るような感触と共に壁は消えた。

その不可思議な現象について何か考える余裕もなく、羅刹は前に向かって走り続けた。行先はどこでもよかった。ただこの場から逃れたかった。今の出来事も、自分に起こった変化も、全てなかったことにしたかった。

刹那は信じられない思いだった。

この自分が体を損傷するほど傷つけられたことではない。確かにそれも由々しきことではあるが、今この目で見てしまったものはそれ以上に看過できないことであつた。

炎を操る人間だと？

そんなものが存在するはずがない。

妖魔ですら、炎を操る種族は稀だ。鬼の中でも、炎らしい炎を操れるのは炎鬼一族と「白炎」しかない。それぐらい、炎とは消費する妖力の量も質も他の術とは異なるものである。

だがあの人間はいとも簡単に使つて見せたのだ、その炎を。

それだけではない。炎を使った時、あの人間の目は真つ赤に染まつていた。まるで刹那たち炎鬼のように。しかも、炎自体の能力も桁違いときた。いかに予想外の攻撃といえども、それだけで刹那の半身を持つていくほどの威力を出すことなど、普通の人間には、いや、普通の妖魔にはできないというのに。

何者だ、あの男？

少々できる「人間」という認識だったが、それは間違つていたのかもしれない。あの力、容姿　まさか、炎鬼の血を引いているのか？人間の社会に溶け込み、暮らしている鬼もないわけではないが、そんな変わり者がいれば皆がその名前を知っているはずだ。あの男のことなど、刹那は知らなかった。ただの気に入らない人間、それだけだった。

もしあの男が炎鬼だったら、どうなる？

それはつまり、どういうことだ　刹那の地位を脅かすかもしれない、ということではないか？

辿り着いたその結論に、刹那は激しい怒りを感じた。

冗談ではない。今頃になって、刹那と競う存在など許せるもので

はない。奴にそんなつもりがあるうとなかろうと、最強は自分一人でなければならぬのだ。

そうでなければ、刹那の存在は許されない。自分で自分が許せない。

「…次は殺す」

「物騒だな、鬼の若頭」

はつと背後を振り返ると、いつのまにかそこには若い女が立っていた。

一見すると二十代半ばといったところだろうか。真っ直ぐな長い黒髪と涼やかな面立ちに、赤い唇が映えている。どこか現代の雰囲気と噛み合わない、古風な気配を纏った女だった。

勿論のこと、ただの女ではない。ただの女が、刹那の背後を取れるわけがないのだ。

「何の用だ、狐」

「ご挨拶じゃないか。年長者は敬うものだよ」

「俺は機嫌が悪いんだよ。殺されなくなったら、失せろ」

「おお、怖い怖い」

女はわざとらしい笑い声を上げる。癪に障る声だ。刹那はもともと悪い目つきを、更に陰しくした。

「馬鹿にしてんのか」

「これしきのことと怒るんじゃないよ、坊や。私の気配も読めなかったくせに　それとも本気で殺し合ってみるかいい？」

「は。それは狐の総意と取っていいのか？弱ったところを狙うなんて、お前らしい戦法だな」

「そうだと言ったら？」

女はにたりと笑う。刹那はそれを鼻で笑った。

「馬鹿馬鹿しい。お前が得にならないことをするかよ。今、俺を殺してもお前にとっても、狐どもにとっても損にしかならねえだろ」

「ほう。足りないなりに考えてるんだねえ」

「やっぱりてめえはむかつく女だな」

「褒め言葉と取っておくよ」

女は何がおかしいのか、からからと笑った。実年齢は千歳を超えているという噂もあるので、笑いのつぼが違うのだろう。

なんにしても長く顔を合わせていたい相手ではない。この女とは敵対関係にあるわけでもないし、いきなり襲つてくるとも思えないが何を考えているかわからないところがある。腹に一物あるような奴は嫌いなのだ。

失われた体を修復して、素早く立ち上がる。妖力を大分持つていかれたようだ。食事が必要だな、と考えていると狐が「ここに来たのは偶然だが」と余計な自分語りを始めた。

「まだ何かあるのかよ」

「まあお聞き、坊や。短気は損気って言うだろう。いい機会だから言っておく。私たち狐はお前たち炎鬼と黒鬼の争いに介入しない。今まで通り中立を保つ。だがそれはお前次第だよ」

「俺次第だと？」

「そうさ。お前があまり馬鹿なことばかりしていたら、黒鬼を支援したくなるかもしれないよ。いつまでも争われていたら迷惑だからねえ。だったら黒鬼が炎鬼にとってかわった方が、妖魔全体のためかもしれないだろう？」

「てめえ、裏切る気か？」

「裏切る？ 私たちが炎鬼の長として認めていたのはお前の父親であつて、お前じゃないよ。無論、お前の父親が生きている間は約束を違える気はない。生きている間は、ね」

含みのある言い方に、刹那の表情が強張った。

「まさかお前」

「その先は言わない方がいいんじゃないかね？ とはいえ、隠しても仕方がないか。そう、知っているよ。私も、玉葉様もね」

「……」

「そんな顔をするんじゃないよ。子供を虐めて喜ぶ趣味はない」
趣味はない、と言いつつ顔は楽しそうである。しかしそんなこと

に構っている余裕は、刹那になかった。父親の病状は他の鬼にも、妖魔にも伏せてある。それをこの女が知っているということは、弱味を握られたということであり、いつ誰に知られてもおかしくないということである。

女に対して殺意が芽生えるが、今の状態で勝てるほど甘い相手ではない。気に入らない女ではあるが、狐の中でも三本の指に入る使い手なのだ。仮に勝てたとしても、それは狐を敵に回すということであり、炎鬼としては絶対に避けたい事態である。

内心の敵意が顔に出ていたのか、女は「素直な子だね」と苦笑する。

「何も今すぐ裏切ろうってんじゃない。一ついいことを教えてやろう」

「いいこと？」

「ああ。黒鬼の奴が近くにいる」

「黒鬼が？」

「ふふ。お前は今、弱っているから気づかなかっただろう。戦うなら私は手助けしない。意地を張らずに逃げた方がいいんじゃないかい？」

刹那は沈黙した。

敵に背を向けるなど、彼のプライドに抵触する行為である。束の間、理想と現実の葛藤が彼の内面で繰り広げられるが、勝利したのは現実の方であった。

逃げるわけじゃない、と自分に言い聞かせるように思いつつ、刹那の姿はたちまちのうちに消えた。残された女は「困った坊やだ」と頬に手を当てる。

「不注意というか、迂闊というか。私があの大怪我に気づいていないとも思ったのかね」

気づいていない筈がないではないか。

それどころか、刹那とあの男の戦いの一部始終を女は観戦していた。最初は、どうせあの坊やの狩りだと思って暇つぶしで見ていた。

だけだったのだが、途中から思わぬ展開になり、結末はどんでん返しもいいところだ。

まさかあの刹那が、どこの馬の骨とも知れぬ人間に負けるとは。いや、相手も人間ではないようだった。あの赤い目と、炎を操る力は紛れもなく炎鬼の証だ。刹那を一撃で粉碎し、結界を簡単に突き破って逃走するとはなかなか将来有望ではないか。

問題はあれが炎鬼にとってどういう存在で、妖魔にとってどういう存在になりうるか、だ。

「少し、監視が必要だな」

場合によっては使えるかもしれない、あの男。

勿論、女の見込み違いで、毒にも薬にもならない可能性もあるにはあるが、しかしあの男が炎鬼に、ひいては妖魔全体に大きな影響を与えるかもしれないという予感があった。こういう勘は、大体あたる。第一、その方が面白いではないか。

くく、と女は喉の奥で笑う。

炎鬼と黒鬼の、うんざりするほど長く馬鹿馬鹿しい争いにも飽き飽きしていたところだ。よそに娯楽を求めても罰は当たるまい。それが悪趣味であればあるほど、妖魔の性も満たされようというものだ。

気がつくと、羅刹は自宅の前にいた。

闇雲に走っていたつもりだったが、帰巢本能とは恐ろしいもので、無意識のうちに馴染みの場所に足を向けていたらしい。もともと自宅に帰るつもりであったところをあの鬼に襲われたので、そもそも自宅に近い場所にいたとはいえ、パニック状態でも自宅に辿りついてしまうと大して混乱していないような気になってしまう。

しかしそのお陰で冷静さを取り戻した。

もっとも、そう言える状態になったのは、何とか自室に入って扉

を閉めた後である。

鍵を掛け、背後の扉に寄りかかってようやく気が緩む。大きく息を吐き、今しがた起こったことに思考を巡らせる。

妖魔に襲われた。死ぬかと思った。

なぜ死ななかった？

自分に何が起こったのか、羅刹本人にもわかっていなかった。

あの鬼に首を絞められて意識がなくなる間際、何かが体の奥底で目覚めたような気がした。

何かが：そう、何か強大で凶暴な何かだ。

存在すら知らなかったその力のおかげで、羅刹は今も生きている。だが、手放して喜ぶにはあれはあまりにも人間離れた力だった。

勿論、もともと彼は普通の人間ではない。鬼やら狐やら、時にははっきりした形を取らない霊や、文字通りの化け物も沢山目にしてきたし、見るだけにとどまらずそれに干渉する力も持っている。そうしたいと思えば、妖魔を消滅させたり変形させたり、あの鬼に最初にしたように見えないところまで動かすこともできる。

なぜできるのかと訊かれても説明できない。物心ついた時にはできていた。

彼の力は妖魔相手にしか効果はなかったし、たとえば物を念じるだけで動かすようなこともできた試しがないので、人間として生活する分には普通の人間とは変わらない。まあそれだけでも普通ではないが、さっきの力はそれとは全く質が違うもののような気がした。あの炎で人間を焼こうと思ったら、おそらく骨も残らず焼き尽くせる。

ただの勘だが、そんな気がしてならないのだ。

そして、そんな力を一時的にはいえ使えたことに、どうしようもなく不安が募る。

化け物。

子供のころ、母によく言われた言葉が脳裏をよぎる。頭を軽く振る。考え過ぎだ。

本当に？

強迫観念じみたものに駆られ、洗面台に足を運ぶ。とにかく何の異変も起きていないことを確認して、安心したかった。

だが鏡を覗き込んで、羅刹は絶句した。

そこに映っていた自分の顔には、何の変化もない。ただ一点、その両目が血のように赤く染まっていることを除けば。まるであの鬼の目のようではないか。

化け物。

記憶の中で、母が嘲笑う声が聞こえたような気がした。

何度、鏡を見直しても同じだった。

鏡の中の自分の、黒目だった部分はこれ以上ないほど赤く染まっている。見間違いはないか、もしくは光の加減か何かで赤く見えているだけではないか、と瞬きしたり鏡に顔を近づけてみたりしてみても、何も変わらなかった。

……まるで鬼の目だ。

さつき、どういうわけか退けた鬼の目も、こんな色だった。あの鬼のように虹彩が爬虫類のようになっていくわけではないが、気休めにもならない。炎を使えたことと、この目の変化とを考え合わせれば自分が妖魔になった、いや、妖魔であると考えの方が自然だ。

化け物。

母に何度となく浴びせられた言葉と、嫌悪に満ちた目を思い出す。そのとおりではないか。少なくともこんな目をした人間はいない。傷つく資格も自分にはなかったというわけだ。

だが、そうだとしたら自分は一体なんなのだろう。

普通の人間ではない。それはわかる。では妖魔か？そうかもしれない。だが、妖魔にしては容姿の変化が中途半端だ……これから更に変化していくのかもしれないが。

いずれにしても一つ、わかったことがある。

羅刹の両親は、本当の両親ではない、ということだ。

二人が妖魔とは何の関係もない、正真正銘の人間であることは「鬼見」の羅刹が証明できる。ただの人間から、妖魔が生まれるはずがない。羅刹がこんな姿であるということは、彼と両親の間に血縁関係がない可能性を暗示しているように思えた。

おそらく父は、羅刹のことを実の息子とと思っているだろう。仕事に忙しいことと、母の手前あまり親しく会話をした覚えもないが、

それでも気にかけてくれていたことは感じられた。

問題は母だ。

父は何も知らないだろうが、母はどうなのだろう。母は、本当の母なのか、それとも。

羅刹をあそこまで憎んだのは、我が子でないと知っていたからなのか。妖魔の子を育てなければならぬ境遇を呪ったことだったのか。あの「化け物」という罵りは、確信を持って吐き出されていたのだろうか。

あるいは。

不意に浮かんだもう一つの可能性に、羅刹は鏡を見たまま凍りついた。

あるいは母が実の母であつたとしたら。

妖魔に孕ませられた母が生んだのが、自分であつたとしたら。

それこそ憎まれて当然だ。羅刹が羅刹であることが母にとつては屈辱であり、憎悪の対象に他ならないのだから。

どこか冷静に考えながらも、鏡に映る羅刹の顔は奇妙に歪んでいた。

この、顔だ。

異常に整い、両親どころか親族の誰にも似ていない顔。平凡な父にも、美しいと言われる母にも似ていない、それでいて人目だけは引くこの顔は、妖魔のものだったのかもしれない。

だとしたらこの顔そのものが、羅刹が妖魔であることの証明と言つても過言ではない。

自分が今まで堂々と晒して生きてきた素顔が、つまり自分そのものが妖魔だったのだ。

そんなことにも気づかず、のうのうと人間のような顔をして生きてきたのだ、羅刹は。

なんと図々しいことだろうか。

飛躍しすぎだ。

冷静な部分がそう宥めるのを感じながらも、かつてないほどに彼

は動揺していた。

不安。恐怖。憤り。

暗色だけを混ぜ合わせた時のように、羅刹の心中では不快な感情が混ざり合い、よりいっそう負の相乗効果を生み出していた。

どうすればいい。

わかるわけがない。自分がどうしたいのかすらわからないのだから。

鏡を直視することも厭わしい。何も考えたくない。逃げてはいけないと思いき直そうとしても、思考に集中できない。

精神に体が引きずられたのか、耳鳴りがする。母の声が何度も何度も耳の奥で木霊する。

化け物。

化け物。

化け物。

「うるさい！！」

叫ぶと同時に、目の前の鏡に亀裂が走った。二つに割れた自分の顔を眺め、羅刹は呆然とその亀裂を指でなぞる。

だが何かを思う暇もなく、凄まじい頭痛が彼を襲った。

ぎしぎしと頭部を締めつけるような痛み、呻き声を上げてその場に蹲る。痛みと耳鳴り、それに幻聴であろう母の声が羅刹を苛む。このまま収まらなければ気が狂いそうだ。脂汗が吹き出る。呼吸がどんどん速くなる。

幸か不幸か、苦痛は長く続かなかった。

頭痛がたちまちのうちに羅刹の意識を刈り取ってくれたからだ。ぷつりと意識は途絶え、羅刹の体もまたその場に倒れて動かなくなつた。

夢を見ていた。

嫌な夢だ。

自分が少女を食らう夢だった。

現実でも鬼に悩まされているというのに、夢でも鬼まがいの行為に勤まなければならぬとは。

むしろ、現実があればこそその夢なのか。

内容にもかかわらず、そんなことを悠長に思っ余裕すらあつた。

これは夢だと、確信していたゆえであろう。夢ならば、ただ与えられるものを甘受すればいいだけだ。何の責任も苦痛もなく、それゆえにどんなものを見ても感情を刺激されることはない。

妙にリアルな夢だった。

近所の公園の茂みの中に、羅刹は少女を引きずり込み、押さえ込んでいた。小柄で、童顔の少女だ。何か見覚えがあると思つたら、制服が晴久の妹が着ていたものと同じだった。

少女は恐怖に顔を引き攣らせ、いやいやをするように首を激しく横に振つたが、無論そんなことで事態が変わるはずがない。

羅刹は少女を見下ろして、にやりと暗い笑みを浮かべた。

獲物が自分を恐れ、死の恐怖に怯える様が愉しくて仕方がないのだ。

妙な感覚だった。少女に感じる嗜虐心や高揚はまさしく羅刹のものなのに、一方でそれを無感動に観察している自分もいる。

どちらも自分であり、どちらも自分ではないような感覚だ。

まあ、夢であることを真剣に考えるだけ無駄なのかもしれないが。

冷静な思考を遮るように、本能が 食欲が意識を支配する。

少女はさしずめ蛇に睨まれた蛙といったところだろうか。悲鳴すら上げられずに震えるさまは、哀れの一言に尽きた。

それをいいことに、羅刹は少女の首筋に噛みつく。

柔らかな肌に牙が食い込む感触と、口に溢れる血の味に酔いしれる。

それにしても味覚まで機能しているとは、本当にリアルな夢だ。びくんと振り返る体を押さえ直し、制服を引き裂き、少女の口を

押さえる。胸の間から臍の下まで、メスで切り裂くように切れ目を入れてやると鮮血が溢れた。

羅刹はそれをうつとりと眺める。

興奮のあまり、思わず口を押さえる手に力がこもってしまったが、構わないだろう。傷口を力任せに開き、そこに顔をつっ込んで肉を貪った。

目覚めたのは、倒れた時と同じ場所だった。

当たり前と言えば当たり前だが、ほっとしたのも事実である。夢とは思えないほど、あの夢には現実感があった。おかしいものだ。羅刹が人を喰うなど、現実ではおよそありえないことだというのに、あの夢では実に自然な気持ちだった。まだ舌に血の味が残っているような気がする。

もう一つ不思議なことは、あれほど詳細で生々しい夢だったにもかかわらず、目覚めた今も大して不快でないということだ。

羅刹は特に血に弱いわけではないが、残虐な表現の映画やゲームを好むわけでもない。

起きたら忘れてしまうような夢ならまだしも、まだ事細かに内容を覚えていて何も感じないというのは、自分のことながら少々不自然な気がした。

「まあ、どうでもいいか」

どうせ夢だ。

あれこれ考えても時間の無駄というものだろう。

ゆっくりと立ち上がって鏡を覗き込む。なぜか目の色は元に戻っていた。わけがわからない。

一瞬、あの鬼と闘ったことやその後の混乱も全て白昼夢だったのかと思いかけるが、鏡に縦に走った亀裂はそのままだ。

羅刹は深く溜息を吐いた。

妖魔かもしれないと思った時はあれほど取り乱し、混乱したのに、それが嘘のように、元凶となった目はあっさり元に戻ってしまった。しかも、たかだか見た目の一部が変わっただけで普段通りの気分になっってしまう自分の現金さには、我ながら呆れて物も言えない。

問題が解決したわけではないのだ。

とりあえず日常生活を送る上での支障はなくなったが、羅刹が妖魔まがいの力を使ったことも、両親が本当の両親ではないかもしれない疑問も、なかったことになるわけではない。

もつとも、このまま何もなければ自分は何食わぬ顔で変わらぬ暮らしをしていくのだろうな、とも思う。

今更、自分が何者かについて悩んだり、本当の親に会いたいと渴望したり、そんなことで神経をすり減らすことに価値があるとは、どう頑張っても信じられない。そんなことは、今までに散々、考えつくした。そして悟ったはずだ。何者であろうと、自分の存在に興味などないのだと。

仮に、羅刹が妖魔であったとして、正体に気づく可能性があるのは晴久だが、今までごく普通に付き合ってきたのだから、今後おそらく羅刹が普通の人間だと思っていってくれるだろう。

恐ろしく楽観的で、しかも根拠のない考えだが、そう願うしかない。

もし晴久が自分を妖魔と認識したらどうするのだろうか。

あれだけ正義感の強い男だ。相手が羅刹だろうと目を瞑ることはないだろうが、敵意を剥き出しにして向かってこられたらと想像すると嫌な気分になる。

実際にそうになったら、嫌だなんて問題ではないが。

本当に問題なのは、その時に自分がどうするのかということだ。

逃げられればいいが、逃げられなかったら？晴久と戦うのか。戦えるのか。戦えなければ、おそらく殺される。かと言って戦えば、殺すかもしれない。その場をどうにか誤魔化してやり過ごしたとしても、同じ市内に住んでいるのだ。顔を合わせないようにすればい

い、というものでもないだろう。

これが晴久以外の相手ならば。

羅刹はふと、思う。

これが晴久以外の、たとえば見知らぬ他人ならば、こんなことを考えただろうか？

見知らぬ他人相手に気を回しようがないのも事実なのだが、たとえば先の鬼のように襲ってきたのが人間だったとして、自分の身を守るために傷つけてしまったとしても、こんなことは考えない気がする。

何故かと言えば、羅刹が冷たい人間だからだ。

晴久に協力を要請された時、「人の命がかかっている」と言われなくても自分でもおかしくなるほど、何も感じなかった。自分の知らないところで、知らない誰かが死のうと知ったことではない。誰かが死ねば悲しむ家族がいるということを、一般常識として知ってはいても、それは遠い世界の出来事のように感じられた。

積極的に他人を傷つけないわけではない。むしろ人と接する時は、好感を与えるように意識してきた。

ただ、それは生死が関わるような状況でも尊重されるような、信念や優しさからではない。

人に嫌われた時に与えられる否定や攻撃が、恐ろしかったからだ。だからそれを上回る恐怖があれば、羅刹に他人を尊重する気持ちなどないのだ。あれは命を守るために仕方なかったというお綺麗な言い訳一つで、自分を納得させることだって簡単だ。

そこに思い至って、ぞっとした。

そんな部分を曝け出すような状況には、心底、陥りたくない。

愚にもつかない思考を振り払うように一つ頭を振る。時計を見て、そういえばバイトがあつたな、と思い出す。非現実的なことばかりで忘れていたが、生きるためには金を稼ぐ必要があるのだ。正直行きたくないが、仕方ない。

憂鬱な気分を引きずって、羅刹は出かける支度を始めることにし

た。

その一時間後、数十メートル離れた公園の茂みで、少女の遺体が見つかった。

「ねえ先生もうわかんないー」

間延びした声を上げる教え子に、羅刹はあからさまに溜息をついた。

「ちよつとは考えてくれない？香澄ちゃん」

「考えてもわかんないんだもん」

「まだその問題、始めて一分も経ってないでしょうが」

「だってわかんないんだもん。わかんないのを教えるのが先生の役目でしょ？」

もつともな話だが、説明している間も羅刹の顔ばかり見ている彼女に学ぶ気があるのかは大いに疑問である。

香澄は器用にシャーペンシルを指の間で回しながら、空いた手で頼杖をつく。

「そもそもさあ、わかるんだったら家庭教師なんて頼まないって。

あたし塾についていけないほどの頭もないし、晴菜の友達だからってそういう先入観で見ないで欲しいなー」

「へえ、あの子頭いいんだ」

「いいんだ、って知り合いなんですよ。先生も晴菜が紹介してくれただんだし」

「俺が仲良いのは兄貴の方だからね」

「でもでも、晴菜って凄く可愛いじゃん。ヤマトナデシコって感じで。クラスの半分の男子は晴菜のこと好きだよ、絶対」

女子高生の言う「絶対」がどれほど当てになるのかは意見の分かれるところだろうが、果てしなく脱線していく話題を本筋に戻すのがどれほど困難かは羅刹にもわかる。

「羨ましいの？」

「……そりゃあね。晴菜のことは好きだけど、隣ににいるのにガン無視で晴菜ばっかちやほやされてたら、惨めじゃん」

「顔が良ければ、好きになってもらいたい人に好きになってもらえるってわけでもないでしょ」

「あ、先生、それ経験論？」

「さあ？」

「でもそうかも。晴菜、好きな人いるらしいけど、片思いっぽいし……ねえ、誰か知りたくない？」

「別に、どうでも」

「つまんなーい。そんなこと言ってて、晴菜に告白されたらやっぱ嬉しいくせに」

「友達の妹なんて嫌だって」

特にそれが晴久の妹だったら、尚更だ。香澄はどこか不思議そうな顔をしていたが、「そういえばね」と他に話したいことを思いついたらしく、顔を輝かせる。

「この間、同じクラスの海老原君に誘われたんだ。一緒に遊ぼうって。もしかしたら告白されちゃうかも」

「へえ…良かったね」

海老原君、とは香澄のクラスメイトで、片思いの相手だ。何度も名前を聞いたことがある。

曰く、「頭もよくて格好良くて何でもできる」、いかにも競争倍率の高そうな人物だ。実際、話を聞く限り香澄は特に仲が良いわけでもないらしく、それどころか海老原君がご執心なのは晴菜の方らしく、彼が晴菜に話しかけたついでに会話を交わすことがある程度、という望み薄な関係に留まっているようだった。

だが最近になって、晴菜に脈がないことに気づいたのか、香澄の何かに心惹かれたのか、とにかく海老原君は香澄にも良く話しかけてくるようになったらしい。

まあ、香澄のことだから大袈裟に言っているのだろうが、それでも直接誘われたとあれば進歩には違いない。

「それは良かったから、気持ちよくこの問題解いて欲しいんだけど？」

「えーそれとこれとは別ー」

「別も何もないっての」

羅刹はやれやれと再び溜息をつく。次に発した言葉は無意識だった。

「いい加減、”やれ”」

「わかった」

「ん？」

存外、あっさり頷いた香澄に違和感を覚えて顔を向けるも、彼女は既に問題に取り掛かっており、ちらりともこちらを見ない。

集中を切らせるのも悪いと思い、羅刹はその違和感を深く追求することはなかった。

追及するべきだった、と気づいたのはずっと後のことだった。

やけに素直になった香澄の勉強を見てから家に帰って来るころには、すっかり辺りも暗くなっていた。腕時計を見ると丁度七時だった。家の近くまで来ると、何やら人だかりが出来ている。羅刹のアパートからそう遠くない、こじんまりとした公園の前だ。

パトカーがとまっており、警官と思われる人間が野次馬に「さがつて下さい」というようなことを言いながら、ばたばたと動いている。

羅刹は眉を顰めた。

あの、悪趣味な夢が脳裏をよぎった。

足早に近づいてみると、公園の中を窺うことはできなかったが、群衆の雑多な声は耳にすることができた。

「殺人」「女の子が」「変質者の仕業」……。

飛び込んできた単語に鼓動が速まる。無意識に足が前に出ていたのか、「それ以上前に出ないでください」と胸を押される。

警官の肩越しに公園が視界に入る。ここからでは、例の茂みは見

えない。

「見たい」と思った。確かめなければならなかった。瞬間的に羅刹の神経はその一点に集中し、周りの雑音も目の前の警官も完全に意識から閉め出された。

不思議な現象が起こったのはその時だった。

カメラでズームアップしたかのように、または望遠鏡を覗いたようにある一点　羅刹が見たいと望んだ茂みの向こう側が「見えた」のだ。

夢で見た少女はいなかった。その代わりに大量の血液が、これでもかと言わんばかりにぶちまけられていた。

死体がなくとも、酷い殺され方をしたとわかった。そう、まるで夢の中のように……。

暗闇の中にうつすらと広がる血の池に、横たわる少女が見えた気すらした。

「おい」

肩を強く叩かれる感触に、はっとして顔を上げる。

一瞬にして不自然な視界は元に戻り、怪訝そうな顔の中年男が目に入った。

「大丈夫か？」

「……大丈夫です」

「ならいいが。酷い顔してるぞ。男前が台無しだ」

「はあ」

「野次馬も結構だが、それで倒れられても警察は面倒見切れねえかな。さっさと帰んな」

「え？」

羅刹は思わず男を見返した。

「…刑事さんですか？」

「そうだが？」

不機嫌そうな男は、一般的な警官のイメージである制服でなくスーツ姿だったので、パツと見て会社帰りのサラリーマンに見えた。

だが考えてみれば、殺人が起こっているのだから刑事が来ないはずがない。

羅刹は躊躇しながらも、彼にとって大切なことを訊ねるべく口を開いた。

「あの女の子は 死んだんですか」

「なんでそんなこと知りたがる」

「それは」

「まあ、発見当初からいた連中にはもうわかってるだろうから、隠したって意味はねえんだが 死んだよ。というか、死んでたって言った方が正確か」

「……」

「で？」

「え？」

「俺の質問に答えてねえだろ。なんでそんなことを知りたがる。被害者の知り合いなら、聞きたいことがあるんだが」

「そついうわけじゃ」

「斎賀さん」

呼びかけられた中年男は、羅刹の背後に知り合いを認めたらしく、「ああ」と気だるげに返事をする。

「お前か、晴久」

「お疲れ様です って羅刹？」

現れたのは晴久だった。

「何だ、知り合いか」

「友人ですよ。彼が何か？」

「ちよつとな。まあ、今はいい。後でな」

と晴久に言い、刑事はあっさりと現場の方に戻っていった。晴久も晴久で、それを気にすることもなく羅刹に向き直る。

「こんなところで何をしてるんだ？」

「たまたま通りかかったただけだって。バイトの帰りでさ。お前こそ、刑事と知り合い？」

たまたま通りかかっただけで刑事に話しかけられるわけもないが、晴久は生真面目に質問に答える。

「斎賀さんは、俺の伯父だ。父の兄だから、御門家に直接の関係はないんだが、妖魔がらみと思われる事件が起こった時は、いろいろ情報を貰ったり便宜を図ってもらっている」

「……いいのか、そんなことして」

「良いのか悪いのかと言ったら、良くはないんだろうが」

そう言いつつ、晴久は悪びれない。

「それが御門のやり方だからな。警察の上層部には斎賀さんどころじゃない大物の関係者もいるし、そういう意味では問題ない」

「凄いな、それ」

御門家が退魔士の頂点に立つ家だということは知っていたが、実社会にそれほど影響力を持っているとは初耳だった。とはいえ晴久にとってはどうということでもないらしく、深刻そうな顔で腕組みをする。

「それよりもこの事件だ。どう思う？」

「どうって」

「俺は、犯人は妖魔だと思う」

「……」

「前に、お前から話を聞いたあの鬼が怪しい……斎賀さんに話を聞いてみないと、わからないが」

あの鬼とは、羅刹を襲ったやたらと短気な、あの鬼のことだろうか。人間を蔑視していたようだし、時間的にも可能と言えば可能だ。まさに相応しい犯人と言えるだろう　羅刹の変化と、あの夢のことかなければ。

「そんな顔をするな」

険しい顔になっていたのか、晴久が困ったように微笑む。

「お前に手伝わせようとして、こんな話をしたんじゃない。ただ、妖魔の危険性を知っておいて欲しかったんだ。お前ならそう易々とやられることはないだろうが、どうもお前は博愛主義者のなところ

があるからな」

「は。それは甘いつて言いたいのか」

「心配してるだけだ。素直に受け取れ」

今度は、羅刹が困る番だった。実際のところ、博愛主義なんて言葉は羅刹から最も縁遠いところにあると言っても過言ではなかったが、妖魔を積極的に排斥しようとしなない態度がそう見えていることは自覚していたし、むしろそう思わせようとしていた節もある。

だから晴久が自分の身を案じてくれるのは嬉しいと思いつつも、どこか他人事のような気がするのだ。晴久が心配しているのが自分とは別人の誰かのような……意図的にそう振舞ってきた分際で、言えた義理ではないが。

「わかった、気をつける。お前も、あんまり無茶するなよ」

努めて軽薄な笑みを作って、羅刹はそう返した。

「あの美形は帰ったか？」

いつのまにか近づいてきていた伯父に、晴久は苦笑した。

「その言い方、あいつの前ではやめて下さいよ」

羅刹は顔のことを言われるとなぜか傷ついたような表情をするところがある。はつきりと不愉快そうになるわけではないのでわかりにくいが、あれだけ容姿がよければ常人にはわからないような嫌なこともあるのだろうと晴久は受け止めている。

斎賀は煙草をくわえたまま、わかったようなわからないような生返事を呟く。

「奴が法律に触れるようなことさえしなければ、俺と会うこともねえだろうよ」

「それはそうですけど」

「ま、もしかしたら近々会うかもしれねえけどな」

「どついう意味ですか？」

「どういう意味も何も、近所に住んでんなら話を聞く機会もあるかもしれないねえってこと」

「そんなわかりきったことをわざわざ口に出して言わないでしょう、斎賀さんは」

「可愛くない奴め」

表情にも声にも感情を含まずに、淡々と斎賀は言う。

「あの美形は、何か知ってる」

「……それは、俺と同じ力を持ってますから」

「お前のその漫画みたいな家業は俺の専門外だから、お前の領域のことなら俺の勘に引かかるわけがない」

「つまり、羅刹が殺しに関わってるってことですか？」

晴久の声に陰が混じる。

「ありえないですよ。確かに正義感の強いタイプではありませんが、根は悪い奴じゃないです」

「別に、あの美形が直接手を下したって言うてるんじゃないよ。ただ、何となく様子がおかしかった気がしてな」

晴久は沈黙する。

斎賀の勘は、勘といえどもそう馬鹿にしたものでもないことを彼は知っていたし、初対面の羅刹相手に難癖をつけるような人間でもない。

だからといって、友人を疑うような言葉は受け入れがたいものであった。

「……斎賀さんの勘が間違っていることは、俺が証明してみせますよ」

「そうか。頑張れよ」

真剣な面持ちの晴久に、斎賀は興味がなさそうな顔でエールを送った。

公園で少女の遺体が見つかったニュースは、連日テレビを賑わせた。

被害者が女子高生で、遺体が獣に食われたような状態であったことも注目を集める要因だったろう。新聞やテレビにのる、澁刺とした少女の写真は羅刹の気分を重くさせた。

おぼろげな記憶ながらも、夢に出てきた少女に似ていたからだ。ありえない、と思う一方で、完全に否定するには羅刹自身が普通から逸脱しすぎている。だが疑惑の真偽を確認する手段など存在しないのだ。もし自分があの少女を殺していたら、と考えると、真実など知りたくない気もする。

晴久の伯父 斎賀とも、あの後少し話をする機会があった。

と言っても取り調べなんて大袈裟なものではなく、現場の近所に住んでいる者は誰でも聞かれるような些細な質問にとどまったが。

斎賀は、殊更に羅刹を疑うようなことは口にしなかったが、どうも何かに感づいているような気がしてならない。もともと、問い詰められたとしても何を言うこともできないのが正直なところだ。自分自身でさえ、何をしたのかしなかったのか、全くわかっていないのだから。

そして晴久の方も、精力的に犯人を追っているようだ。

らしい、というのは、ここ一週間ほど晴久と連絡を取っていないので、何をしているのかさっぱりわからないためだ。斎賀が「あいつは俺より働いているかもしれん」と漏らさなければ、見当もつかなかっただろう。

羅刹に何も言っていないのは、少し意外だった。

晴久は機会があれば、羅刹にも手伝え、力を貸せ、と要請してくるような人間だ。今回も何かしら一言あるだろうと思っていただけ

に、連絡がこないのは好都合でもあり不気味でもあった。

だからといってのこのことこちらから出向いて、藪蛇になりたくない。

それに事件のこととは別に、気になることもあった。

誰かに見られているような気がするのだ。

最初は勘違いか、神経過敏のせいかと思った。視線を感じ始めたのは五日ほど前からだ。立て続けにおかしなことが起こったせいで、何かに狙われているような錯覚もおこしたのだと、そう片づけていられたのも初日だけの話だ。

起床してから就寝するまでのほぼ一日中、その視線は羅刹にはりついて離れなかった。

姿を見せることも、声を出すことも、ましてや襲ってくることもなかったが、確実に彼を「見て」いる。その感覚は、思いのほか緊張を強いられるものだった。別に見られて困ることをしているわけではないのだが、「見られている」という意識は想像以上に疲労を増大させた。

何より困ったのは、その視線が人外のものである、ということだ。人間の気配と、妖魔のそれには、慣れた者ならばそれとわかる違いがある。羅刹にまわりつく視線からは、妖魔特有の静電気のようにぴりぴりとした何かを感じた。

問題は、一体相手が誰で、何の目的から羅刹を見張っているか、だ。

心当たりと言えば、一週間前に対決した鬼くらいのものだが、あの鬼にしては気配が弱すぎる。あれほどの力の持ち主ならば、もっと肌を焼くような強い気配を感じるだろう。第一、あの鬼だったらとくに姿を現し襲いかかってきてもおかしくない。観察するにしても一週間は長すぎるような気がする。

迷った末に、羅刹は相手の姿を「探す」ことに決めた。

公園でやったように、集中すれば肉眼で見えないような距離でも視界に捉えることができるかもしれない、と思ったのだ。妖魔まが

いの力を使うことは気が進まなかったが、放置してより面倒なことになったら目も当てられないし、部屋の中で寛ぐことも出来ない現状は結構ストレスであつたりする。

「と言つても、また出来るかどうか分からないんだよな……」

なにせあれは意図せずして出来たことだ。何をどうすればいいのかなど、見当もつかない。

まあ、駄目なら駄目でもいいか。

そんないい加減な心構えで、羅刹はアパートの自室で床に座り、目を閉じた。目を閉じたのは、余計なものを視界に入れないためと、集中するためだ。

一週間前とは違い、対象がどの方向にいるか全くわからなかったので、そうそう上手くはいかなかった。

何回かどこかの風景がちらついたが、全てばらばらのもので互いに関連性もなく、しかもこちらの意志とは関係なく遠ざかったり近づいたりしてくるものだから、頭がくらくらする。

やっぱり無理か。

三十分ほど試みて、羅刹は脱力し、溜息を吐く。

集中し続けるのも疲れるものだ。真昼間から何をやっているのか、と自分で自分を問い詰めたい。これではただの暇人ではないか。

「どうすつかな……」

「何を悩んでおるのだ？」

自分以外、誰もいないと思っていた空間に響いた声に、羅刹の心臓は盛大に跳ねた。しかも、ほぼ同時に背後から抱きつかれては尚更だ。首に絡まるひんやりとした白い腕が、幽霊のようで怖い。声に聞き覚えがなかったら、叫び声を上げていたかもしれない。

「脅かすな、白夜」

「びつくりしたか？」

顔は見えないものの、声が弾んでいる。

何でそんなに嬉しそうなんだ、と口を開きかけて、楽しいならいいかと言葉を飲み込む。

「いつからそこにいたんだ？」

「お主が何やら瞑想し始めてからだ。だから終わるまで大人しく待っていたのだぞ！偉いだろう」

「偉い偉い」

「むう。全く褒められた気がしない……べつ、別にこのようなことで褒められたかったわけではないがな」

「何ぶつぶつ言ってるんだ」

若干、意地悪げに言っていると、白夜の腕に力がこもる。

「何だその態度は？。お主が寂しがっていると思ってるわらわが来てやったというのに！」

「へーえ、そうか。俺のため？」

「うむ」

「じゃあお前は俺に会いたくなかったのに、わざわざ来てくれたってことか。それは悪かったな」

「そ、そんなことは言っていないだろう！」

「そんなに嫌なら、帰ってもいいぞ」

白夜は腕を解いて立ち上がった。

振り向くと、あからさまに不機嫌そうな顔をして仁王立ちしている姿が目に入る。

「よいか、一度しか言わぬからよく聞くがよい！わらわがお主に会いたかったから来たのだ！だから……だからわらは帰らぬ！ぜったいに帰らぬからな！何を笑っているのだ、お主は」

「いや……お前、必死すぎ」

「必死で何が悪い」

と言いつつ、どことなく悲しげに俯く白い頭を見ると、罪悪感のようなものが湧き上がってこないでもない。

「悪くないって。お前のそういう所は結構好きだぞ」

「本当か！？」

すぐさま満面の笑みになる白夜に「単純」という単語が口をついて出そうになるが、何とかそれは押しとどめる。

「本当だつて。それより訊きたいんだけど」

「何でも訊くがよい」

「……お前、ここ一週間俺のこと見張つてたりしたか？」

「見張る？」

白夜が怪訝そうな顔になる。

「わらわが、お主をか？何故そのようなまだるっこしいことをせねばならぬ。お主の部屋なら、ふりーすばで入れるのだぞ？」

「フリーパスのことか？」

「ど、どちらでも同じであろう。そのようなことを訊くとは、お主まさか何者かに監視されておるのか？」

「いや……まあ」

「どっちだ！男ならはつきりせぬか！」

「されてます」

瞬間湯沸かし器以上の速さで怒り心頭の白夜に、羅刹は観念した。白夜にこんなことを言えば、別の意味で面倒なことになる。そうなのであまり言いたくはなかったが、適当な言い訳で誤魔化される相手ではないし、彼女の協力があれば視線の主を見つけられるかもしれないので、ここ一週間のことを全て白状した。ただしあの鬼に出会ったことや、それを撃退した時のことは話さなかった。仲間を傷つけられた話など聞いても、白夜は面白くないと思つたし、自分でも何が起こつたのかわからないのに、他人に上手く説明できる自信もなかった。

話を聞き終わつた白夜は、「なるほどな」と腕組みをする。

「妖魔が犯しただろうと思われる殺人の発生と同時に、視線を感じ始めたのだな。確かに不気味だ。そやつ、次の獲物としてお主に目をつけたのではないか？」

「怖いこと言うなよ」

「あながち間違いではないかもしれぬぞ？そやつが普段から人間に紛れて生活しているとしたら、現場に居たかもしれぬ。何しろ、悪趣味な連中が多いからな。そこでお主を見初めたのかもしれない」

「……でも、俺の感覚には引つかからなかった」

自惚れるつもりはないが、羅刹の「感覚」は同類の人間と比べてもかなり優秀な方である。晴菜を狙っていた鬼に気づいた時のように、大抵の場合は姿が見えなくても位置が特定できる。今も、相手の気配は察知しているのだ。相当距離があるらしく、どこに居るのかは掴めないが。

白夜は、羅刹の額を指で弾く。痛みに顔を顰めた彼に、たわけ、と得意気に言い放った。

「お主がいくら敏かろうが、気配を読み取れないほどに隠す妖魔はいる。そもそも、我らの方が『目』はいいからな。お主の探知範囲から外れたところから見ていたのかもしれないぞ」

「お前は見つけられるのか？」

「任せろ。夫殿の安寧を脅かす輩は、わらわが成敗してくれる。大船に乗ったつもりでいるがよい」

「いや、成敗はしなくていいんだけどな。危ないだろ」

羅刹の言葉に、白夜は一瞬きよんとするが、すぐに破顔した。

「わらわのことを心配してくれるのか？」

「……」

「照れずともよいぞ。お主のはーとは、しかと受け止めた」

何の気なしに言ったことなのに、白夜はやけに嬉しそうだ。この少女は、いつもそうだ。羅刹の、大したことのない言動をまるで宝物のように喜ぶから、自分にそれだけの価値があるのではないかと錯覚しそうになる。

そんなわけではないことが、わかっていても。

羅刹が浸っているのをよそに、白夜は目を閉じる。瞼の裏で眼球がびくびくと動き、じつと眺めていると立ち上る妖気が見える気がした。実のところ、白夜がどの程度の力の持ち主なのか羅刹は知らない。今の姿が本当の姿ではない、という言葉通り、本当の実力もこうして傍にいただけでは推し量ることができないのだ。羅刹など及びもつかない化け物にも、少々見た目が奇異なただの少女にも見

える。

「 待て！！ 」

突然、白夜が大声を上げて立ち上がった。

驚いて見上げる羅刹には構わず、誰もいない頭上を睨んで眦を吊り上げる。

「 小物風情が、わらわから逃げられるとでも思ったか 」

「 白夜、落ち着け っ て ！ ？ 」

腕を掴むと同時に、視界がぶれた。一拍遅れて、なぜか浮遊感と同時に落下し、何かを下敷きにした衝撃を感じる。混乱しながらも、痛みに呻きつつのろのろと身を起こす。落ちた時にぶつけた肩が痛むが、幸いにもそれほど高いところから落ちたわけではないようだ。真っ先に目に入っただのは、仰向けに倒れている少年である。

羅刹が落ちた時に下敷きにしてしまったらしい。気絶しているようだ。本来ならば彼の心配をするべき場面だが、羅刹は目を奪われてしまった。ふさふさとした、狐色の尻尾に。

「 無事か、夫殿 」

何事もなかったかのように白夜が袖を引く。

辺りを見回すと、見覚えのない景色が視界を占める。自宅の近くではないようだ。

羅刹は白夜を見返し、次いで正体不明の少年を見下ろした。

「 どこだ、ここ… 」

晴久は数日ぶりに屋敷に帰った。ここ一週間、調査に夢中になって忘れていたが、流石に休息を取らなければ体がもたなかったのだ。それに叔父に報告もしなければならぬ。休む前に会っておきたかったが、来客中のようなだったので部屋に戻り、眠ることにした。夢も見ずにぐっすり眠り、起きるとすぐに呼び出された。

部屋の外から声を掛け、襖を開けて入室する。

叔父の姿は予想していたが、その脇にもう一人、見覚えのある人間が座っていて、思わず言葉が漏れた。

「勇さん……？」

「久しぶり、晴久君」

穏やかに微笑む線の細い青年は、名を冷泉勇太郎という。御門家の分家の一つである冷泉家の退魔士だ。物腰柔らかで、何度か共に妖魔討伐に赴いたこともあるこの年上の青年を、晴久は兄のように慕っていた。自然、笑顔がこぼれる。

「お久しぶりです。どうして勇さんがここに？」

「晴久。まずは座つたらどうだ」

呆れ顔で言つたのは、本来用事があつた叔父の方だった。きつい言い方ではないが、人を従わせる力がある。御門家の当主として、名実共に最高の退魔士の名を欲しいままにする彼は、晴久にとつて叔父である前に従うべき上司であり、越えるべき壁でもある。もつとも、今はまだ力及ばないことはわかつているし、敬意も持っているから、従うことに異論はない。敵わないことが、少しばかり悔しくはあるが。

晴久が座るのを待つて、叔父が口を開く。

「勇太郎君は、今回の件でお前の手伝いをするためにわざわざ来てくれた。お前も知つてのとおり、妖魔の痕跡を追うことにかけて彼は一流だ。力を借りるといい」

「それはありがたいことですが……いいのですか。その、冷泉の当主は」

言い淀むのにはわけがあつた。御門家には、冷泉を含めて七つの分家が属しているが、その中でも冷泉家は本家である御門に好意的でないというか、独立の意志を示しつつある。特に現当主は、当主連の中でもトップクラスの能力を持つているせいか我が強く、協力を要請されてもおいそれとは頷かないと評判だった。

「心配には及ばん。お前が寝ている間に、彼とは話をつけた」

晴久の懸念を叔父はあっさりと一蹴する。

「え、あ…来客とは、もしかして冷泉の当主ですか？」

「そうそう若造の我俣にもつき合っておれんからな」

流石に当主の名は伊達ではないということか。叔父は滅多に声を荒げることはないが、無言の圧力というものの恐ろしさを体現する人物である。面と向かって命令されて、拒みとおせる者は多くないだろう。

確か、冷泉の当主は晴久とそう年の変わらない青年のはずだ。普段は他県にいるせいもあって、偶然にもまだ顔を合わせたことはないが、来ていたのなら挨拶ぐらいしておきたかった。

そう言つと、勇太郎が苦笑して首を振った。

「やめておいた方がいいよ。相当、きつい方だから。晴久君とは、合わない」

「全くだな。もし私が彼と同年代だったら、尻を蹴飛ばしてやるどころだ。私は君が当主になればいいと思っていたんだがね」

「そんな柄じゃありませんよ。それに、彼と争って勝てるとは思えませんでしたし」

「やれやれ…：そういうところも君の美德ではあるが」

溜息を一つ落とし、それ以上は言い募らずに叔父は姿勢を正す。

「それで何か報告はあるか、晴久」

「はい…と言つても、ほとんど斎賀さんの情報なんです。今のところ被害者は人に恨まれるようなこともないごく普通の女子高生で、家庭でも学校でも問題はなかったようです。遺体が見つかった公園も通学経路の近くで、通り魔的な犯行だと言っていました」

そう、妖魔は通り魔のようなものだ。

戯れに目を付けた人間を、ごみ屑のように弄ぶ。被害者がそれで命を落とそうが、残された者がどんな思いをするかなどちらりとも考えないに違いない。いや、むしろそれを見世物か何かと勘違いしているのだ。

あの時も。

「私情を挟むな、晴久」

思考を読んだかのような叔父の言葉に、晴久は唇を噛む。

未熟を指摘された羞恥と、行き場を失った怒りが瞬間的に爆発し、そうになるが、無理やりにそれを抑え込む。

「……すみません。斎賀さんが言うには、遺体の傷口は刃物や人工的な凶器でつけられたものではないそうです。内臓の一部がなくなっていたことから考えても、野生動物に食われたように見えます。それと」

「何だ？」

「被害者は、生きたまま食われた可能性もあると」
叔父が顔を顰める。

「酷いな、それは」

「野犬が目撃されたという話も聞きませんし、近くに山林や動物園もありませんから、肉食獣に襲われて死んだという線は薄いと思います」

「妖魔の可能性が高い、ということか。わかった。この件はお前に任せる。被害者は晴菜の同級生だからな。お前にとっても他人事ではないだろう」

「ありがとうございます」

「だがくれぐれも先走って無理はするな。お前の能力は疑っていないが、この妖魔はお前の仇ではないのだからな」

「はい……」

肉親としての顔で言われては、晴久に返す言葉はない。叔父には一生かかっても返しきれない程の恩がある。逆らうなど、考えもつかない。

だが表情が見えないように伏せた顔には、今も消えない怒りが表れていたかもしれない。なかった。

「一臣様は君を心配しているんだよ」

部屋から退出すると同時に、勇太郎から言われた言葉に晴久は苦笑する。ちなみに一臣とは叔父の名前である。

「気を遣わなくていいですよ、勇さん。もう子供じゃないんですから」

「そうかい？ だけど君がいくら成長しようが、僕の方が年上であることは変わらないんだよ」

自慢げに胸を張る勇太郎に、つい笑みが浮かぶ。

「年上ぶらないで下さいよ。俺だってあの頃ほど無鉄砲じゃありません」

「ふうん？ じゃあ天狗に突っ込んで行って、派手に返り討ちに遭うようなことはもうないね？」

「さりげなく古傷を挟らないで下さい。封印したい過去なんですから」

晴久が初めて勇太郎に引き会わされたのは、六年前のことだった。一時的に御門家に居候していた勇太郎は、彼をサポートし、さまざまなことを教えてくれた。晴久は当時、訓練を修了して実戦をこなし始めたばかりだったので、年上ながら押しつけがましくない勇太郎から学ぶことは多かった。

知識や術の基礎は全て叔父に叩き込まれたが、それだけでは足りない部分を補ってくれたのは勇太郎だ。思うようにいかず行き詰った時も、兄のように見守り、さりげなく方向性を示してくれていたのだと気づいたのは、彼が冷泉家に帰ってしまっただけのことだった。

そんな勇太郎に一つ悪い癖があるとすれば、顔を合わせるたびに昔の失敗で晴久をからかうことだろうか。もっとも、晴久にしても割と楽しんでいたりするから、本気で困っているわけではない。

「今の俺なら、勇さんの足を引つ張ったりはしませんよ」
「だったらその成長ぶりを見せてもらおうか。楽しみにしてるよ」
ぽん、と一つ肩を叩き、先を歩く勇太郎を、晴久は追いかけた。

「御門」

校門を出たところで、晴菜は自分を呼ぶ声に足を止めた。
振り返ると、同級生の海老原が足早に近づいてくる。

「どうしたの、海老原君」

「今、帰り？」

「そうだけど」

「一人で帰るなんて、危ないだろ。殺人事件があつたばかりなのに。犯人がどころついているかわからないんだから」

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫。まだ明るいし、人のいる道を通つて帰るから」

「送って行こうか」

「どうして？」

「どうして、って…」

「海老原君の家、私の家と反対方向でしょ？前にそう言つてたじゃない」

「え？そうだっけ」

「ばつが悪そうな顔をする海老原に、晴菜は笑い返す。」

「でもそう言つてくれるのは嬉しい。じゃあ、また学校でね」

こくり、と頷き返し、名残惜しげに校舎の方へ戻っていく海老原を見送りながら、晴菜は昨夜、香澄からかかってきた電話を思い出す。

「あたし、海老原君が好きなんだ」

「そうなんだ。恰好いいもんね」

ある意味、短絡的な相槌だったが、晴菜はそう返したのだ。実際、

海老原は同級生の中では整った顔立ちをしていたし、それ以外の個人的なことを晴菜は知らなかったので、そう返事をするしかなかった。

香澄はやけに不安そうだった。

『晴菜もそう思うの？……ねえ、応援してくれるよね？』

『勿論。香澄だったら、海老原君も好きになっってくれるよ』

『本当にそう思う？じゃあ、海老原君のこと、晴菜はなんとも思っていないの？』

『なんとも思っていないよ。どうしてそんなこと訊くの？』

『だって晴菜、凄く可愛いから……あたし、全然自信ないよ』

晴菜は困惑した。

異性と付き合ったことのない彼女には、何と云えば友人の不安を取り除けるか見当もつかなかったし、それどころか自分がその不安の元凶になっているのかと思うといたたまれない気持ちになった。

香澄だって可愛い。明るくて正直なところには憧れている。

そう本心から言ってみても、それが伝わっているのかはわからなかった。海老原は顔も頭もよく、クラスでも目立つ存在だから余計に気おくれしているのだろう。それに、少し前まで晴菜に頻繁に話しかけていたことも気になるらしい。だが最近は香澄と二人だけで話しているところもよく見かけるし、もっと自信を持つべきだと思う。

何もおかしいことではない。

晴菜は多分、平均より上の容姿を持っているのだろう。それは認める。彼女は多少、世間知らずな所はあるが、鈍くはない。家族には猫可愛がりされて育ったし、大体において異性からは優しくされた経験しかない。勿論、周囲の愛情に相応しくあろうと、失礼な態度は取らないようにしているが、それとてちやほやされるほど特別なものではないと自覚していた。だからだろうか、容姿を褒められても、心浮き立つことがない。

子供の頃は、「可愛いね」と言われれば嬉しかった。

今も言われて嫌なわけではないが、同時にこうも思うのだ。

自分には容姿以外に何の取り柄があるのだろう、と。

友人のことも満足に励ませない自分は、見た目に釣り合った中身など何もないような気がする。そう考えると、褒め言葉も恐ろしくなる。空っぽの自分をいつ見破られるのかと怯え、逃げ出したくなる。

ふと、兄の友人の顔が浮かぶ。

初めて会った時、あまりにも美しいその容貌に息を呑んだ。人間離れた、という形容がよく似合うその人も、やはり晴菜の外見を褒めたが、その実、本心では無関心だということは目を見ればわかった。

自分でも意外なことに、晴菜はそのことが嬉しかった。過剰に期待されていないことで、気が楽になったのだろうか。彼の前では気負わずに話せだし、純粹に相手のことを知りたいと思えた。

海老原にも、他の異性の誰にもこんなふうに思ったことはなかった。

それに気づいて、晴菜は少し、頬を染めた。

羅刹は辺りに視線を走らせた。やはり見覚えはない。ぱつと見た感じでは、どこかの廃ビルの屋上のようにも見えるが、そもそもどうしてこんな所に自分が立っているのかも謎である。

そして最大の疑問は 彼の足もとに転がっている、正体不明の子供だ。

ふさふさとした狐色の尻尾さえ無視すれば、普通の少年に見える。まだ十歳くらいだろうか。羅刹の下敷きになったせいで意識を失っている。あまり目覚めて欲しくないな、と思いつつも、隣の白夜に視線を向けてみると、何とも言い難い表情で見返された。

「……どうした？」

「小物だ」

「は？」

「ただの子狐ではないか。もっと手強い相手を予想していたのだが……わらわの頼りがいをあびるしようと思っていたのに」

「お前な……」

羅刹は脱力する。本人が大真面目なのはわかるが、だからこそ返答に困るというものだ。

「てか、こいつ何者だよ？」

「だから、ただの子狐だと言っただろう。害はない。多少、小うるさいかもしれんが、お主をどうこう出来る力など持っておらぬ」

「へえ」

「まあ、気になるならばこの場でわらわが滅してもよいが」

「いや、その前に俺を見張ってた理由が知りたい」

「ふむ。それもそうだな。こやつの後ろに黒幕がいるかもしれぬ」

白夜は転がっている子供の傍にしゃがみこむと、「起きろ」と容赦なく往復びんたを叩きこんだ。ばちんばちんと鋭い音が響き、「うつ……」と呻き声を上げながら少年の目が開く。

「目が覚めたか、小童」

自分もさして変わらぬ外見のくせに、白夜が偉そうに言う。

「わらわの質問に速やかに答えよ。なぜ、わらわの夫を不躰にも監視したのだ？」

「え、え、え？」

「誰かに命令されたのか？何の為に？大人しく吐いた方が、貴様のためだぞ」

「ああああの」

「……」

「その」

「……」

「えっと」

「……」

「何て言うか、えーと」

「ええい、鬱陶しい!!」

「ひいつ」

白夜の一喝に、少年の肩がびくりと震える。小動物のように大きな目が、おどおどと二人を交互に見つめる。弱い者いじめをしているような気になってきた。それにしてもこの少年、怯えすぎではないだろうか。白夜が尊大で短気なことを差し引いても、たかだか十二、三歳の少女にここまで圧倒されるとは普通ではない。

「…お前、名前は？」

「え!?!、伊織です」

「伊織。そんなに怯えなくても、別に取って食いはしない。どうして俺を見ていたのかを聞きたいだけだから。こいつのことは気にするな」

ぽん、と白夜の頭に手を乗せる。白夜はむっとしたように睨んできたが、それは無視した。

「ほ、本当に僕のこと襲ったりしませんか？」

「ああ」

「……常盤様にも言いつけたりしませんか？」

「なに!?! 貴様、あの女狐の手下か？今度は何を企んでおる、あの女！正直に吐」

猛然と詰め寄ろうとする、白夜の髪を掴んで止める。「ぐえ」と呻いて前のめりになるのをよそに「常盤つて？」と平然と訊ねる羅刹を、伊織は啞然として見上げた。

「白炎様にそんな仕打ちをするなんて、何者ですか？」

「白炎？」

「余計なことはいいいのだ、子狐。訊かれたことに答えるがよい」

「は、はひ！」

「あんまり脅かすなよ」

「ふん。常盤のことなら、そやつに訊かずともわらわが教えてやる。あやつはな、女狐だ。それもかなりたちの悪い、な」

「女狐？」

「いわゆる妖狐、というやつか。人の姿に化け、妖力を操る狐の一匹だ。その子狐は精々、百歳を超えた程度であろうが、常盤は千年近く生きているともっばらの噂だ。玉藻前とも会ったことがあるという話もあるしな。『千里眼の常盤』と言って、有名な女だ。わらわは嫌いだが」

「その常盤と、俺に何の関係が？」

「と、常盤様から、あなたを見張るようにつて命令されたんです。その……炎鬼の血を引いている可能性があるからつて」

「何だと？」

反応したのは白夜だった。凄まじい勢いで、睨みつける　伊織ではなく、羅刹を。

「どうということだ？」

「どういつつて……」

羅刹にも説明できない。

常盤、という女に会ったことがないのに、向うは自分を知っているという状況には困惑せざるを得ないし、炎鬼の血を引いている云々については自分でも考えたことはあるが、そのこととて白夜に告白できるほど消化できていないのだ。

しかし羅刹が考えを巡らせている間に、残り二人の間で話は勝手に進んでいく。

「と、常盤様が言うには、刹那様を退けたとか」

「刹那を！？」

「ぼぼぼ僕は何かの間違いじゃないかって言っただんですけど！常盤様に言われたら逆らえないじゃないですかあ。僕だって嫌だったんですよ。だ、だって常盤様の言っただことが本当だとしたらですよ、刹那様以上の怪物にずっと張りついてることじゃないですか。僕なんて最近、やっと人に化けられるようになったばかりなのに、そんなの相手にどうしろつて言うんですか！？しかも白炎様まで来ちゃうし、僕本当に生きて帰れるんですか！？」

「やかましい！男のくせにびいびい泣くな！」

「……あーお前ら、ちよつと落ち着け」

「これが落ち着いていられるか！」

かつと白夜が目を見開く。

「もしも、もしもお主があゝの刹那を負かしたと言つのなら……わらはあやつと契らなくていいかもしれぬ」

「はあ？」

「前に話しただろ。わらわには婚約者がいると。それが刹那だ。次の炎鬼一族宗主と言われて天狗になつて、傲慢な男よ」

炎鬼一族。確か、晴久もそんなことを言っていた。

妖魔の中で最も強い力を持つ、鬼の一族。その中でも更に頂点に位置する種族が、炎鬼と呼ばれる一族のはずだ。羅刹を襲つたあの鬼 刹那という名前らしいが 次が宗主であることも晴久から聞いていたが、白夜がその婚約者だとは初耳である。いや、事前に聞いたところでどうすることもできないのだが。

「つてことは、お前も炎鬼の仲間なのか？」

「む……それは今、どうでもよいのだ！肝心なのは、お主が刹那に勝つたことと、炎鬼の血縁かどうかということなのだから」

「それがそんなに重要なことか？」

「わらわにとつてはな。わらわの結婚相手は、掟で『炎鬼一族で最も強い者』と決められている。炎鬼の宗主は、一族で最も強い者になるから、自動的にわらわの相手は刹那と決まっていたのだ。だがお主が刹那に勝つたということは、だ」

「あ、刹那様には白炎様と結婚する資格がない、ということですね こんな時だけ流暢に、伊織が合いの手を入れる。白夜は大きく頷いた。

「そういうことだ」

「ちよつと待てよ。ということは、その刹那？には宗主になる資格もないってことか？」

「まあ、そうなるな。鬼とは、わけでも炎鬼は誇り高いからな。そ

の強さにけちがついた宗主など周りも認めぬし、本人とて恥ずかしくて名乗れまい」

「もしや自分は、とんでもない立場にいるのではないか。

唐突に気づいて、羅刹は頭を抱えなくなった。刹那に勝ったと言っても、最初は不意打ち、二度目は奇跡のような偶然によってだ。正々堂々と叩きのめすだけが勝利とは思わないが、だからといってあれをもつてして勝利と言うのも違う気がする。

そして自分が炎鬼の血縁か、という疑問も　わからない、としか言いようがない。

一週間前までならまだぎりぎり否定できたが、ここ最近の自分に起こった現象は、明らかに人間離れしすぎている。そうは言ってもこれ以上、面倒を抱え込むのは御免だ。刹那になり替わりたいとは微塵も思わないし、宗主の資格があると言われても嬉しくない。

白夜の喜びに水を差したくはないが、そのことを言おうと口を開いた瞬間だった。

「　調子に乗るなよ、糞女が」

誰もいないと思われた背後からの声に、全員が振り返る。

まさに今、話題になっていた赤髪の鬼　刹那が、立っていた。

一目見て、刹那が激しい怒りに駆られていることはわかった。

最早、人間の姿を取り繕うこともせず、元の姿のまま直立し、爛々と燃える赤い目でこちらを激しく睨んでいる。二度の邂逅で、殺されかけた時でさえ彼を恐ろしいと思わなかった羅刹も、その目つきに背筋が栗立った。

張り詰めたような沈黙を、最初に破ったのは白夜だった。

「何故、お主がここにいる」

「何故？」

不気味なほど、静かな声で刹那が呟く。

「いい質問だな。教えてやろうか、白炎殿。お前は、自分が命令すれば誰もが言うなりになるとたかをくくってたんだろうが、俺は違う。俺は次の宗主だ。たまたま、白炎として生まれただけでふんぞり返ってる女が、一人になりたい、誰とも会いたくない、なんてほざいても、俺には関係ないんだよ」

「ふん。それでわざわざ捜しに来てくれた、とでも言うつもりか？　どういふ風の吹きまわした。まさか今更、相互理解に努めようという気になったわけでもあるまい」

「は、まさか。こっちはお前の存在が忌々しくてしょうがねえってのに。理解するほどの価値がお前にあるとも思ってたねえよ」

「それはそれは、ありがたくて涙が出そうだ。わらわとてお主の顔など見たくないから、気を遣わずともよいのだがな」

「遠慮するなよ。俺とお前の仲だろっうが」

平坦に言つて、刹那は目を眇める。

「今度は俺の質問に答えてもらおうか、白炎　なんでお前が、その男と一緒にいる」

ぎろり、と射殺しそうな目で睨まれて、羅刹は身を強張らせた。

傍にいた伊織が「ひい」と小さな悲鳴を上げて、しがみついてくる。

「ぼっ僕はこの方たちと全く関係ありませんから！」

「黙ってる、雑魚が」

「すすすすみません」

凄まじい眼光に貫かれ、伊織が凍りつく。その視界を遮るように、白夜が一步前に進み出た。

「お主が腹を立てているのは、わらわにだろう。この男も、まして子狐も無関係だ。弱い者に誰かれ構わず牙を剥くとは、炎鬼の誇りも地に堕ちたものだな」

「言っじゃねえか」

地を這うような声音にも、白夜は動じない。

「勘違いするな、刹那。わらわはお主の妻となることに異議はあるが、お主を追い落とすつもりで羅刹に近づいたわけではない。それとこれとは別の話だ」

「別……？」

刹那はくく、と喉の奥で短く笑う。

「調子のいいこと言ってるじゃねえよ。お前がどういいうつもりだろうが、関係ない。その男は俺の敵で、お前が俺に断りもなしにそいつと通じていたってことは事実だろ。別に驚きやしないがな。お前は俺のことが嫌いだもんなあ、白炎」

「それはお互いさまだろう　わらわの力を引き出せないのが、そんなに悔しいか。逆恨みされても迷惑なのだがな。わらわのせいではなく、お主の力量が足りないだけなのだから」

「……てめえ」

「何だ？怒ったのか？図星だからな。一族共も他に適当な者がいないからお主を次期宗主としてはいるが、腹の中ではもっと相応しい者がいるかもしれないと疑っているだろうよ。どんな気分だ？誰かの身代わりとして宗主に祭り上げられるのは」

白夜の科白は、途中で遮られた。

刹那から放たれた炎が、その体を直撃して吹き飛ばしたのだ。驚いて背後を振り向く羅刹だが、白夜の姿は見えない。まさかビルから落ちたのか、と嫌な想像が浮かぶが、それを確かめる前に「わらわと本気でやり合う気か」という冷めた声と共に、どういう魔法で一瞬で刹那の背後に移動した白夜が、その頭部を容赦なく蹴り飛ばした。

「ごん、と凄まじい音がするが、刹那は何事もなかったかのようにゆっくりと首を回し、にやりと口角を上げる。

「こんなもんか、白炎」

「……」

「今のてめえが俺とまともに戦えると思ってんのか。だとしたら舐められたもんだな」

「やってみなければわからぬ」

「馬鹿が」

すぐに二人の戦闘は、目で追えなくなった。白と赤の残影が現れては消え、人間ではとても捉えきれない速度で、激しい攻防を行っているのがかるうじてわかる程度だ。

呆然と立ち尽くす羅刹の袖を、伊織が引つ張る。

「何ぼんやりしてるんですか。今のうちに逃げましょう！」

「はあ!？」

「はあ、って僕たちは関係ないじゃないですか!あんなのに巻き込まれたら即死ですよ、即死!」

伊織の言っていることはわかる。わかるが、はいそうですかと頷くことはできなかった。

伊織はともかく、羅刹は間違いなく刹那の怒りに一役買っているだろうし、見知らぬ誰かなら いざ知らず、白夜だけを戦わせ自分が逃げだすのは気が咎めたのだ。そんな風に思ったのが、自分でも少し意外ではあったが。

羅刹の逡巡を感じ取ったのか、伊織が語調を強める。

「何を迷うことがあるんですか?勝手にやらせておけばいいんです

よ。あの二人は仲が悪いことで有名ですから、今更止まりません。それとも割って入るつもりなんですか？」

「それは……」

「それならご自由にどうぞ。僕は失礼させてもらいます」

「え？ ばっ……」 待て ”！ ”

今にも逃げ出そうとしていた伊織の動きが、金縛りにでもあったかのようにぴたりと止まる。その目が動揺したようにせわしなく瞬きを繰り返すが、羅刹はその反応を特に不審に思わず、これ幸いと訊ねる。

「あいつらは、どっちが強いんだ？」

「……刹那様に決まってるじゃないですか。白炎様も本来の力が出せば、善戦できるでしょうけど……あの姿じゃあ、実力の半分程度も出せばいい方だと思いますよ。本当なら白炎様が、候補とはいえ宗主様に逆らうこと自体が、ありえないことなんですけどね」

「それはどういう」

言いかけた矢先に、刹那に派手に蹴飛ばされた白夜が目の前をごろごろと転がるのが視界に入る。

「白夜！！」

「まだいたのか、お主ら」

のろのろと顔を上げた白夜は、眉根を寄せる。蹴られた箇所が痛むのか、羅刹に呆れたのか判断の難しいところだ。

「早く逃げる。わらわの努力を無にする気か」

「……まさかお前」

ふと閃いた仮説を口に出すよりも、刹那が白夜の側頭部を蹴る方が早かった。手加減も何もない、容赦のない一撃だった。横倒しになる白夜を冷めた目で見下ろし、刹那は「もっと早くこうしてればよかったな」と呟いた。

「白炎なんて俺には必要ない。足を引っ張るだけの邪魔者は殺しておくべきだ。お前もそう思うだろう？」

「……愚か者が。それで一族を纏められると思うのか、お主は」

「纏める必要なんてねえよ。逆らうやつは全員叩き潰す。簡単だろ？」

「お主はいつもそれだな。力、力と馬鹿の一つ覚えのように言うは容易いが、それで本当にお主の苛立ちは収まるのか？周りのものを全てを跪かせ、恐れられることが望みなのか？それはそれで構わぬ。勝手にするがよい。だが宗主の座を、自分の強さを誇示する道具としか思わぬ輩になど、わらわは断じて従わぬ！」

「は！随分と饒舌じゃねえか。くだらねえ御托はたくさんだ。勝った奴が正しいんだよ。俺がこれからそれを証明してやる」

刹那の赤い目が、何かの予兆のように色濃く揺らめく。無性に嫌な予感がした羅刹は、衝動的に「力」を放っていた。最初に遭遇した時のように、前触れもなく横ざまに数メートル吹き飛んだ刹那の体は、しかし地に落ちる前に視界から消失した。

一拍置いて、膝裏に衝撃を感じる。バランスを崩して体が傾いたところを、有無を言わず後頭部を物凄い力で押され、羅刹は無様に転倒した。

「羅刹！！」

「俺に遊んで欲しいのか、人間？」

頭上から、刹那の嘲るような声が降ってくる。

「そやつは関係ないだろう！放せ、刹那！！」

「ぎゃあぎゃああうるせえ。こいつがいるから、てめえも俺に逆らうんだろうが。何を期待してるんだか知らねえが、こいつごときのせいで舐められてたまるか」

「貴様！！」

上から押さえつけられ、顔も上げられない状態で羅刹は段々、腹が立ってきた。刹那と白夜の会話には、ところどころ意味のわからない箇所もあるが、前回の遭遇で言われたことを考え合わせるに、とどのつまりこの状況は刹那の見栄のせいではないか。

先に手を出したのは羅刹だが、そうしなければ晴久に見つかっていたし、その後は殺されかけたのだ。結果的に刹那の方が重傷を負

ったとはいえ、それこそ自業自得ではないか。こいつを満足させるために、自分は何回死ななければならぬのか。

勝手なことを言うな。

苛立ちに任せて、「力」で刹那を跳ねのけようとするがそれより早く首を鷲掴みにされる。

「さよならだ」

勝ち誇ったような宣言と共に、骨の折れる鈍い音が響く。羅刹の首の骨は、刹那によって実にあっさりと折られていた。

そこは暗闇だった。

誰かの呼びかける声に、羅刹は目を開く。刹那も白夜もない状況を怪訝に思いながらも、身を起こすと、目の前にはもう一人の自分とも言える存在が立っていた。容姿も背の高さも寸分違わないその青年は、羅刹を見てにやりと笑った。

「お目覚めか。殺された気分はどうだ？」

「……殺された？」

「おいおい、鈍い奴だな。あの鬼のせいでお前は死んだんだよ。首を折られてな」

「じゃあここはどこだ？それにお前は？」

「どこだっていいだろ。敢えて定義づけるなら、お前の深層意識の中とも言おうか」

「深層意識……？」

「もっと混乱させてやろうか。俺はお前とは別の、お前という存在の概念だ」

「どういう意味だ？」

青年は「面倒くさいな」と言いたげな顔をする。

「簡単に言えば、もう一人のお前ってことだよ」

「？」

「おかしいと思わなかったのか？前に刹那に殺されかけた時、どうしてお前が鬼の力を使えたのか」

「それは」

「鬼の血を引いているから、か？仮にそれが事実だとして、どうしてもあの時だけ使えたんだ？それまで使い方どころか、自分がそんな力を持っていることすら知らなかったのに」

「……」

「実際に炎を扱えた以上、お前にはその素質があった。じゃあ何で妖魔を退ける力は物心ついた頃から扱えたのに、妖魔の力は発現しなかったのか。簡単な話だ。お前は無意識にその力を抑え込んで、表に出ないようにしていたんだよ。まあ、当然だな。人間社会で生活していく以上、必要のないものだ。お前は出来るだけ人間らしく見せかけなければならなかった。そうしなければ生きていけないことを、本能で悟っていたから」

「淡々と解説されて、気味が悪くなってきた。目の前の青年は、自分と同じ姿かたちをしているが、顔つきや抑揚のつけ方が微妙に異なっているせいで全くの同一人物とは思えない。かといって別の人間と言い切れるほど、決定的に違っているようにも見えないのだ。」

「……お前は、誰だ」

「青年は、ふと笑った。人間のものよりも太く鋭い犬歯が覗く。」

「俺は、お前に捨てられた存在　つまり、鬼としてのお前だよ。そしてお前は、人間としての俺だというわけだ」

「捨てたと言っても、俺とお前が別人というわけじゃない。本来なら、俺とお前は二人で一人だった。だけど俺は、お前が人として生きるにあたって邪魔な部分だった。だからずっと眠っていた。あの鬼に、起こされるまでは」

「 刹那か」

青年は頷く。

「生命の危機に瀕して、俺は目覚めた。お陰でお前は助かったわけだが、少しずつ俺の影響を受けるようになったはずだ」

「 影響？」

「気づいていないのか？お前が、俺の力を使えるようになっていくことを。俺とお前は、僅かずつではあるが混ざり始めている」

「 ……」

「ところで、だ。お前はこの先、生き続けたいと思うか？」

「 え？」

青年は意地の悪い表情で羅刹を見返す。

「お前は、死んだ。普通の人間としては、な だがお前が望むなら、蘇ることもできる」

「 蘇る？……それは」

まるで人間離れた現象だ。

羅刹の戸惑いをよそに、青年は淡々と喋り続ける。

「当たり前のことだが、普通の人間は死んだら生き返ったりしない。お前が生を望むなら、俺の存在を受け入れてもらう」

「 受け入れる…鬼になれってことか」

「 正確には、鬼である一部を、な。蘇った後にお前がどんな姿になるのか、どんな力をどの程度、振るえるようになるのかはわからない。二目と見られない化物になるかもしれないし、性格が豹変するかもしれないし、大した変化はないかもしれない。完全に融合する

までは暫くかかるから、突然、何もかもが変わるってことは無いと思うが……そのリスクを負っても、お前は生きたいか？」

「どうしてわざわざ、そんなことを訊く？ お前の言うことが本当なら、お前にも決定権はある筈だろう」

「俺が生きるべきか、俺自身も甚だ疑問だからさ」

青年が憂鬱そうに言うと同時に、一面真っ暗闇だった視界がぱつと明るくなる。驚いて辺りを見回すと、いつの間にか羅刹は家にかつて両親と住んでいた家の居間にいた。目の前には、空っぽの食卓がある。

「覚えているか？」

「……何を」

「子供の頃は、いつも一人で食事していたよな。あの女が、お前とテーブルにつくことを嫌がったから。食べさせてやるだけありがたく思えって、残り物だの冷凍食品だのばかり食わせておいてよく言ったもんだ。それ以外は、部屋から出るなって命令されてたな。ちよつとでも逆らったら、容赦なく殴られた。土下座して許してもらったこともあったっけ。でもあの女がお前の存在を許したことなんて、一度もなかったと思わないか？」

「それが、どうした」

青年が言ったことは勿論、全て覚えている。覚えているからこそ、思い出したいくないし、二度と触れたくもない話だった。

青年はこちらの心中を見透かしたかのように、可笑しそうに口笛を吹く。

「それがどうした？ あの女に好かれなくて必死だったくせに。何だっただけな、あの女のお気に入り科白は　そうそう、『お前の存在が皆の迷惑』だ。あれは絶対、洗脳しようとして言ってたな。『皆』なんて得体の知れない、漠然とした対象だが、ああもしくこく言われちゃ信じてしまってもおかしくないよな？」

「馬鹿馬鹿しい」

「本当にそう思っているのか？　俺に隠し事をして無駄だ。何

しる俺は、お前だからな」

「お前が俺だとしたら、自分に嫌な思いをさせるようなことを言うのはおかしいだろ。マゾか？」

「お前はと思うんだよ」

その言葉と同時に、周囲の景色が一変する。

何の変哲もない学校の教室だった。羅刹は丁度教卓の前に立って、無人の教室を眺める形となっており、青年は窓側の後ろから三番目の席に座っている。

「学校でも、居心地は良くなかったよな。何しろ家であれだけ否定されてちゃ、他人に対して臆病になっても仕方ない。見た目だけは良かったが、お前の性格じゃ近寄りがたさを割り増しさせるだけだ。しかも、お前と他の連中には決定的な違いがあった。見えるか、見えないか、だ」

羅刹は顔を顰める。

今でこそ、妖魔を見ても何食わぬ顔でやり過ごしているが、それ以前、特に小学校の時は相当に挙動不審だったことは否めない。

母の反応から、妖魔を見ることができるのは自分だけであること、それを隠さなければならぬことは学んでいたものの、実際に至近距離でうろつかれたり飛びつかれたりして平然とできるほど、あの頃の羅刹は妖魔に慣れていなかった。

殆どの妖魔は、せいぜいがこちらを驚かせたりからかったりが目的の小物で、実害を加えられることは少なかったが、それでもいちいち動揺し、何も無いところで声を上げる姿は傍から見てもおかしいものだっただろう。

そして、少ないとはいえ人間に危害を加えようとする妖魔も、一定数は存在していた。

羅刹だけではなく、時にクラスメイトに手を出そうとする者もいたから、常に気を張っている必要があった。妖魔の気配に敏感なのは、素質以上にこの頃の経験によって鍛えられたからだろう。

「俺は守ってやったのに、あいつらはわかるうともしない」

青年が無表情で呟く。

その言葉に、不意に羅刹は思い出す。クラスメイトの少年が妖魔に襲われそうになっていた時、咄嗟に彼を突き飛ばして怪我をさせたことがあった。そうしなければ妖魔が少年を階段から突き落とそうとしていたためだが、少年は膝をしたたかにぶつけ、更に捻挫まです。

少年もクラスメイト達も、そして教師も羅刹を激しく責め立てた。理由はどうかあれ、少年に怪我をさせたのは羅刹だ。その理由も、正直に話すことなどではしない。彼に出来ることは、大人しく謝り非難を黙って聞くことだけだった。

悪いことに、この時期の彼の「力」はまだ安定していなかった。咄嗟の場面で、狙いを外したり上手く集中できないことが多々あったため、狙われる対象を物理的にどうにかする必要があるがどうしてもあったのだ。

普段は陰気なのに、前触れもなく暴力を振るう羅刹は、同性異性問わず嫌われ気味悪がられた。

教師すら味方にはなり得なかった。子供ながら、彼らに真実を話すことの無意味さには気づいていたし、機会があるごとに母に羅刹の行動を吹き込む教師は、敵にすら感じられた。

周りが悪いんじゃない。

帰宅して、激昂した母に折檻された後、羅刹はいつもぼんやりとそう考えたものだ。

じゃあ、俺が悪いのか？

助けなければいいのか。大怪我をするのがわかっていても、放っておけばいいのか。そもそも、どうして自分は彼らを助けようとしているのだろうか。友人でもない、自分を嫌っている人間を助けて何になるのだろうか。

「無意味だろう。俺にも、俺の力にも、俺の行為にも、何も意味なんてない」
「やめろ」

「どうあがいても俺は周囲に溶け込めない。誰にも必要とされない。誰も必要じゃない。それは、俺が『力』を持って生まれたせいなのか、もともと俺に何か欠陥があつたからなのか」

「やめろ!!」

空しく声が響く。羅刹は自分に瓜二つの青年を、睨みつけた。

「自分を哀れんで何になる。無様なことを言うな」

「そうだな。その自尊心が、お前の拠り所でもある。人と違う自分を恥じる気持ちと、そんな自分でも肯定せざるを得ない自意識が、今のお前を作り上げた」

「……他人が俺を否定するなら、俺自身が俺を肯定してやらなきゃ、救われないだろ」

「だが他人に拒絶され続けた人間が、本心から自分を愛せるもんかね？」

わからない。が、少なくとも、他人のことは愛せそうもない。中学二、三年の頃には「力」も安定し、他人への恐怖を押し隠す術も身に付けたが、ほぼ同時に人間への慢性的な嫌悪も、羅刹の中に根付いていた。

人間と妖魔の何が違うのか、わからなくなった。晴久が妖魔を悪と断じ、人間を守ることに血道を上げる理由が、羅刹には見えない。たとえば事細かに説明されたとしても理解できないだろう。晴久が、羅刹の妖魔に対する感情　人に排斥される様が、かつての自分に似ていると思う気持ちに共感できないのと同じように。

「それで、結局お前は何が言いたいんだ」

再び暗闇に戻った空間で、どこか所在なさに佇む青年に、羅刹は問う。青年は目を伏せた。

「俺の言いたいこと……いや、訊きたいことは一つだ。化け物となるリスクを負っても、お前は生きたいか？　そうまでして生きる意味が、あると思うか？」

「わからない」

ただ、と羅刹は続ける。

「このまま終わるのは悔しいだろ。ここで黙って死んだら、俺が何の意味もない存在だってことを、自分で認めることになる」

あるかどうかわからない来世とやらに賭けてみるのも一つの選択肢かもしれないが、今までの自分から逃げ出すようにして生を諦めるのは、そこに執着するだけのものがないとわかっていても、容易には受け入れがたかった。

それは羅刹の中で、母や同級生達に対する敗北と同義であったからだ。

そんなことが認められるものか。

誰が認めなくても、自分だけは自己を尊重したいし、生にしがみつきたいのだ。たとえ蘇って、醜悪な怪物になり果て、晴久に殺される結末しか待っていなかったとしても、自ら終止符を打つほど潔くはなれない。

それが羅刹の、譲れない意地のようなものであった。

「わかった」

目の前の青年の姿が、ぐにやりと歪む いや、歪んだのは、羅刹の視界だった。懸命に目を見張っても、最早青年の顔はまともに視認できなかったが、その声は変わらず明瞭に、耳に届いた。

「お前が俺を受け入れるなら、俺はお前の力になろう 後悔するなよ」

「……しない。絶対に」

「どうだか」

せせら笑うような青年の声を最後に、羅刹には何も見えなくなつた。

唐突に、意識は再浮上した。ばちりと目を開くと同時に、堅いコンクリートの感触を全身に感じる。彼の体は死んだ時と同じ場所に、うつ伏せで倒れていたようだ。そっと腕を動かしてみる。違和感

ない。ゆつくりと地面に手をつき身を起こすと、白夜の体が飛び込んできたので、咄嗟に受け止める。ぐったりとした白夜は、重い瞼を持ちあげ、不思議そうに羅刹を見上げてきた。

「…羅刹：お主、なぜ…」

「なんでお前が生きてる！？」

白夜を遮るように、刹那が荒々しく言葉を被せる。

「殺したはずだろうが！普通の人間が生きてるわけ」

そこで、何かに思い当たったかのように口を嚙む。

「そう言えば、お前は普通の人間じゃなかったな。いいぜ、今度こそ止めを刺してやるよ」

刹那の姿が瞬時に掻き消える。が、今度は羅刹の目は、鬼が十メートルもの距離を一瞬にして詰め、目の前で腕を振り上げるその動きを、全て捉えていた。不思議な感覚だった。刹那の動作が人の限界を超えたスピードであることに変わりはないはずなのに、それに対する自分の感覚は一変していた。まるで別物だ。人間が殴りかかってくるのと変わらないように感じる。

目の前に突き出された拳を、一步横にずれることでかわす。刹那が動揺したように一瞬、躊躇した隙を逃さず、顔面を思い切り殴ると同時に、「力」で後方に弾き飛ばす。

「いてえ」

普段、人を殴ることなどないので、殴った拳が痛い。というか、本当に殴る必要などなかったのだが、そうしなければ気が済まなかったのだ。

刹那は数メートル押されるようにして後ずさるが、踏み止まった。羅刹の攻撃を予想していたのだろうか。脆弱な妖魔なら、あれで消滅することもあるのだが。つくづく、最初の邂逅では運が良かったのだと思い知る。

刹那がぎろりと羅刹を睨む。羅刹の本能が警鐘を鳴らした。

次の瞬間、二人の炎がぶつかり合っていた。武器のように一点でぶつかり合った炎は、相手を呑みこもうと燃え盛り、火の粉を撒き

散らすがその力は拮抗し、二人の中間で停滞する。

本当に使えたな。

一週間前のあの時は、一度きりの奇跡だった。あれ以降、炎の残滓すら自分の内には感じられなかったし、どうやってあれを使ったのかも思い出せなかったと言っのに、今はとても自然に扱えている。まるで生まれた時から自分の一部であったかのようなのだ。どうして忘れていたのだろう。外でぶつけ合う炎の熱さはまるで感じないのに、自分の内部で生き物のように脈動する炎のそれはこれ以上なく感じられる。気が狂いそうなほど熱いのに、同時にそれが快感でもある。中から焼き尽くされても構わないという気さえした。

半ば恍惚とする羅刹の左手を、白夜が掴んだ。途端に、何か別の新しい力が流れ込んでくる。羅刹の熱は冷まされ、それでいて力が増すのがわかった。思わず見下ろすと、「集中しろ」としっかりとした声が返ってくる。

「自分の炎に吞まれては恰好がつかないぞ。仕方がないからわらわが手伝ってやろう」

「お前……」

「それでも『白炎』だ。心配するな　まあ、お主を助けることが『白炎』として正しいのかは、わからぬが」

自嘲気味に言い、迷いを断ち切るようにきっぱりと「目を閉じろ」と宣告する。

「わらわの力を感じるであろう……流れに逆らうな。そして恐れるな。わらわを信じて、お主のやるべきことをするのだ」

ぎゅ、と白夜が羅刹の手を握る。繋いだ所から、脈々と力が供給されてくる。全知全能の存在になったような感覚だ。今だけなら何ものにも負けない気がする。勿論、目の前の相手にも。

激流の如く、炎が迸る。

刹那の炎を呑みこみ、その身に纏わりつき、食らいつく。視覚だけでなく、その凶暴性は余すところなく伝わった。自分でやっておきながら、その勢いの凄まじさに軽く身震いする。と、繋がれていた

手が離される。一拍置いて、腰に重みを感じたので見ると、白夜がしがみついていた。かなり疲労困憊といった様子で、全身で息をしている。

「大丈夫か？」

「これくらい…平気だ」

本人は強がっているつもりだろうが、そのままずるとしゃがみ込んでしまった。白夜は悔しそうに唇を噛み、羅刹を見上げる。

「今のわらわではこれが限界か……だが、まさかお主がわらわの…」
言いかけて、そのまま倒れこむ。気絶したようだ。ほぼ同時に、刹那に襲いかかっていた炎も、嘘のように霧散する。解放された刹那が反撃してくるかと思いきや、その心配は杞憂だった。刹那の方も、解放されるなり糸が切れた人形のように倒れてしまったからだ。

その場に立っているのは、羅刹だけだった。

辺りを見渡し、刹那がぴくりとも動く気配のないことを確認して、ようやくほっと息を吐く。

「勝ったのか…？」

「そのようだねえ」

聞き覚えのない女の声に、羅刹の全身が緊張する。周囲に視線を走らせるが、声の主と思われる女の姿はない。

「探しても無駄だよ。私はお前さんの近くにはいないからね」

「誰だ、お前は」

感覚を尖らせながら、羅刹は訊ねる。答えは存外、素直に返ってきた。

「名乗るほどのものじゃないが、私は常盤というものさ。なかなか楽しませて貰ったよ、鬼の隠し子」

「…お前が、俺を監視するように命令した奴か？」

「ご名答。悪く思わないでくれよ。こっちにもこっちの事情があるんでね」

「俺に接触してくるのも『事情』のせいかな？」

「おや、話がわかるじゃないか。そこで伸びてる単細胞とは違うよ
うだね。少し、二人で話がしたいんだよ。お前さんだって、私に聞
きたいことがいろいろあるだろう?」

「答えてくれるのか?」

警戒心も露わに問えば、軽やかな笑い声が、やはり姿のないまま
響く。

「でなければ、わざわざこうして私の存在を知らせたりしないよ。
まあ、信じないならそれでもいいけどね」

「……わかった」

「ふふ。交渉成立だね。じゃあ、お前さんの部屋で待っているよ」
「最初から拒否権ないんだろうが」

思わず苦い笑みが浮かぶ。考えてみれば、伊織が羅刹の部屋を知
っているのだから、その黒幕の常盤が知らない方がおかしい。

「それに意識不明者が二人もいるのに、どうやってそっちまで帰れ
って言うんだよ」

「妖魔には便利な技があるんだよ。今のお前さんなら、簡単に帰っ
てくれるさ。ま、その辺はその新米狐にでも聞くんだね。その
くらいの役には立つだろうさ。あまり私を待たせるんじゃないよ」

勝手なことばかり言って、声は聞こえなくなった。

羅刹は溜息を吐いて、妙に不安そうな顔をしている伊織を見やる。
完全に、おかしな道に踏み込んだな、と思いながら。

常盤曰く「新米狐」の伊織は、羅刹が近付くとあからさまに怯えたように後ずさった。白夜に対するのと同じような反応だ。一応、自分も妖魔のくせに、この小動物つばさは何なのだろう。他に羅刹の知る妖魔が揃いも揃って偉そうなものだから、逆に新鮮である。あまり近づきすぎると逃げ出しそうだったので、少し距離を置いて立ち止まる。

「今の話、聞いてたか？」

「ど、どの話ですか？」

「……お前さ」

「は、はい」

「それ、わざとか？」

「えー？」

「……いや、何でもない。お前の常盤様がお呼びなんだが、どうやって帰ればいいのか教えてくれないか？」

「どうやって……ですか？」

伊織は戸惑ったように眉を下げる。

「教えるようなことじゃないんですけど……妖魔だったら、生まれた時から空間の繋げ方くらい、言われるまでもなく知ってますよ」

「悪かったな、人間生まれで」

「い、あ、あのですねっ、今のは馬鹿にするつもりではなくて」

「だったら訊かれたことに答えてくれないか。せめてあれをどうにかしてもらわないと」

と、ぴくりとも動かない刹那を指す。

このままここに転がしておいたところで一片の良心も痛まないが、目を覚ましてまたリベンジに燃えられてはたまらない。胡散臭くとも、常盤とかいう女の所に連れて行って対策を聞く方がましに思え

た。

伊織は刹那を見て、嫌そうな顔をする。

「ぼ、僕が刹那様を運ぶんですか？僕ごときが気安く触ったなんて知れたら、後で殺されちゃいますよ」

「大袈裟な…」

「大袈裟じゃありませんよ！貴方は妖魔のことがわかってないから、そんなふうに言うんです！意思を無視するっていうのは、相手を格下に見ているっていうことなんですよ！？許可もなく別の場所に連れて行くなんて、立派な侮辱行為です！！」

涙目である。

触るだけで侮辱とは、一体どこの王族だと言いたところだが、ここでそんなことを言い合ったところで時間の無駄でしかない。かと言って羅刹が背負って連れて行く、というのも無理がある。そもそも、依然としてここがどこで、自宅からどの程度離れているのか不明なのだ。まあ、地名は通行人に聞くなりなんなりすればすぐにわかるが、身一つで飛ばされてきたので金がない。歩いて帰れる範囲ならいいが…。

そこまで考えて、急にうんざりした。

何故、今更こんなことで悩まなければならぬのか。

「あいつが何か言ったら、俺がどうにかする。それでいいだろ」

「え？で、でも…」

「それとも俺の言うことは聞けないか？」

「いえ！！め、滅相ありません！はい！」

わざと高圧的に言ってみると、面白いように肯定的な返事が飛んてくる。この変わり身の早さには感心するしかない。

何にしろ、問題が解決されれば羅刹に異論はない。常盤も伊織も羅刹が妖魔の能力を使いこなせるのは当然のような言い方をしていたが、そんなわけがない。刹那を倒せたのも半分以上は白夜の手助けがあつてのことだろうし、ましてや「空間の繋げ方」など知っている筈がないだろう。

伊織は、いかにも不承不承という風に刹那の傍にしゃがみ込み、口をへの字にしてこちらを仰ぎ見る。

「言っておきますけど、僕の力じゃ刹那様一人運ぶので精一杯ですからねっ」

「そこは心配しないでいい」

「え？そうなんですか？」

「俺は最後でいいから、三往復かけてゆっくりやってくれ」

「全然わかってないじゃないですか！もう！！しょうがないですね！白炎様を連れてこっちに来てください」

言われるままに、意識のない白夜を抱えて伊織に近づくと、彼は「本当はあんまりやりたくないんですけど」と呟きながら片手を振る。すると、何も無い空間の一部が目に見えて歪んだ。範囲はそれほど広くなく、一人分をカバーできる程度だ。

「今回だけ特別に僕の入口を貸してあげますから、ここを使ってください」

「使う……？」

「ほんつとに何も知らないんですね。いいですか、とにかくそこに飛び込めば、常盤様のいらっしゃる場所まで一瞬でいけますから」

「どこでもド……いや、何でもない。危険はないのか？」

「それ、普通の人間が言う科白ですよ。ここにはいませんけど」
「……」

「すみませんすみません！調子に乗りました！」

別に気を悪くしたわけではないのだが、まともに取り合うのも面倒だったので、無視して歪みの正面に立つ。ファンタジーここに極まれり、といった感じた。もっとも、この期に及んで常識を云々言っても仕方がない。

一呼吸置いて、足を踏み入れる。抵抗もなく、飲み込まれた足の下にはしっかりとした地面の感触がある。数秒、躊躇した後、もう片方の足も進めると、羅刹の姿はその場から完全に消えた。

「随分、遅かったじゃないか」

気がつくと羅刹は、自分の部屋に立っていた。目の前には馴染んだベッドがあり、そこに馴染みのない女が座っている。色白で髪の毛長い、年齢不詳の女だ。ぱっと見は若いが、どこか得体の知れない雰囲気纏っている。

「あんたが、常盤か？」

「いかにも」

女は優雅に小首を傾げる。羅刹は女をじっと凝視した。いつものように、本当の姿が見えない。壊れかけたテレビのように、数瞬、残像のようなものが浮かび上がる程度だ。

「いくら私がいい女だからって、そんなに見るんじゃないよ」

常盤が余裕に満ちた笑みを浮かべる。

「言っておくけど、私の正体を見破ってやろうなんて考えは捨てるんだね。隙だらけの脳筋坊やならともかく、私の術は二十年程度しか生きていない若造に看過されるほど脆くない」

「なるほど。つまり厚化粧ってことか？」

「綺麗な顔して、生意気な坊やだね。そんなんだから、あの単細胞に目をつけられるんだよ」

「理由がわかってるだけでした。俺はあんたの方が不気味だね」

刹那に狙われたことは迷惑甚だしかったが、少なくとも動機は明確だった。一方この常盤とかいう女は鬼でもなく、口ぶりからして刹那に協力しているわけでもないらしい。羅刹の方にはこの女に興味を示される心当たりは全くなく、ゆえに得体の知れない不安が感じられて仕方がなかった。

常盤は彼の緊張を嘲るかのように、ゆつくりと立ち上がる。

「危害を加える気なら、とっくにやっているよ。けどそんなことをしてどうなるっていうんだい？私はゼロか一かの結果には興味ない。私はね、ただお前さんに楽しませて欲しいだけだよ」

「楽しませる…?」

「そうさ。妖魔としても人間としても、イレギュラーな存在。そんな存在が現れたことによって、何が起るのか?考えただけでもぞくぞくするね。下手な見世物よりも面白いじゃないか」

「俺はあんたの暇潰しの道具か」

「まあ、そうだね。だけどお前さんだって私の情報が必要だろう? だったら私の思惑なんて関係ない筈だ。五里霧中から脱する代償としては、悪くないと思うけどね」

「……」

「とりあえず、隣で話さないかい? お前さんがそこにいたら伊織の邪魔だし、白炎は寝かせておいた方がいいだろうしね」

こちらの同意を待たず、お茶が飲みたいね、などと言いながら常盤は出て行った。

それを何となく見送ってから白夜をベッドに寝かせると、何かが落ちる物音がすると共に、いつの間にか背後に刹那が倒れていた。相変わらず意識はない。

「あー疲れた」

何も無いところから伊織が飛び出してくる。透明人間が突然、姿を現したようだ。

侮辱罪だ何だと騒いだ割に、無造作に刹那を床に転がした伊織は「刹那様はこのままにしておいていいですか?」と羅刹に訊ねる。

「……まあ、いいんじゃないの」

刹那ごときに気を回すのも面倒だったので、そう答え、常盤の待つ隣室に向かう。

常盤は羅刹の顔を見ると、すぐさま口を開いた。

「どういうことだい?」

「は?」

「どうしてこの家にはお茶が置いてないんだい」

「……ペットボトルならあるぞ」

「ペットボトル!」

常盤は、馬鹿か、と言いたげな顔をする。

「嫌だよ。趣がないじゃないか」

「じゃあ飲まなきゃいいだろ。あんた何しに来たんだよ」

「何だっただかねえ…歳を取ると忘れっぽくなっていけないね」

「おい」

「冗談だよ　それで？何が聞きたいんだい？」

「俺は、これからどうなる？」

「えらく漠然とした質問だね。お前さんがどうなるかなんて、知ったことじゃないよ。知っていたら、楽しくないだろう」

「俺が知りたいのは、これから何か厄介なことに巻き込まれる可能性があるかどうかでことだ」

「ふふ。既に十分厄介な立場にいると思うけどね。そもそも、お前さんは妖魔のことをどれだけ知っているんだい？」

そう、自分は妖魔のことをどれだけ知っているだろうか。

羅刹は自問する。

晴久は妖魔が全て害悪であると思っているようだが、彼は違う。

勿論、善だと思っているわけでもないが、妖魔に対する態度はそこそこ友好的であると言ってもいいだろう。白夜や常盤と話してもわかることだが、その内面が人間とそれほどかけ離れているようにも感じない。

知識として彼らが普段どんな生活を送っているのか、なぜ人間に干渉してくるのかは知らない。ただ、羅刹にとっては今までそれは重要なことではなかった。

「あんた達が、人間に近い精神を持っているってことはわかる。物の考え方も、理解できないほど飛躍してはいない。それでも、人間にはありえない力を使う。生身の個体として考えたら、妖魔は人間を超越しているだろうな」

「当然だね。もともと私たちは、こことは違う次元に生きる存在だ。人間の世界の法則には縛られない」

「…俺がわからないのは、それだけの能力を持っていて、どうして

人を支配しようとしなかったのか。妖魔が人を襲うことがあるのは知ってるが、それだって組織的な攻撃じゃない。あんた達の力があれば、簡単なことなのに」

「それで？」

常盤の目が、どこか面白そうに光る。

「あんた達には、そうできない理由がある。それが、法律みたいなルールのせいなのか、人間に関わってる場合じゃない事情があるせいなのか、それとも他の制約があるからなのかは知らないけどな」

「へえ、驚いた。意外に考えているんだね」

「……馬鹿にしてるのか？」

常盤は一瞬、虚を突かれたように目を見開き、何が可笑しいのかけけらと笑った。

「いいや。本音さ。私がまだ未熟だった頃、正体がばれることもあったんだが、人間の反応は問答無用で攻撃してくるか、脱兎のごとく逃げ出すかのどちらかだったからね。話を通じるってのはいいものだ」

「そりやどうも」

「礼には及ばないよ。坊やの言うとおり、私たちにはこちら側に大きく干渉できない理由がある」

「どうして、と訊いてもいいのか？」

「そりやあ、いろいろさ。自分達より劣っていると分かり切っている種族相手に本気になるのも馬鹿馬鹿しい、っていうプライドもあるし……それにあの単細胞を見てもわかると思うけど、妖魔は血の気が多くてね。私のように長く生きて血を見すぎた者はともかくとしても、基本的に身内同士で争うのが好きな生き物なんだよ。だから人間にまで手が回らないってのもある。けど最も大きな理由は」

そこで彼女は言葉を切る。

「……まあ、その話は後にしよう。最初の質問に答えると、お前さんがどうなるかはお前さんがどうしたいかによるね。炎鬼の後継者争いに加わりたいたならそうすればいい。宗主の息子を倒して、白炎

の力を引き出したお前さんには、その資格があるよ」

「ずっと気になってただけだな、『白炎』って何なんだ？」

羅刹以外の妖魔たちは全員、白夜のことを『白炎』と呼んでいたし、彼女も自然に答えていた。単なる通称ではなく、意味のある名前に感じられた。それはあの不思議な感覚　まるで力を分け与えられたように、刹那を圧倒したあの感覚と無関係ではないのだろう。そう言くと、常盤は「正解」と微笑んだ。

「『白炎』って言うのは、個人の名前じゃない。称号みたいなものさ。髪の毛と、操る炎が白いことからそう呼ばれてるんだがね、面白いに代々一人しか生まれなんだよ」

わらわに親はいない、と言った白夜の顔が、何故か思い出される。常盤は構わず喋り続けている。

「白炎が生まれる血統は決まっていない。前任者にお迎えが来そうになると、突然生まれるんだ。生まれると、宗主の手元で大切に育てられる。何故そんなに手厚く扱われるかと言うと、白炎には力があるからさ。特別な力がね。それが何か、もうわかってるだろう？」

羅刹は頷く。白夜が触れただけで、自分の力が何倍にも膨れ上がった感覚はまだ覚えている。つまりそれが「白炎」の能力なのだろう。

納得すると同時に、思い出したことがあった。

「だけど刹那は、白夜の力を引き出せてないみたいだったぞ。確かに力を引き出せないのがそんなに不満か」とか何とか……」

「そのようだねえ、いや、私も初めて知ったよ。それであの坊や、誰かれ構わず噛みついていたんだねえ」

「あれが標準じゃないのか」

「ふふ、どうだろうね。それよりもお前さん、涼しい顔してるけど、自分の身の振り方には気をつけないと、これから大変なことになるよ」

「わかってる。俺が宗主候補を倒したってことは、炎鬼が一族総出

で報復に来るかもしれないってことだろ」

「わかってないね」

やれやれ、と言いたげに常盤が溜息をつく。

「ことはそう単純じゃないんだよ。いいかい、お前さんが片づけたあの坊やは、宗主候補筆頭ではあったが、絶対に宗主になると決まっていたわけじゃない。多分、白炎との相性が悪いことがネックになっていたんだろうね。他にも候補は何人かいたわけだよ。まあ、坊やはあんな性格だし、白炎のことを抜きにすれば戦闘能力は高いからね、自分に反対する連中を押さえつけてこれたんだろうけど、ぽつと出のお前さんなんかにはやられてしまった。それを他の鬼どもが知ったら、何を考えると思う？」

「俺を殺して、自分が宗主に名乗りを上げよう、とか」

「それもあるけど、もつと面倒なことにもなり得るよ。つまり、宗主候補筆頭を倒したお前さんこそが次の宗主に相応しい、と考える奴が出てくるかもしれない。言っておくけど、丁重にお断りして引き下がるような大人の対応は期待しない方がいい。お前さんの意思なんてどうでもいいのさ。うんと言わせるためなら、お前さんの家族や周りの人間を人質にとって脅す、くらいのことは平気でやるからね」

「そんな、何もわかっていない役立たずの俺に、そこまでする価値があるのか？」

「お馬鹿。何もわかってないからこそじゃないか。お前さんを宗主にして、自分が裏で実権を握ろうって魂胆だよ。何も力でぶつかるだけが能じゃないからね」

「……どうすればいい？」

「さあね。これはお前さんの問題で、私には関係ないよ。幸いにして、白炎はお前さんに好意的なようだし、あの坊やさえ説得すれば誤魔化せるかもしれないね」

と言いつつ、本心ではそれを望んでいないような言い方だった。羅刹にしても、あの刹那がこちらに都合のいいように動いてくれる

とは思えなかったし、まずともに話し合いができるかどうかも怪しい。

常盤は緩慢な動きで、髪をかき上げる。

「ま、脅しておいてなんだけど、今すぐどうこうってことはないよ。その後はわからないけどね。せいぜい無駄死にしないように、頑張るな。それよりも」

と言つて、何かを含むようににやりと笑う。

「もっと面白い話をしよう。お前さんの、本当の親についてね」

「俺の親？なんであんたが知ってるんだ」

「知っているというより、ただの仮説だよ　そんなに怖い顔をするもんじゃない。一応、根拠はあるんだから。お前さんだって興味あるだろう？」

忌々しいことに、否定できなかった。肉親という言葉には、羅刹に一口で言い難い感情をもたらす力がある。

常盤はそんな感情も見透かしたかのように、返事も待たずに言葉を続ける。

「これが実に面白い話だね。思いついた時には年甲斐もなく心が浮き立ったよ。これをお前さんに教えた時の反応が楽しみで楽しみで」「どうでもいいけど、その顔かなり不気味だぞ」

「そんなことを言っていていられるのも今のうちだよ。時にお前さん、妖魔はどうやって子を成すか知っているかい？」

「どうって……普通の生き物と、何か違うのか？」

「生殖行為そのものは、人間と違わないはずだよ。ただ妖魔の特殊なところはね、男には子供を成せる時期が生涯に一度しかなくて、しかもその期間が極端に短いってことだ」

そうか、と相槌を打とうとして、意識の片隅に何かが引っかかる。が、それを捕まえる前に常盤の話は先に進んでいく。本当によく喋る女だ。

「これがなかなか深刻な問題でねえ。基本的に同種同士でしか子供はできないのに、男はただでさえ血の気が多くて、子供を作る前にすぐに死んでしまうし……女は女で、なかなか妊娠しないもんだから、妊娠中の女は攻撃しないっていう暗黙の了解もあるよ」

それは暗黙の了解とか言う以前に当然のことではないかと思ったが、妖魔の常識のことはわからないので、別のことについて口を開く。

「それが、あんた達がこつち側に長くいられない理由ってわけか」
「なかなか理解が早いね。そういうことさ。たまに来て気分転換でもする分にはいいけど、全面戦争したり社会丸ごと乗っ取るには、戦力が足りないんだよ私たちは。妖魔一丸となつてことにあたるならともかく、さつきも言った通り内輪揉めの好きな連中だからね。空中分解して足の引つ張り合いでも始めるのがおちだよ」

ああくだらない、と溜息をつく。

「最近、思うよ。私たちは強い。自惚れを抜きにしてもね。普通の人間相手なら、まず一対一で負けることはない。だけどその能力に頼りすぎているんじゃないかってね。絶大な力は持っているが、それ以外に何も無い。進歩がないんだよ。そして多くの連中はそのことに気づいてすらいないし、たとえ気づいたとしても、なんとも思わないだろうね」

「確かに、あんた達に科学や兵器は必要ないだろうな」

具体的に何ができて何ができないのか、はつきりとわかっているわけではないが、人間ほど科学の発展に力を注ぐ必要はないだろう。少なくとも車などの移動手段は不要だし、人知を超えた力を生まれながらに持つていれば、改めて武器を作り出すという発想もなかなか出てこないのかもしれない。

常盤は苦笑する。

「必要ない、というよりもそれを創造して、発展させていく能力がないんだよ。根本的に、向いていないと言っべきかねえ。例えば子供がでにくい原因を調査して、それを解消させるために人間から優秀な医学者あたりを攫ってきたとする。だけどどんな天才であっても、すぐさま答えを出すことなんてできないだろう？実験を繰り返して、データを取って、それでやっと何かを証明できる。なのにそこまでの過程が、大部分の妖魔にとっちゃ恐ろしく馬鹿馬鹿しくて無意味なものなんだよ。一言で言うなら、即物的、だね。劣等種に自分達の弱味を握られることにも我慢ならない。一回、実験して解決策が出なければ、殺してしまえ、となる」

どこか諦めの滲んだ口調だった。

「そういう意味では、お前さんに少し期待しているんだよ。毛色の変わった者が宗主になれば、何かが変わるんじゃないかってね」

「期待に応えられなくて悪いけど、そこまでチャレンジ精神旺盛じゃない」

「ふふ。そう言うと思ったよ。そこも含めて、今後が楽しみだ話が逸れたね。それで、お前さんの親のことだけど」

「羅刹に余計なことを言うな、女狐」

割り込んできた声に振り返ると、ベッドで寝ていたはずの白夜がいつの間にか起き上がっていた。まだふらつきながらも、その視線は険しい。

「どういうつもりだ、女狐。何故お主が、ここにいる」

「おやおや、私がここに居ちゃいけないって言うのかい？私がここに居ようと、私の自由だろ？大体、お前さんまだ寝ていた方がいいんじゃないのかい？」

「うるさい、わらわの質問に答えろ。何を企んで、子狐に羅刹を見張らせた？どうせいつものくだらない余興であろう。お主の道楽に羅刹を巻き込むな」

「困ったお嬢ちゃんだねえ。私はただ、老婆心から坊やと話をしていただけだよ。お前さんだって、この坊やが宗主になってくれた方が嬉しいんじゃないのかい？」

「それは…」

一瞬、怯んだように言葉に詰まるが、すぐさま自分を鼓舞するように常盤を睨む。

「確かに……羅刹がわらわを受け入れてくれるなら、刹那と戦って自由を勝ち取ってやろうと、思うこともあった。だが結局、現実味がないからこそ、思っていたことだったのだ。惚れた男を、みすみす危険な道に引っぱり込みたい女はいないと思うがな」

「それは、私に対するあてつけのつもりかい？」

常盤の声が一段、低くなる。表面的に変化はないものの、目が笑

っていいない。正直、何が逆鱗に触れたのか羅刹にはわからなかったが、先程の刹那と白夜の会話中に感じたのと同じような、嫌な予感に襲われて、咄嗟に声を上げる。

「お前ら、当事者を無視して会話するなよ」

「……そうだね。坊やに決めてもらおうじゃないか。私の話を聞か、聞かないか」

「聞くも聞かないも、聞きたくない話に今まで付き合うほど物好きじゃない」

「ほら、坊やだってこう言っているじゃないか、白炎」

「考え直すのだ、羅刹！親のことなど知って何になる？余計な悩みを増やすだけだぞ！」

「ちよつと待て。その言い方、お前も俺の親を知ってるのか？」

「そ、それは」

「白炎も私と同じ仮説を立てたってことだろう。だけど私はそれを教えたいし、白炎は教えたくない。実に面白いね」

「黙れ、女狐。悪ふざけも大概にしろ」

嫌いだ、と言っていたとおり、白夜の態度に友好的なところは微塵もない。

また険悪な雰囲気になる前にと、羅刹は急いで言葉を継ぐ。

「もういいだろ、白夜。お前が俺の為に言ってくれてるのはわかるけど、俺は知りたいんだよ」

「だが」

「自分のことくらい、自分で決めさせてくれ」

「……」

白夜がもどかしげな顔で沈黙し、常盤はそれに勝ち誇ったような視線を向ける。

「私から言うかい？それともお前さんから？」

「……お主が言うがいい。何と言っても、その仮説を立てるための前提を調査したのはお主だからな」

「それじゃ遠慮なく。お前さん、さっきの私の話を覚えているかい

？」

と言つて、羅刹の方に向き直る。

「さつき？」

「何だい、もう忘れたのかい？ 妖魔はごく限定された期間でしか、子供を作れないっていう話だよ」

「ああ……」

「鬼の寿命は大体二百年、そのうち繁殖期は十年程度だ。つまりだね、お前さんの生まれた時期、約二十年前に繁殖期が重なっていた鬼がわかれば、自動的にお前さんの親も割り出せるって寸法さ」

「って言つても、そんな都合よく絞り込めないだろ。それだけの条件なら候補は何人もいるだろうし、第一、俺の体に流れてる鬼の血は、親からじゃなくてもつと前に混ざつたものかもしれない」

自分の家庭環境がああなので、つい本当の親が別にいるという考えに流れてしまいそうになるが、両親は人間で、祖父母やもつと以前の祖先が鬼であるという可能性もある。

だが常盤はあっさりとそれを否定した。

「それはないよ」

「……なんで」

「私の知る限り、人と鬼が交わつた場合、その子供が鬼の力を発揮できる確率はとても低い。全員を把握しているわけじゃないから何とも言えないが、大体一パーセントってところかねえ。それを更に遡つて血を混ぜたとしても、お前さんのように宗主候補と張り合えるような子供なんてできないよ。少なくとも私は、見たことも聞いたこともないね」

「お主が知らないだけ、ということもあるだろう」

皮肉っぽく白夜が言うが、常盤は取り合わない。

「そうかもね。ま、それはそれとしても、もう一つ理由はある

坊や、伊織を『支配』しただろう？」

「支配？」

「人間には違和感ある言葉かもね。私たちはそう呼んでいるんだけ

ど、炎鬼にだけある力の一つだよ。明確な意思を持って言葉を発すれば、相手を意のままに動かすことができる」

「俺はそんなことした覚えはないけど」

「はあ……『待て』と言っただろう？伊織は止まっただろう？あれは何も、お前さんの剣幕に驚いて止まったわけじゃないよ。伊織は普段から自分より強い奴に凄まじれることには慣れてるからね。お前さんが心底から命令して、伊織はその力に屈した。それが支配だよ」

「もう何でもありだな。じゃあ俺が望めば、世界征服も夢じゃないのか」

それは冗談にしても、刹那と戦う必要はなかったかもしれない。命令すればそのとおりにする、と言うなら、一言「二度と近づくな」と命令すればすむことではないか。

常盤は「残念」と嘲笑する。

「夢を壊して悪いけど、支配できるのは伊織みたいな雑魚か、抵抗力のない人間だけだよ。もともと、支配力の強さにも個人差があるから、坊やがどの程度かは知らないけどね。とにかく私が言いたいのはだね、お前さんの持つてる能力が殆ど純粋な鬼そのものだったことさ。半分でも人間の血が混じっていて、それ程の力を発揮できるなんて奇跡だよ。まあ、お前さんと刹那が兄弟だと考えれば、納得なんだけどね」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「……何だつて？」

「だから、兄弟だよ。お前さんと、あつちで伸びてる坊やがね」

羅刹の反応を楽しむように、ゆっくりと常盤が言う。

「今までの条件に全て当て嵌まるのは、脳筋坊やの父親と、もう一人しかない。その一人は一族を捨てて人間と暮らしている変わり者だけど、妻も子供も大切にしているようだから、お前さんの親である可能性は低いと思うね」

「この女の言うことを真に受けるな、羅刹。お主を動揺させたくて言っているだけだ」

「詭弁だね。お前さんだって、炎鬼の数の少なさは知っているはずだ、白炎。私が把握していない候補がいると言うなら、教えてやるがいいさ」

「……」

「それは、確実な話なのか」

情性のようにこぼれた言葉は、思ったよりも冷静だった。常盤はそれがつまらなかったのか、僅かに苦笑する。

「言っただろう。ただの仮説だって。私は間違いないと思っているけど、百パーセント間違いない証拠はないよ。お前さんが信じたいなら信じればいいし、あり得ないと思うなら私の話は嘘八百でしかない」

羅刹は沈黙する。意外ではあったし、驚かなかったわけではないが、取り乱すほどの衝撃はなかった。妖魔が子供を作る期間が限定されている、と聞いた時の違和感は、自分と同じような外見年齢の刹那のことが引っかけたからかもしれない。

それよりも、本当の親がわかってもらえて心動かない、自分の反応の方が驚きだった。

知りたいと思っていたし、この年になればほぼ独立している筈の「親」という存在に、内心で拘っていたのも確かなのに、いざ答えが提示されてみると「会ってみたい」とも「恨み事を言っただけでいい」とも思わない。

見たこともない存在にそんなことを思うのも不自然なのかもしれないが、今、感じるのにはほんやりとした空しさだけだった。

結局のところ、誰が親であろうと自分を必要とすることはないのだと、突きつけられたような気がした。知らない方が夢を見ていられただけ幸せだったかもしれない、と他人事のように思う。

そんな羅刹を尻目に、「私たちはそろそろ帰るとしようじゃないか、白炎」と常盤が呑気な声を上げる。白夜はあからさまに嫌そうな顔をした。

「帰りたくば、お主が一人で帰るがよい」

「お子様みたいなことを言うんじゃないよ。白炎ともあろうものがあまり長く留守にしちゃ、騒ぎになるだろう？それがわからないほど馬鹿じゃないと思うけどね」

「貴様、偉そうにつ…」

「俺も、そうした方がいいと思う」

羅刹が同意すると思わなかったのか、白夜が「何故だ！？」と悲壮な顔で詰め寄ってくる。

「わらわが邪魔なのか？」

「そういう問題じゃない。お前、顔色悪いんだよ。ここで倒れても俺は何もしてやれないから、帰って休んだ方がいい」

「……だが……だがお主は大丈夫なのか？」

その「大丈夫か」が何にかかっているのかは判然としないが、本気で心配そうな目で見上げてくる少女に、つい苦笑が漏れる。

「お前って、本当に俺のこと好きだよな」

「つ…からかっているのか！？」

「いや、真面目にさ。お前、わざと刹那のこと怒らせて自分に攻撃させただろ？恨まれてるのは俺なのに、悪かったな。怪我させて」

「そ、そのようなことをした覚えはない！わらわはあの男が嫌いだったただけだ！」

噛みながら言われても説得力がない。本人もそれに気づいたのか、何とも言い難い表情で何度か口を開閉し、

「とにかく！わらわはお主を死なせてしまったのだから、お主に謝られる資格などない　お主が何者だろうと、生きていてくれて良かった」

と呟いた。

その言葉に、咄嗟に返事ができなかった。それが本心から言っているとわかったからこそ、何も言えなかったのだ。

そしてタイミング良く、常盤が「はいはい」と手を叩く。

「盛り上がってるところ悪いけど、もう行くよ。坊やは兄弟水入らずでゆっくりおし」

「は!？」

思わず声が裏返る。

「あいつも連れて帰るんじゃないのか？」

「誰がだい？私が？それとも白炎かい？どっちにしても、あの状態の坊やを何て説明しろって言うんだよ。白炎に比べれば、坊やは自由だからね。暫くここに置いておいても、大丈夫だよ」

「俺が大丈夫じゃない」

「お前さんのことなんて知ったことじゃないよ。この程度のことに対処できないようじゃ、先が思いやられるね。精々頑張りな」

「やはりわらわも」

残る、と言い終わる前に、常盤が白夜の腕をしっかりと掴む。

「逃がさないよ、お嬢ちゃん」

「は、離せ！」

「それじゃあ坊や、また会おう」

引き止める間もなく、二人の姿は蜃気楼のように掻き消えた。残された羅刹は、暫く立ち尽くしていたが、溜息を吐き、刹那の倒れている部屋に向かう。

刹那はまだ意識のないまま、床に倒れていた。いつの間になくなったのか、伊織の姿もない。

更に深い溜息を吐き、ベッドに勢いよく腰を下ろす。

こいつが目を覚ましたら何と言おうか。

実は俺とお前は兄弟かもしれない……？馬鹿馬鹿しい。怒り狂って襲ってくるのが関の山だ。いや、言わなくてもそうなるのだから、同じことか。血が繋がっていろいろが、刹那が自分を殺したことも、自分が刹那のプライドを著しく傷つけたことも、なかったことにはならない。もつとも、死んだ時に苦痛を感じなかったせいか、何事もなく復活したせいか、刹那を恨む気持ちは無いのだが。

死んだと言えば、あの深層意識で「もう一人の自分」が言っていたことも気にかかる。

混ざり始めている、とはどういう意味なのだろうか。常盤の言っ

ていた「支配」する力が使えるようになったことを言うのだろうか。こうして蘇った今も、以前と何かが変わったような気はしない。内面は相変わらずだし、肉体的にも変化は無い。無いように、感じる。

そう言えば、顔だけはまだ確認していなかった。

刹那が目を覚ます前に見てこよう、と立ち上がった瞬間、頭に激痛が走った。

一週間前と同じ、凄まじい痛みだ。崩れ落ちるようにベッドに倒れこみ、ただ呻きながら頭を抱えることしかできない。

痛みが長く続かないことも、前回と同じだった。意識が遠のくことに、羅刹は安堵さえ感じていた。

意識を取り戻した時には、部屋は真っ暗になっていた。時計を見る。八時半だった。四時間も意識を失っていたことになる。しかも、少なく見積もっても、だ。

あの頭痛は、一体何を意味しているのだろうか。これが習慣になることを考えるとあまり楽しくないな、と考えながら何気なく横を見て、思わずびくりと肩を震わせる。

刹那が、こちらを見ていた。

壁にもたれかかり、片膝を立てて、物も言わずにじっと羅刹を眺めている。

いきなり襲われるに違いないと予想していたので、思いのほか大人しい相手に虚を突かれ、何となく男同士で見つめ合うという非生産的な時間が流れる。

沈黙を破ったのは、刹那の方だった。

「お前に頼みがある」

気味が悪いほど静かな口調で、もう一度、頼みがある、と繰り返す。

「頼みがある

俺を殺してくれ」

時間は少し遡る。

羅刹が深層意識でもう一人の自分と楽しくもない会話を繰り広げていた頃、晴久は勇太郎と共に市内の公園にいた。死体が発見された現場だ。一週間前に凄惨な死体が見つかった場所とは思えないほど、何もかもが元通りになっていた。流石に人の姿はないが、風景だけを見ればこの公園が猟奇殺人の現場だとはとても信じられない。……ここだね」

勇太郎は、少女の死体が見つかった茂みの裏で足を止めた。

「大丈夫ですか、勇さん」

「まだ何もしていないよ。心配性だね、晴久君は」

振り返り、苦笑する勇太郎の様子に気負いは見えない。もっとも、それはいつものことだ。勇太郎という人間は、およそ取り乱したり我を忘れて感情をさらけ出すということがない。人間である以上、怒りや悲しみという負の感情もあるはずだが、それを表に出すことは滅多にない。素晴らしい自制心のなせるわざだろう。

おそらくその自制心の大部分は、彼の持つ能力によって培われたものだ。

退魔士の持つ力は個人によって様々であり、共通点はその力によって人間に直接影響を及ぼすことができない、という点であるが、勇太郎のそれは「妖魔の痕跡を追う」という一点に特化していた。彼曰く、妖魔の触れた場所に触れることで、妖魔の見たものが同様に見える、らしい。ここで言う「見える」というのは肉眼での意味ではなく、感覚的なものであり、瞬間的に映像が脳裏に浮かぶのみならず、五感や思考さえ共有できるというから驚きだ。

叔父が言つとおり、見ることに關して勇太郎の右に出る者は、本家を含めてもほとんどいないだろう。

だが、見えるということは、見たくないものまで鮮明に感じてし

まうということだ。

だからこそ晴久は、彼を尊敬していた。勇太郎は自分など及びもつかないほど、精神的に強い。

「お願いします、勇さん」

「ああ」

勇太郎は、その場に四つん這いになるようにして、地面に手をつき、じっと目を瞑る。

ぴくりとも動かない彼の集中を乱さないように、晴久も息を潜める。

緊張した時間が流れた。実際は二、三分程度だっただろうが、勇太郎のしているもののことを思うと、晴久はいたたまれない気持ちになる。

不意にがくと勇太郎の肩が崩れ落ち、地面に縋りつくようにうずくまった。

すぐさま駆け寄り、背中に触れた晴久は驚いた。勇太郎はがたがたと震えていたのだ。

「勇さん」

「大丈夫だよ……ごめん。結局、心配させてしまったね」

ゆつくりと顔を上げた勇太郎は普段通りに微笑もうとしたようだったが、額には汗が滲んでいる。

「……何を見たんですか？」

「悪意と、快感さ」

妖魔の気配は、未だに色濃く残っていた。勇太郎が見たのは、殺戮者が少女を切り刻む一部始終であり、その頭に渦巻く純粋な悪意であった。

喉に流れ込む、咽かえりそうな程の血の味。臓器を喰いちぎった感触。痛みにもがく被害者の表情。全てを彼はダイレクトに体感した。目の前で成す術もなく肉塊に変えられていく少女を、ただ眺めていることを強いられた。

そして濁流のように荒れ狂う、思考だ。

狂気と、それを飼い慣らす透徹した意思の併存。自分がしていることに一片の罪悪感すら覚えない純粋な悪意。傲慢。子供のような無邪気な悪戯心。実験。一途な使命感。暗い喜び。その手で奪った命に対する無関心。

その余りにも多くの感情の中には、一際重要な位置を占めているらしい「目的」に対する、常軌を逸した熱情もあった。

だが他の無数の思考に覆い隠され、「目的」が何かを掴むことは出来なかった。

「すまない。僕の力がもう少し強ければ」

晴久は首を横に振る。勇太郎は十二分に優秀な退魔士だし、これが限界以上の気力をもって得た情報であることは聞かずともわかる。たった二、三分で随分と消耗しているのも、それだけ精神的負担が大きかったということだろう。

「……正直、樂觀してました」

勇太郎を公園のベンチに座らせ、自分もその隣に腰を下ろしてから、晴久はぼつりと呟く。

「こんな誰が見ても異常な現場を残すつてことは、それほど知能の高い相手だと思ってました。勇さんの力でさっさと追い詰めて報いを受けさせてやれるだろうつて……だからって最初の被害者は戻っては来ないんですけどね」

知能が高ければ高いほど、痕跡は追いつらい。読み取るべき思考や感情が複雑で、必要な情報の取捨選択に手間取るといったこともあるし、それ以前に相手が隠蔽工作に長けていれば、事件そのものが発覚しない場合すらある。

そういう意味で、今回のケースは特殊と言っていいたろう。

相手は明確な目的を持って動いている。しかも勇太郎を以ってしても全てを把握できない、複雑な自我の持ち主だ。でありながら、まるで自らの存在を誇示するかのように派手な現場を演出した。注目してくれと言わんばかりに。

ふざけるな、と晴久の中に苛立ちが生まれる。

目的が何であれ、あの少女はこんな風に殺されなければならないことは何もしていない筈だ。そしてあの少女の苦痛も失われた未来も、どんなことをしても贖うことはできない。例えば妖魔を同じ目に遭わせてやったとしても、それが何の慰めになる？

そう思うと、たまらないのだ。自分がしていることに何の意味もないのではないかと思えて、自分が「あの時」と同じに無力であることが感じられて、たまらなく空しくなる。

俯く晴久の肩に、勇太郎が軽く触れる。

「大丈夫かい？……こんな状況じゃ無理かもしれないけど、あまり思い詰めない方がいい」

「……こんな時まで、俺の心配をしなくてもいいですよ」

勇太郎を心配していた筈なのに、いつの間にか立場が逆転している。自分はやはり未熟だ。いちいち感情を波立たせていては、叔父に一人前と認めてもらうことなど夢のまた夢であろう。皮肉にも彼が叔父に師事して最初に叩き込まれたのは、感情をコントロールすることの大切さだった。晴久の「力」が攻撃に特化したものだったせいもあるだろう。叔父は、彼が力に溺れることを危惧していた。

「もし何らかの目的があつてこの現場を残したんだとしたら、それはどうしてだと思えますか？」

雑念を振り切るように問えば、勇太郎は考え込むように視線を落とす。

「単純に考えれば、自分の存在を僕達に知らせたかった……宣戦布告とも取れるけど、本当の目的は別にあるのかもしれない」

「というと？」

「つまり、この事件自体には何の意味もなく、他の何かの目くらましに利用しているだけかもしれないってことさ」

晴久は顔を顰める。あまり考えたくないことだが、確かに被害にあった少女にはこんな事件に巻き込まれる理由が見当たらない。

本当にどこにでもいるような、何の変哲もない女子高生なのだ。妖魔が敢えて狙うような、特別な何かがあつたとは思えない。彼女

にも、彼女の身近な人物にも「力」がないことは、調べがついている。御門家は同類の管理についてはかなり徹底しているから、これは確かなことだ。

そこまで考えて、不意に晴久は友人でもあり、同じ力を持つ同士でもある羅刹のことを思い出した。

一週間前に彼が見かけた鬼が、今回の件の犯人である可能性は、それなりにある筈だった。

だとしたら、もう一度羅刹に話を聞いてみるべきだろう。流石に目的までは知らないだろうが、何か手掛かりになることを覚えているかもしれない。

すぐさま携帯からメールを送ると、勇太郎が不思議そうな顔をする。

「誰に送ったんだい？」

「……俺の協力者です」

「協力者？」

「すみません、勇さん。このことは秘密にしてもらえませんか。迷惑はかけませんから」

「別に僕に言う必要はないけど、一臣さんにも秘密なのかい？」

そう言われると若干、後ろめたさを感じるが、本人の同意もなく個人情報ばらすのは気が咎めるのだ。

勇太郎は「仕方ないな」と苦笑する。

「君は頑固だからね 信用できる相手なんだろう？」

「はい」

「なら、君の判断に任せるよ」

「ありがとうございます」

勇太郎の寛大さに感謝しつつ、それとは別に晴久の心には何かが引っかかっていた。

何か重大なことを見逃しているような 何の根拠もないが、そんな気がしたのだ。

一方、晴久の叔父、一臣は屋敷の私室に居た。

他に人の姿はなく、携帯を通して聞こえる相手の声以外には何の物音もしない。もともと、一臣がわざわざ人のいない時を選んで電話しているのだから、当然であるが。

「では君もそう思っただね」

確認するように訊ねれば、『早合点されても困る』と低い声が返ってくる。

『私はただ、可能性の話をしているだけだ』

「君の言う可能性と、それが杞憂である可能性とどちらが優先されるべきだと思う？」

『何が言いたいのかわからない』

「杞憂ならいいが、それが本当に起こる可能性があるならば放置することはできない」

『私に何をしろと言っただ』

一臣はその言葉に、ふと肩の力を抜いた。

「協力してくれるのか」

『白々しいことを。何度、言質を取れば気がすむ？私は受けた恩を忘れるほど、恥知らずではない』

「君の誇りを傷つける気はない。だが」

言い募ろうとした直後、人の気配を感じて一臣は言葉を飲み込んだ。ほぼ同時に部屋の襖が開いて、予期せぬ人物がずかずかと入ってきた。

それは外見から言えばこの屋敷にも、一臣の部屋にもそぐわない青年だった。

派手な金髪に、耳ではなく鼻についたピアス。腰についたチェーンは一臣にしてみれば邪魔にしか思えない。

青年は呆気にとられた一臣を見下ろし、気だるげに言った。

「電話長いから、待ちくたびれた」

そこでようやく一臣は電話中であることを思い出し、「また連絡する」と口早に告げて、通話を終えた。そして青年に向き直る。

「いつから居た？」

「えーっと、多分最初から？」

一臣は頭を抱えなくなつた。気づかなかった自分も自分だが、黙っているこいつもこいつだ。

「話は聞こえたか？」

「聞こえたけど、忘れろつて言うなら忘れる。興味ないし」

本当に興味の無さそうな顔で言われて、気が抜ける。全くこいつの考えていることは理解できない。本当に自分の息子なのだろうか、たまに疑いたくなる。

だが、正真正銘この青年 如月圭一は、一臣の実の息子だった。十年前に一臣が妻と離婚した時、圭一は母親を選んだため名字は違うものの、御門家の「力」も受け継いでいる。もともと、もう一人の息子と違い、圭一は父親の特殊な職業に何ら関心はなく、訪ねてくるのも金の無心をする時だけと相場が決まっていた。

「……今度は何で金が必要なんだ」

先手を取って訊いてやるが、圭一は悪びれる素振りすら見せない。

「あー留年しちゃつて」

「またか。何回目だ」

「えー……何回目だっけ？」

「……」

驚くべきことに、しらを切っているのではなく、本当に忘れているのだ。圭一は面倒くさそうに指を折って数えていたが、それでも答えが出なかったらしく、「ま、そんなのどうでもいいじゃん」と言い放った。

「可愛い息子のこと助けてよ、パパ」

「ただでは無理だな。お前も御門家に生まれたのなら、たまには働け」

「げ、やっぱりそうくる？ 兄貴は？」

「雅臣なら今はM県にいる。しばらくは戻ってこないぞ」

「マジで？」

「その女子高生のような言葉遣いはやめろ。大体、お前はいい歳をしていつまでも」

「あ、彼女待たせてるから、俺そろそろ行くわ。いい仕事あったら、メールして。楽なやつね」

そそくさと逃げ出す圭一に、大きな溜息が漏れる。

「その程度の話だったら、最初からメールでも構わんだろう」

「だって彼女が、俺の育った街見てみたいって言っから。旅行のついでに親父に顔見せようと思ってさ。それに」

「それに？」

「兄貴が居たら、彼女と3Pしてみないか誘おうと思って」

言葉に詰まる父親の顔を見て、圭一は大笑いした。

「冗談だって。じゃあ、兄貴たちによろしく」

圭一が屋敷の外に出ると、恋人の花江が待っていた。

その白い頬を膨らませて「ケイ、遅い！」と飛びついてくる。

「待ちくたびれたわ！」

「えー十分くらいじゃん。お前、短気すぎー」

「私待つの嫌いな。女を待たせるなんて男の風上にも置けないわよ」

「いーよ俺、風下で」

「あのね…」

呆れ顔の花江は、圭一より四つ年下の二十歳である。万事においてふらふらした圭一とは違い、ファイナンシャルプランナーを目指して努力を惜しまないしっかり者だ。ロシア人の母を持つ彼女は、その血を受け継いでか彫りの深い、派手な顔立ちの美人だった。周囲では、なぜ圭一と付き合っているのかと疑問の声が絶えない。

「私もケイのお父さんにご挨拶したかったのに」

「何で？」

「だってケイはこんなゆるゆるで、大学もいつ卒業できるかわからないでしょ？絶対、心配してると思うのよね。変な道に踏み込まないように私が見張ってますって、言っておきたいじゃない」

「どんだけ信用ないのさ、俺」

へらつとする圭一に花江はいらつとするが、惚れた弱味と言うべきか、そんなところにも愛情を感じてしまふから不思議なものである。

圭一は圭一で、花江を父親に会わせたくない理由があった。実は別れる機会を窺っている、というわけではない。問題は彼の家業だった。

退魔士、という胡散臭い職業の存在を花江が信じるかはともかく

として、一臣が花江の存在を知るとは彼女にとっても圭一にとっても好ましくないことになるだろう。御門家にはいくつかの不文律があり、そのうちの一つに「一般の人間との結婚を禁止する」というものがあつた。ここで言う「一般の人間」とは「力」を持たない人間のことである。

圭一からすれば馬鹿馬鹿しいことだが、御門家は異能の力を守るために外部の血を入れることを固く禁じているのだ。圭一の母も、御門家の分家である冷泉家に連なる血筋の者である。

彼が現時点で花江と結婚する気ではないにしても、父に会わせたりすれば当主として何だかんだと口を出してくるだろう。圭一が普段から不真面目で「真剣な交際」に縁がないことと、彼の兄が優秀であるがゆえに今は目を瞑られているに過ぎない。

もし圭一が全くの無能であつたらまた話は違つたのだろうが、不運にも彼は才能だけはしっかりと受け継いでしまつていた。もつとも、全くやる気のないこんな性格のせいで、一臣も息子を持て余しているのが現状だつたりするのだが。

「それはそうと、ケイ」

「何？」

「先に言っておくけど、私のこと置いて一人でふらふらしたり、知らない人についていたりしないでね」

「え？何それ？俺そこまで駄目人間じゃないし」

「いつつも待ち合わせに来る途中に違う場所で遊び始めたり、そのままダキヤンしたりするのはケイでしょ！ただでさえ方向音痴なんだから、知らない場所でそういうことはしないで！」

「知らない場所って、俺一応住んでたことあるんだけど」

「何か言つた？」

「いえ、何でもありません」

完全に尻に敷かれている圭一であつた。

「もう、本当に真面目に聞いてよ。最近、猟奇殺人みたいな事件があつたらしいし　夜にふらふらする癖も、やめた方がいいよ」

「お前、心配しすぎだつて。俺だつて夜の外気に身を晒したい時があるんですー」

「意味わかんない」

「うん、俺も」

「……」

本気で眩暈を感じた花江を責められまい。付き合い当初より慣れたとはいえ、未だに圭一が本心から言っているのか、それとも何も考えていないのかわからないことがある。まあ、おそらくは後者のだろうが。

「圭兄？」

驚いたような声に二人が視線を向けると、制服姿の晴菜だった。

「あれ、晴菜じゃん。久しぶり」

「こんにちわ」

花江の方は初対面なので、女同士挨拶を交わす。圭一が突然やって来た事情を簡単に話すと、晴菜は小首を傾げた。

「圭兄、兄さんには会って行かないの？雅兄はいないけど」

「あー、いいよ。あいつ小うるさいから、苦手。俺より親父に似てるよな」

「そ、そうかな」

「うん。それより晴菜さー、気をつけるよ」

と、圭一はいつもの気の抜けた無表情から、珍しく真顔で従妹を見下ろす。

「圭兄？」

「夜は一人で出かけるなよ。つか、家から出ないこと推奨。勝手にふらふらしたり、知らない人についていたりすんなよ」

「つて、それ私がさっき言ったことじゃない」

「あ、ばれた？」

花江のつつこみに、圭一はへらりと笑う。

「だつてお前がやたらに心配するから、俺まで心配になっちゃつて。俺の可愛い晴菜が変態の餌食になったらたまないでしょ」 晴菜、

「わかった？」

晴菜はじつと圭一を見つめ、こくりと頷いた。

「……ケイったら、珍しくまとも」

「これが見納めにならないといいけど」

「それ、自分で言う？」

花江は恋人の顔を見上げ、何度目かもわからない溜息をついた。

「俺を殺してくれ」

唐突な刹那の言葉に、羅刹はまじまじと相手を見返した。

「どういう意味だ？」

「意味？」

刹那は苛立ったように目元を険しくする。

「わかんねえのかよ。俺は負けた。人間なんか……人間なんかに！」

「ごん、と拳で床を叩く。一瞬、床を突き破るのではないかと冷やりとしたが、そんなことはなく、硬い音が響いただけだった。

「落ち着けよ、そんな下らないことで死ぬなんて」

「下らないだと？」

殺意のこもった目で睨まれ、羅刹は口を閉ざす。

「……俺は、炎鬼だ。一度ならず三度まで同じ相手に負けて、おめおめと生きていられるか。一族の恥さらしになる気はねえ。負けたと知られるくらいなら、死んだ方がましだ」

随分と、極端な考え方だ。

刹那が「強さ」というものにこだわっていることは二度目の遭遇から薄々感じていたが、負けたからと言って自ら命を捨てたがる程とは思わなかった。この潔さはある意味、自分と対極にあるな、と羅刹は頭の片隅で考えながら、口の端を吊り上げる。

「負けたって知られたくないなら、黙ってればいいだろ」

言われた刹那は、ぽかんと口を開け、それから怒りに顔を歪めた。
「てめえ、馬鹿にしてんのか!？」

「何で怒る？お前のプライドを守るために、解決策を教えてやってるのに」

「そういう問題じゃねえよ！」

「じゃあどんな問題だよ？」

「糞野郎が！いい気になりやがって。お前に何がわかる!？ぬくぬくと生きてる人間風情が!!」

「何とでも言え。大体、何で俺が負け犬の頼みをわざわざ聞いてやらなきゃいけない？死にたいなら勝手に一人で死ね」

配慮も何もない羅刹の言葉に、流石に刹那は絶句する。何かを言いたげに口を動かすが、言葉が出てこないようだ。

その様子に、羅刹は失笑する。

「まあ、お前に自殺はできないだろうけどな。知ってたか？自殺するのは弱い人間じゃない。この世に自分が生きる意味は何もないと合理的に判断できる、ある意味で強い人間こそが死ぬんだ。俺の言葉にいちいち腹立てるプライドがあるうちは、諦めて生きるんだな」
「……つまりお前は、俺が死ぬにも値しないほど弱いつて言いたいわけか？」

「少なくとも、自分で死ねないからって『人間風情』に殺してもらおうとする奴を強いとは言わないだろ。そんなんだから、俺にも負けるんだよ」

言い終わるか終わらないかというタイミングで刹那が立ち上がり、羅刹をベッドに押し倒した。馬乗りになり、両手で首を絞めつける。
「なんで俺が　お前なんかに　!!」

意外だったのは、首を絞めつける力が思いのほか弱かったことだ。手加減しているというより、単純に力が入らないように感じられた。そしてもう一つおかしいことは、何かに視界を遮られているわけでもないのに、何故か刹那の姿が人間にしか見えなかったことだ。先程やり合ったことで、かなり消耗しているのかもしれない。

いずれにしる黙ってやられてやる義理は無いので、思い切り跳ね飛ばしてやると、刹那は背中から壁にぶつかってそのままずるずると床に崩れ落ちた。

羅刹が軽く咳き込みながら上体を起こすと、項垂れたまま「俺は負けたりいけないだよ」と掠れた声で呟くのが耳に入った。今までの態度からは想像もつかないほど、弱々しい声だった。

「どうしてそこまで、勝ち負けに拘る？」

単なる負けず嫌いとも思えずそう訊ねると、刹那は「それしかないからだよ」と吐き捨てた。

「勝ち続けることが、俺の存在意義だ。人間如きに負けるような奴は、お呼びじゃない。親父の息子である資格も……生きてる資格なんかないだろっ」

「じゃあお前が死んだら、お前の父親はお前を誇りに思うのか？むしろ失望するだろ。『こんな貧弱な精神しか持つてなかったのか』って」

「うるせえ！知った口利いてるんじゃないよ！お前にわかるのか？一番大切にしてたものを、それを屁とも思っていない奴にへし折られる気持ち、お前にわかるのかよ！」

「大切なら、そんなに簡単に捨てるな！！」

怒鳴り返されるとは思っていなかったのか、一瞬、刹那の口が止まる。何を熱くなっているのか、と冷静な自分が考えるのを感じながら、羅刹はたたみかけるように言葉をぶつけた。

「お前がそれを捨てたら、誰かが拾ってくれるのか？代わりに大切にしてくれるのか？へし折られようがばらにされようが、それを元に戻すのはお前にしかできないことじゃないのか？」

……わかつている。

こんなことを言えるほど、羅刹は大層な人間ではない。昔の不愉快な記憶を忘れられる強さも、自分を傷つけた相手を許す強さもない、脆弱な人間だ。だからこそ、言わずにはいられなかった。

刹那が肉親かもしれない、ということは関係なく、誰かが内面の

弱さに負けて崩壊する様など見たくなかった。一步間違えば自分もそうなるかもしれない、そんな事態を目の当たりにすることに、恐怖を感じた。だからこれは、刹那を自分に置き換えて、抗っているにすぎないのだ。

刹那の方は、何とも言い難い奇妙な表情を浮かべて、押し黙った。不自然な沈黙の後、口籠るようにして「変な奴だな、お前」と反応に困ることを言う。

「……お前は、本当にそう思うか？俺にしかできないことがあるって」

妙に縋る様な口調だった。言ってから、苛立ったように舌打ちし、羅刹の返事を待たずに立ち上がる。

「俺としたことが、つまんねえことを……おい、てめえ、俺ともう一度戦え」

「はあ？」

「何だその顔は！勝ち逃げしようったってそうはいかねえんだよ！」「勝つまでやるって、子供かお前は。しかも今やつてもまた負けると思うぞ」

「ふん、そこまで俺も馬鹿じゃねえよ。今はやらねえ。力を取り戻して、俺が納得できる強さを手に入れたら、改めてお前をぶっ殺す」
非常に迷惑な宣言である。結局、刹那に付き纏われることから逃れられそうもない。

げんなりしていると、何やら不満げな顔で、

「代わりと言っちゃなんだけだよ、俺にして欲しいことが何かあったらしてやるぞ」

「……急にどうした？」

「うるせえな！負けた以上、一つくらいは言うこと聞いてやるって言ってるんだよ！鈍い野郎だな！」

余程、「負けた」という単語を口にしたくないのか、苦々しげな口調である。不覚にも、羅刹はその顔に嘖き出した。

「お前って、結構可愛い奴だな」

笑いを噛み殺しながら言うと、憤怒の形相で睨まれた。

「てめえ、こつちが下手に出てりやあつけあがりやがって」

「待て、いつお前が下手に出た」

「うるせえ！いいから何か考えろ。これじゃ俺だけが必死になってるみたいじゃねえか」

そのとおりだろ、と口に出すとまた暴れだしそうなので、何がいかと思いを巡らせる。

「もう俺に絡まないってのは」

「ああ！？」

「…無理だな」

わかつていたことだが、そこまで力強く反応されると若干脱力する。

「お前にして欲しいことなんて、特にないんだけどな」

第一、頼んだら頼んだでまた何か面倒なことが起きそうな予感がある。刹那は苦虫を噛み潰した様な顔で何事か考えていたが、やがて「わかった」と言った。

「今すぐ考えつかないって言うなら、時間をやる。一週間以内に決める。俺がここに居るうちにな」

「いや、帰れよ。ここに居るとか、勝手に決めるな」

「俺だつて居たくて居るんじゃないよ！お前のせいで妖氣を使い果たしちゃったから、回復するまでは帰れねえんだよ。責任とれ」

「知るか。何で俺がお前を住まわせてやらなきゃいけないんだよ。

図々しいにも程があるだろ」

「あーうざつてえ！とにかく俺はもう決めたんだよ！てめえが何と言おうと、絶対帰らねえからな……もし力尽くで追い出そうとしやがったら、てめえの正体、あの退魔士にばらしてやるからな」

あの退魔士、というのは晴久のことだろうか。そうこられるとは思っていなかったため、少しばかり動揺して言葉に詰まる。

刹那はしてやったり、という風に笑って見せた。

「決まりだな。精々じっくり考えろよ、人間」

色々と言いたいことも考えなければならぬこともあつたが、それらをひとまず脇に置いてまずは空腹を満たすことにした。昼から何も食べていない。一応、刹那に何が食べたいかと訊くと、「肉」と一言で答えが返ってきた。

羅刹は顔を顰める。

「却下」

「何でだよ」

「何でもだ。それよりお前、ここにいる間、人間に喧嘩売ったり襲いかかったりするんじゃないぞ。当然、食うのも禁止だ」

「ふん。まーだ人間の仲間のつもりか、てめえは。往生際の悪い奴だぜ」

擲掬するような刹那から、視線を逸らす。

「お前が御門家の退魔士連中相手にして、無駄死にしたいなら止めないけどな。言っておくけど、俺は助けないぞ」

「お前に庇われるほど落ちぶれてねえよ。心配しなくても、面倒は起こさねえ」

「本当だろうな」

「しつこい野郎だな。何で俺が言い訳しなきゃいけないんだよ。つか、襲いたくても力が戻るまでは襲えねえし」

「襲えない？」

「てめえのせいだろ」

言わせるか、と睨まれる。

「お前の攻撃を防ぐのに、妖力のほとんどを持っていかれたからなおかげですっからかんだ。存在を保つてられるだけマシだけだな」
「……よくわからないけど、つまり今のお前は普通の人間レベルで何か？」

ふてくされた様な沈黙が返ってきた。つまり、そういうことらし

い。

それにしても疑問なのは、刹那の、というより妖魔の肉体構造である。今回は勿論、一週間前などは見た目にも酷い怪我を負わせたはずなのに、なぜか再会した時はどう見ても五体満足に戻っていた。人間の数倍の回復力を持っているのか、そもそも肉体の仕組みからして違うのか。

そのことについて訊ねてみると、「人間のやわな体と一緒にするな」と無駄に喧嘩腰な反応が返ってきた。

「俺達の体は、人間の体とは違う」

「違う？どんな風に？」

訊くと、あからさまに面倒くさそうな顔をされるが、それでも勝ちを収めたことが効いているのか、洪々といったように口を開く。

「人間はあれだろ、体に穴が開けば死ぬだろ」

「ああ」

「俺達は違う。人間どもみたいに換えのきかない体一つきりじゃ、戦い続けるのはきついからな」

「……もう少しわかりやすく言えないのか、お前は。分身の術でも使えるのか？」

「使えるわけねえだろ。馬鹿か、てめえは　いや、使えるっちゃ使える奴もいたな。まだくたばってなきゃ、だけど」

刹那は嫌なことを思い出した、というように眉根を寄せる。

「つて、んなことはどうでもいいんだよ。つまりだな、俺達にとって肉体の損傷は、イコール命に關

わることじゃない。つーか、厳密に言うとな俺達には体がない」

「体が、ない？……そんなわけないだろ。じゃあ、目の前にいるお前は何なんだ」

「これはこの次元に対応した……なんつうの、飯の姿ってやつか？それだ、それ」

「飯？わからないな。だとしたら、本当の姿はどうなってる？」

「だから言ってるだろうが。体はない。俺達はいわゆる意思を持つ

た霊体、意識体、エネルギーってところだ。無理やり説明するとすれば、な」

「霊体……？」

俄かにオカルトじみた話になってきた。

羅刹は、漠然と妖魔のことを人間と同じように血肉の通った生物と想っていたのだが、刹那の口ぶりではどうも違うらしい。と言っても、刹那が動いて喋っている姿は極めて人に近いし、急に霊体だの意識体だのと言われても実感が湧かない。

「でも常盤や伊織を『狐』って呼んでただろ。あれはどういうことだ」

妖魔が肉体を持たない存在だとしたら、現実にいる「狐」という生物の名称で彼らを括えることは不適當に感じられる。

その疑問に、刹那は得意気な顔をした。

「そこが俺達と他の雑魚どもの違いだな」

「……は？」

「は？じゃねえよ！てめえ話聞いてねえのか」

「お前の話がわかりずらいんだよ！」

「ちっ、面倒なやつだな」

こっちの科白である。

「俺達は、この世界の裏側の次元で生まれた」

「……」

「こっちの次元と違って、向うはしょっちゅう歪んだり混ざったりするんだよ。だから俺達は変化に耐えられるように固有の体を持たないで、意識だけで存在してる。ただ、こっちの次元に来る場合、今度は肉体がないと消滅しちゃう。だから自分に合った体を探す。で、こっちでの体の名前ですれぞれ呼び合ってたんだよ。常盤や伊織は、狐だな。あ、天狗共のことを『鳥』って言うって切れるから気をつけるよ」

「じゃあ鬼は？」

何の動物の体を借りているんだ？

言葉足らずの疑問は、しかし刹那には伝わったようで、だから言っただろ、と乱暴に言い返される。

「俺達は他の雑魚共とは違う。体なしでもこの次元に存在できる。人間っぽく見えてるのは、この次元で行動しやすいようにそういう形を取ってるだけの話だ」

わかったようなわからないような説明だが、更に追及したところで理解が深まると思えないのでより現実的な問題の方に話題を移す。

「それよりここにいる間、どうするつもりなんだ。知ってると思うけど、お前の天敵の退魔士は俺の友人だし、御門の本家も近くにある。どうやって隠れるつもりだ」

「……隠れる必要なんてねえよ」

どこか苦々しく言う刹那に、羅刹は意外な印象を受ける。てつきり、「どうして俺があいつら相手に隠れなきゃならないんだ」と喚き立てると思っていたのだ。

疑問を察したのか、刹那は刺々しい視線を向けてくる。

「お前のせいだよ。お前とやり合ったせいで、ほとんど妖力……俺を構成してるエネルギーを使い切ったもんだから、今の俺には退魔士どもに察知される最低限の妖力さえ残ってない。てめえならわかるだろ」

そう言われてみると、目の前の刹那からはあの圧倒的な妖気の欠片も感じられないし、何より容姿すら人間にしか見えない。

ということは、羅刹含め妖魔が見える人間というものは、妖魔の隠している実体が見えるというよりも、本来こちらに存在しないエネルギーを感じ取りそれを人と異なる容姿のものとして視覚化している、という方が正しいのかもしれない。

そして今の刹那の状態は、感知できる最低レベルのラインすら下回っているということだろう。

もっとも、この推論が正しいのかどうか確かめるすべはないのだが。

「……もしかして、お前ずっとそのままなのか」

「あ？冗談じゃねえよ。この俺が雑魚狐以下の底辺に甘んじてるわけねえだろうが。二週間もあれば元に戻る。その後はリベンジだ。首洗って待ってろ」

「……」

反射的に頭に浮かんしたのは、やはり刹那を始末しておくべきではなかったか、という無情な考えだった。

つい鼓舞するようなことを言ってしまったが、冷静になってみれば刹那を立ち直らせることにメリットはなかった。始末はやりすぎにしても、あのまま放っておけば少なくとも刹那からの脅威は無力化できたはずだ。それを思うと、自分の対応に舌打ちしたくなってくる。より正確に言えば、自分の中途半端さに。

刹那に言ったことは全て本心だった。そして結果的に励ます形になってしまったが、その舌の根も乾かないうちにこうして自分の利益を計算している小賢しさは、我ながら失笑ものである。一体、何をやっているのか。先程の事に限らず、羅刹の今までの行動や選択は全て、流されたその場しのぎのものに過ぎない。

自分自身が何者か、何者であるべきかということに、根本的な疑問を感じているせいだ。

確固たる信念がないから、その時々で感情と計算が交互に顔を出し、どちらも貫き通せない。そしてこうして段々と厄介な立場に追いやられている。

刹那を単なる邪魔者と捉えられない。それは家族というもののへの憧憬のせいでもあるし、一つの信念のために命を捨てられる、ある意味での真摯さに敬意を抱いてしまったからでもある。羅刹には何も無い。ただ生きているだけだ。そんな不甲斐ない自分をどうにかしたいと思いつながら、どうすればこの虚しさを埋められるのかわからない。

「おい」

刹那の短く鋭い声が、思考を遮る。顔を上げると、やけに真剣な

視線にぶつかった。

「忠告しておいてやるから、ありがたく聞けよ　あいつらには気をつける」

「あいつら？」

「あの女のことだから嘘だって可能性もあるが、もし本当だとしたら俺とやる前に乗っ取られちまうかもしれないしな」

「ちょ、ちよつと待て。何の話をしてるんだ」

刹那は、呆れ果てた、と言わんばかりに口をへの字にした。

「黒鬼の話だよ」

「黒鬼？お前の仲間か？」

「　　んなわけあるか」

明らかに不機嫌な雰囲気を漂わせる刹那に　もともと常に不機嫌そうな顔つきの男ではあるが　羅刹は口を噤む。怒りを買うことを恐れたからではなく、発言の内容を咀嚼するためである。

「……あの女つていうのは、もしかして常盤のことか？」

刹那はそつけなく頷いた。

推測するに、黒鬼、とやらが羅刹に危険を及ぼす可能性があるから気をつける、と言いたかったのだろう。それにしても順を追って話すということを知らないやつだ。溜息を漏らしたくなるが、そんなことをしても目の前の男が改心してくれるわけもないので、こちらが想像力に鞭打つしかない。

「乗っ取るつてのは？」

「つまんねえ話だよ。さつき言っただろ、妖魔がこっちに来るには、こっちの生き物の体を借りなきゃいけないって。で、黒鬼の連中は、人間の体を使うんだよ」

「でも鬼にはそんなものは必要ないって言ってなかったか？」

「俺達には必要ない。奴らは違う」

大声ではなかったが、そこに込められた軽蔑と敵意は疑いようがなかった。

羅刹は、暫しの熟考の末、仮に彼らが近くにいるとしても目をつ

けられる心当たりは無い、と言った。いくらかは、そうあって欲しいという願望が言わせた言葉だった。刹那は、冷酷とすら形容できそうな無頓着さでもって、理由ならあるさ、と言い放った。

「俺がここにいる」

「……それが？」

「連中と俺達は、敵同士だ。身の程知らずの馬鹿どもが、妖魔の宗主に相応しいのは自分達の方だと思ってやがる。体がなきやこつちの世界でもまともに動けないくせに、くそ忌々しい」

「つまりお前がここにいることがばれたら、黒鬼はお前を殺そうとするってことだな」

そして羅刹もその争いに巻き込まれる可能性は大いにある。気の重い話だ。

刹那は沈黙した。屈辱のあまり、声を発することもできなかったのだ。彼にしてみれば、羅刹に敗北したことも、どうかすれば下級妖魔にも劣る惨めな現状にも、最も負けたくない宿敵から逃げ回らなければならぬことも、それを人間に白状せざるをえないことも、何もかもが覚めない悪夢そのものであった。

「そんなに心配しなくても、ここで大人しくしていれば気づかれないうだろ。それともお互いを探知するセンサーみたいなものでもあるか？」

「俺は心配なんてしてねえよ!!」

「……」

「てめえ俺があんな蛆虫どもに怯えて震えてると思ってるんじゃないやねえだろうな？何人来ようと、小指の先で片づけてやるよ」

「だから、」

「勝ったからって調子に乗ってんじゃないやねぞ！忘れるなよ、てめえは後二週間の命なんだからな！」

「わかった。わかったから、大声出すな」

近所迷惑であることを抜きにしても、刹那の大声は耳に響く。どこかの応援団にでも引き取って欲しいくらいだ。

「二週間経つ前にお前がやられたら世話ないだろ。そもそも、その情報は正確なのか？」

「……常盤はそう言ってたけどな。一週間前、お前にやられた後だから、はつきり覚えてる」

一週間前、と機械的に反復して、羅刹は戦慄した。

それは彼がああグロテスクな夢を見た日、公園で少女の死体が見つかった日だったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0897i/>

羅刹の宴

2011年3月31日22時55分発行